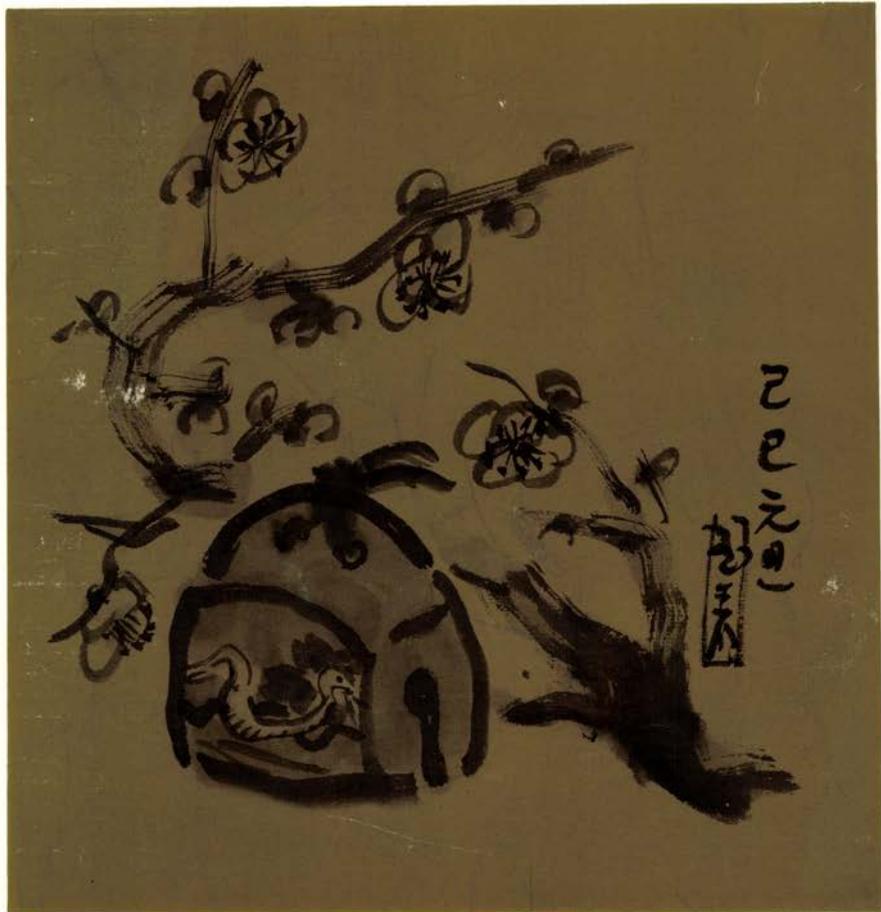


# 川柳塔

一九八八年十一月二十五日  
一九八九年一月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷七四〇号



日川協加盟

No.740

同人特集・私の一句  
一月号

黒川 紫香

尼崎市文化功労者賞受賞記念

# 本社一月旬会

日時 1989年1月7日(土) 午後6時

会場 メンズファッションセンター3階

大阪市東区内本町一―電話06(941)1918  
地下鉄「谷町4丁目」下車(2番出口)交差点西南角

☆短冊交換会(一人3点以内)

☆63年月間賞杯授与と全出席者表彰

☆63年愛染帖賞、茴香の花賞表彰

おはなし

阿 萬 萬 的

兼題 「香」

黒 川 紫 香 選

「紫」

西 口 い わ る 選

「川」

河 内 天 笑 選

「黒」

西 尾 栞 選

席題 2題 各題3句 締切7時

会費 五百円

1989年

# 川柳塔社新年会

日時 1月15日(祝) 午後一時開会

会場 大成閣(和室)

大阪市南区大宝寺町中之町二六  
(心斎橋大丸とそここの間を東へ約百米)  
電話 06(271)5230

挨拶

西 尾 栞

兼題

「福」 小 林 由 多 香 選

「ありがとう」 西 山 幸 選

懇親宴

会費 六千円

◎坂本仙吉郎句集「ふたり旅」を出席者に  
謹呈

同人・誌友を問わず多数ご参加下さいますようお願い  
待ちしています。

川 柳 塔 社

## 新年 西尾 葉

一ヶ月先取りの雑誌の巻頭言を書く者にとつて、正月号を十二月に書く時ほど気分のないものはない。

況して、陛下ご不例の折柄、賀す、慶ぶ等の言葉は自粛しなければならぬ。

然し、新年号には新年号の挨拶を申さねばならない。始めてのこととて、むずかしい限りだ。

新しい年を迎えて、新年のご挨拶を申上げます、旧年中は柳誌並に同人一同大変お世話になりました、本年も倍旧のご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げます

一月元日

昨年十二月号に、皆様を代表して、私は受章したことを書き、大変な光栄と川柳浮上を嬉しく思ったことだが、沢山な人の中には、色々と批判する方がるので、或る冊子の一

節を転載したいと思う。

「作家の永井荷風さんが『ウナギは万人ごとくとく、うまいと思つて食うものとなせば大なるあやまりなり。勲章は誰しも欲しがらるものとなさば、更に大なるあやまりなり』といささか勲章を軽蔑さみであつた。ところが昭和二十七年に自分が文化勲章をもらうことに決つたときには、朝早くからソワソワ、自動車の子約までして待つていたが待ちきれず、とうとう歩いて会場へ駆けつけたことは有名な話である」。

というエピソードであつた。

前に書いたように、私個人がいただいたものでなく、川柳界発展のためにいただいたことを申し上げて、何卒ご理解下さいますようお願いして本年の挨拶と致します。

豊明殿 妻と伺候の菊日和

記念写真お車寄せの広さかな

豊明殿しずしずと行く臣葉



座右の句

人恋し人煩わし波の音

( 萩 )

私の句

雑草と私と今日も根くらべ

津村 八重子

# 川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

新年	西尾 栞	(1)
歳を重ねて	黒川 紫香	(2)
川柳塔 (同人吟)	西尾 栞選	(4)
自選集	東野 大八	(32)
■川柳太平記 (128) 川柳の群像 北川春巢	阿達 義雄	(36)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (三十九丁)	黒川 紫香選	(38)
『武玉川』には前句附の句もある	黒川 紫香選	(40)
〈同人特集〉 私の一句	黒川 紫香選	(42)
水煙抄	佐野 白水	(35)
秀句鑑賞	青戸 田鶴	(77)
同人吟	橋高 薫風選	(74)
水煙抄		
愛染帖		

## 歳を重ねて

黒川 紫香

年が変わりまして元旦を迎えますと、矢張り心が引き締る思いが致します。

よく此処まで生きて来たのだと考える事があり、父は六十六歳、母は六十八歳、そして私は八十二歳になりますが、残念ながら妻は四十歳で此の世を去りました。

私事で恐縮ですが、昨年十一月二日、尼崎市から尼崎市文化功労賞を戴きました。これも歳を重ねた結果であり、市在住の皆さん、そして川柳を通じてお力添え下さる全国の皆さまのご声援の賜物であると、つくづく感激して居ります。

その授賞は、市役所の特別室で型の如く行われ、市長を中に挟んで三役その他、市の偉いさんたちの居並ぶ前で行われました。

受賞者三人(洋画・短歌・川柳)の中で、私が年高という訳でお礼の言葉を申し上げたのをはじめとし、式後の市長との対話は専ら私に集中し、概念的な川柳談義に終ったのですが、最後に市長が私の顔をつくづくと見て「先生は報告書によれば八十二歳になられたようですが、顔の色艶と言い、お元氣な様

女性コーナー	苗香の花	小出智子選	(78)
63年度	愛染帖賞受賞作品		(80)
63年度	苗香の花賞受賞作品		(81)
句評リレー	新家完司・月原宵明・牛尾緑良・辻白溪子		(82)
言いまわしの個性(七)	自分史に連れ添う語彙	竹内紫鏑	(86)
郵便夫ルーラン		東野大八	(85)
■句集紹介	林野甦光句集『里の灯』	榎田英詩	(88)
初歩教室		阿萬萬的	(100)
「誓い」		恒松町紅選	(102)
一路集「待つ」		櫻谷寿馬選	(102)
「敵」		越智一水選	(103)
柳界展望			(104)
本社十二月句会			(106)
各地柳壇(佳句地10選/高田博泉)			(117)
■1月各地句会案内	131	■編集後記	133

座右の句  
揚雲雀迦陵頻伽となりおおせ  
私の句  
夕立して空はちつとも濡れていず

(薰風)  
栗谷春子



子なのでお若く見えますね。  
と言われたので、咄嗟に、  
「お蔭様で川柳をやっていますと、毎日が忙しく、病気をしている暇がありません」と答えると、市長はじめ周囲の人たちも大笑いとなりましたが、その後の市長の言葉がふるっていました。  
「ああその心が川柳かも知れませんな。再び爆笑となり、和やかに終ったのですが、この時ばかりは、歳を重ねた喜びをつくづく感じた一日でした。」



西尾葉選

大阪市 西出楓楽

子を持たぬ人で得意な育児論  
自転車でまわれるだけのテリトリ―

呉服屋で尺貫法はしたたかに  
一億は半端な金になりました  
無印良品そういう人になりたいな  
独身がみんな貴族と限らない

紙コップとつても寒いひとり旅  
桜井市 岩本雀踊子

少し寂しい秋が好き哲学者  
日めくりめくる一枚ずつにある命  
昔が残る小さな村のぬくもりに  
あやまちのある人間で親しめる

気短かに少しなつてた十二月

和歌山市 西山幸

朝を出る今日のわたしに逢うために  
満員電車鞆が大きすぎないか

鍵を光らせ小さい城の主になる  
ていねいに拭く 人を待つ椅子だから  
充足やきょうも日替わり定食で  
疑問符が点りはじめる街あかり

美禰市 安平次 弘道

真実がこわくて探す修飾語  
もぐら叩き他人の痛さ考えず  
影武者が笑い袋をあけたがり  
愛社心タイムカードは保証せず  
一人立ち苦手で戻るブーメラン  
臓器移植とても悲しい喜劇だな

岡山県 嘉数 兆代賀

コスモスが首をかしげている不倫  
師走風避けて通れぬ道ばかり  
その場しのぎの傘も破れた十二月  
ふろふきの湯気やわらかく冬を煮る  
まつすぐに生きて生傷が絶えぬ

目かくしをされて枯野の果てしなし

松原市 谷垣史好

ちよっかいを出したあんたがアホなんや

ひとりだけ育ちが違うメロンパン

「御座候」に並ぶ善男善女かな

いつどこで貰ったものか袋菓子

元号がどう変ろうと御名御璽

一周忌あの日もこんな小春日で

平田市 久家代仕男

歙の柄が抜けて一日ふさぎこみ

里芋にベトドクちゃんの多いこと

ロボットよお前に草鞋編めまいて

コケシには二重脛が見当らぬ

内定に油断は出来ぬ社の景気

情報に耳貸すだけで気が疲れ

兵庫県 遠山可住

不自由な指だが盃なら持てる

帯ポンとたたき二十歳になりました

しあわせな国で貧しく生きています

尼さんの手にかき餅がよくふくれ

空一パイの地図を広げた渡り鳥

コスモスが咲くとささやく文学碑

神無月一人は熱を出している

還暦でないと言いたし言いにくし

和尚さんの袋で鳴った電話ベル

弘前市 波多野五楽庵

熟れきったシヤネルを質す妻の鼻

四捨五入できぬ女の一円貨

反対と叫ぶマイクが雨の中

八尾市 高杉鬼遊

落石注意この道よりも他になし

テレホンカード百枚もつて友がない

意地ひとつ天邪鬼にも天がある

生きるのも難儀死ぬのもお難儀

余命いくばく思いだしては竹を踏み

めでたいともう思わないお正月

松江市 恒松町紅

畦道も野良着も老いて柿たわわ

半端ではすまぬ律義なあわだち草

寝たきりへ昔話はたんとおる

軸替えて平凡な古い春迎う

虫除けの菰公園も冬仕度

束ね髪亡母に似てきたらつきよ漬

大阪市 西森花村

存在感四百四病と八百よろず

先生もお年本気でばやきはる

和尚さん後で端唄も聞かせます

元社長一度は持ちたい竹ほうき

お家はんが若くて明るい笑い声

記憶力生徒の数と給料と

一滴も残さず酌いだ赤ラベル  
和歌山市 福本英子

龍村の帯正月の遅いこと

男の子ですと受話器の声弾む

嫁ぐ娘へ父は金魚に餌をやる

母と子の絆へ伸ばすくさり編み

合鍵を預けた日から近寄らぬ

別々に住んでる家族で墓洗う

この先の命きれいな花づくり

見込まれて妥協しないことにする

母の線どうしても越えぬ塩加減

欲のない笑顔に他人が寄って来る

遊びごころ過ぎたある日の立ちくらみ

島根県

堀江正朗

見えた日を追っかけている漫画だね

数珠くつて心に埋めていく涙

聞き違えては相づち打ち損ね

想い出は空想となり続く闇

閉じた眼を少年の日にもどす山

深呼吸足はくの字で耐えている

米子市

鳳仙花爆ぜて転生はじまりぬ

母に似た指いとしとも哀しとも

心が寒くて街を出るのか君も

原色が揃えば恐い絵が描ける

鉛筆を持つときの指ひたすらに

空き缶と転がる儘に街に居る

八尾市 宮西弥生

奈良市 宮口笛生

月給も借金も無く十二月

十二月金の成る木が育たない

スーパーへ二人っきりの買物に

十二月話半分聞いておく

適齢期二人持つてる悩み聞く

十二月小判の壺でもでてこんなか

和歌山市

漬物の重しぐらいの役もらい

生きている証に年賀状を買う

屁理屈を聞いて理性をとり戻す

菊の咲く庭へ嫁御の荷が届く

サラ金の看板やけに目につく日

拓本にとって手本にする隷書

和歌山市

二十一世紀へ思いをつなぐ糸電話

落日へ影が大きくなる夫婦

無理解と理解の隙間から風

筋書にバカな男と書いてある

ベストセラー買ってあります本棚に

献体の尊さがある手術台

玉野市

法の枠の中で騙し舟を折る

時間まだあるうどんなでも食べようか

いつもならせわしきはすの十二月

笑われて居ても青虫我を通す

小谷仙山

堀端三男

牛尾緑良

正確な時計で後悔ばかりする  
お掃除のおの字はいらぬ男世帯

鳥取県 松下 たつみ

長寿の一日だけを笑いこけ

鳥一羽小さな庭の秋拾う

切札のひとつ出口を捜してる

世を捨てた落葉と風は仲がいい

愛情を妻に示すに金が要り

夕やけをカラス昔の空にする

豊中市 田中正坊

大器にはならなくてよし孫を抱く

昨日までたしかにあった砂の塔

味方から吹矢がとんできた誤算

末席の僕も言いたいことがある

中国の旅

王城の苑に真白き天女舞う(洛陽)

白鬚飄然 白居易の白き像(西安)

寝屋川市 稲葉冬葉

邪魔になるもの押入れにたんとある

輪の外にいてへのへのもへの書いて春

人脈が動いて消化不良なり

保護色に抱かれて鬼が育ちます

折りつづけて柘榴の実が落ちる

愛憎のはざまで齒科と神経科

松原市 北野久子

妻だけを写して帰るフルムーン

主婦達に夫こんなにもてている

乳ガンの話乳房に触れながら

腐っても鯛留袖を着て行こう

聴えないからゆっくりカニセせる

横道に逸れてもやはり鉢合せ

米子市 菅井とも子

お歳暮を今年はくれる部下が出来

手が出ない蟹で飲んでる別所帯

割引の元の値段も確かめる

水はけが悪くてうっ憤溜り出す

もう一度逢わねば話まとまらぬ

富士に似た山を誇りにして暮らす

岡山市 矢内寿恵子

均等法巳年の女の執念と

行列の稚児の歩幅に鈴が鳴る

あやとりの児の行末と老い先と

知ったかぶりで聞いているのはクラシック

古里がとどき団地も秋の彩

寿のふくさひとり弾む秋

下関市 石川侃流洞

巳の歳に生れて蛇が大嫌い

造船の唄がもどって海光る

昔ばなしいっぱいいためた自在鉤

易の灯とコンピュータが喰い違う

お経より演歌と仏壇言うてはる

堺市 中川滋雀

また歳をひとつ重ねてきた喜劇

ニンペンを付けると生臭くなる

うしろ指さされる悪もしてみたい

額ブチのうしろと決めてる訳でない

ひよっこりと来て颯爽と借りて去に

食欲の秋楽しむ人悩むひと

それぞれの夢ふくらまずティールーム

約束に生きていたらと付け加え

大夕映の向うに極楽浄土あり

最高の芸術です妻の皴

米作り励んでストレス溜める秋

イミテーションは装身具だけでない

風采が上からず銭は持っている

異状なしだからポツクリ症候群

自画像は4Bのタツチのままがよい

他所者に北や南と言われても

カニシヤボが仕掛火花のように咲き

風邪三日新聞折り目のまま貯まる

古本屋覗けば主人も読んでいる

今日の絵を如何書く髭を剃りながら

布団干す妻のたくましさを見たか

日の丸に風吹くばかり父が病む

松江市

柳 楽 鶴 丸

松江市

舟 木 与 根 一

京都市

松 川 杜 的

竹原市

小 島 蘭 幸

美しい刻が流れてゆく不倫

おもしろいことばかり言う男の子

速達を出してしばらく眠れます

胃カメラに保証をされた屠蘇の味

厄年へ新たにねじを巻きなおす

はげましの言葉を耳の奥に溜め

地下街へ夕焼け小焼けの歌がない

ライバルの土産が喉を通らない

アリランの演奏へ過去の引揚者

無神論の父が大安の日をえらび

受付で御本人ですネと念おされ

酒が出て無口の男が喋り出し

老人会になくはならぬ調子者

辞めてから妻のこのみの彩を着る

天皇がどうあろうとて稲を刈る

掌を合やす心になって日が暮れる

花街のさびれへ一兵卒思う

健康な母が憎まれ口を言う

古女房に欲しい染替え伸子張り

ぜんまいの切れた男のパチンコ屋

春よこいこいブランコ揺れている

シャボン玉割れると白髪増えていた

米子市

小 西 雄 々

柳井市

弘 津 柳 慶

今治市

越 智 一 水

名古屋

越 村 枯 梢

チャイム鳴る冷戦和解の糸口に

倉吉市 奥谷弘朗

アンテナと呼ぶ奥さんでよく出掛け  
好きだった母の位牌に熟柿供え

便利さにおぼれ汗を忘れかけ

居なければ淋しいくせによく怒鳴る

シベリヤを耐えたこの足見せてやる

島根県 小砂白汀

笑顔には笑顔を返す元朝の

せんだんの双葉を思う孫を抱き

柔らかい口調できつい風あたり

娘のための晴れ着残した母の忌よ

日だまりへ辿り着いた冬

仙台市 川村映輝

健康は身も心もはずませる

ポケットベル逃れる術を考える

先が見えて来たので早起きしています

お隣の奥さん綺麗でうきうきし

米不作柿はたわわに豊かなり

島根県 西村早苗

待ち呆け女の里も雪らしい

姫鏡少女が嘘を言い馴れる

逢えぬ日のあせりへ届く松葉ガニ

レジスタンス母に内緒で乗る夜汽車

齢とらぬ顔が仏間から見つめ

岡山県 土居耕花

八十年ひとつの顔を陽に向ける

カメ虫のあんな臭いで逢えますか

トボケ顔したまま河豚は作られる

幽霊の真似が上手な枯れススキ

冬眠の蛇は蛙の句を作る

米子市 林 瑞枝

輪袈裟して明るい法話聴いている

犬伴れてドラマチックに逢おうかな

テレホンカードより小さい名刺持っている

猛犬と書いて可愛いマルチーズ

産んだ子と背較べごっこ知恵ごっこ

西宮市 林 はつ絵

神さまが組んでしまったプログラム

新聞の活字が重い十二月

正月にニヒルの空よ極ゆく

コーヒーがわくわく匂い信じきる

朱の椀で雑煮がむかし語り出す

島根県 堀江芳子

妻妻と頼られながら聞く不満

悲しいな見えぬ眼詫びる夫の掌に

喜寿という駄々っ子回す妻の胸

お土産の値ぶみをされた旅帰り

心の眼洗え洗えともらう齢

大阪市 津守柳伸

唇が寒い自粛の渦の中

糠床を気づかう母の五十年

落ち込んでポックリ寺に迷い込む  
時差利用するキッチンのお文化  
清算のできる命はいとやすし

笠岡市 松本忠三

お互い到大正生れと言うだけで  
言いにくい事はわたしに言わせませす  
自尊心勝手気儘に動きよる  
禿がいい白髪がいいと惨めなり  
印籠を出しお忍びで来たという

呉市 横田英詩

百点を貰うと誰か誤解する  
医者を持たせて寒い日はたんと脱ぎ  
内気な波も碎ける岩は持っている  
ときめきの的あまりにも大きくて  
日本語を解する神と信じきり

豊中市 安藤寿美子

亡父に似た後姿を追い越せず  
親とおもい子とも思うて母看取る  
旅もどりうちのトイレやうちのお茶  
政治家の妻でないから茶がうまい  
秋日和 日本列島静かなり

松原市 玉置重人

すこし頑固で老人会に籍がない  
割り勘が一番好きな小ゼニ入れ  
まっ先に私が消えた消去法  
口髭が夜警の過去を物語る

平凡な幸せ三度の箸をとる

寝屋川市 江口度

いわし雲山の彼方に亡母が居る  
賑やかな包帯慰謝料つり上げる  
立志伝金の器にいわしのせ  
ポーナス日なせみなだまって歩くのだ  
苦勞買う実らなくても実っても

宇部市 平田実男

定年が近く月日のたつ早さ  
お隣の改築妻は偏頭痛  
すぐ本音言うから大臣にはなれず  
濡れ衣の紐をほどいてくれた母  
空港へ噂一足先に着き

鳥取県 川崎秋女

貧しさは言わぬ実りの秋の庭  
色付いてすこし華やぐうちの庭  
大根がグツグツと煮えて冬  
やさしさがほしくて通うポストまで  
あの日から三年泣かぬ女の瞳

大田市 藤田軒太楼

言外に匂わせ行き過ぎたしなめる  
無器用な亡父の越し方笑えない  
コーヒーでしゃべるに惜しい隠しごと  
あの時の弾み噂の種となり  
表面を無理に飾った猿芝居

和歌山市 松原寿子

心の紐すこしゆるめて猪口を干す  
海峡を渡って優しい胸に着く  
耳朶のうずきを癒す風に遇う  
揺れながら切れた電話の先を追う  
奪われてみたい想いを裁かれる

大阪市 河井庸佑

自信過剰自分の姿見失う  
捨て難い少数意見に眼をつける  
切り替えの効かぬ男で落ちこぼれ  
雪吊りに雪貯えている風情  
心機一転任地でうまい酒を汲む

米子市 石垣花子

念仏三昧心の奥はのぞかせぬ  
山椒の小粒にうっかり気を許す  
島紬台風通過の夜も織り  
古札へともつれない販売機  
笛吹いて波は港を眠らせぬ

七尾市 松高秀峰

どん底で育てた子らに花が咲き  
定年で賞味期間が切れかかり  
三ヶ日孫に泣かされ笑わされ  
居ごちがいか貧乏神が住み  
また一軒シャッターが開かず年が明け

西条市 片上明水

柿を干す正月までの日を算え  
新築の庭鈴虫を買ってくる

ひまわりが枯れて始末に手をとられ  
街の名がここから替り灯が暗い  
何もかも押んで食べる遍路旅

藤井寺市 吉岡美房

柿たわわ藤ノ木古墳開かれる  
銀杏散る程の寒さや御堂筋  
木枯しへためらい傷がうずき出す  
金借りに行く服装で未だ迷い  
社会鍋雪ちらついてよく入り

今治市 矢野佳雲

看板の背中のみせぬ人嫌い  
酒好きの人のお通夜で酔わされる  
枕元に制帽置いてある仮眠  
古里を悪くいう奴信じない  
キャッチボール壁としている一人っ子

高槻市 辻白溪子

病人の機嫌が見舞いを引き止める  
コーヒーへ誘う話題はたかが知れ  
宴会の最後は軍歌になる仲間  
パートとは思えぬ身装で団地出る  
休日に梯子を使う用が出来

伊丹市 榎谷寿馬

脚病んで路傍の草を避けてゆく  
競うもの無くて山茶花白く映え  
ポケットに住所を入れて出る散歩  
うっかりと年賀ハガキを買う喪中

囲碁などは知らぬパンダの白と黒

大阪府 黒田真砂

開けるまで夢ふくらんでいた包み  
目まぐるしい人の世の常柿たわわ

友訪えば萩が乱れる風が舞う

秋冷えの画廊独りの刻豊か

又一人友の訃を聞く秋桜

岡山県 時末一灯

腕時計外せばどつと出る疲れ

独居老の音色で柱時計鳴る

言いつのる女あしたの日本だな

恋破れ明るいルージユに変えている

知られてもよいから内緒話する

竹原市 森井菁居

萩の旅

白壁の町で昔の風に逢う

いにしえを味覚でたどるせいろそば

城山に佇てば野武士の声がする

まだ次のコースが欲しい思惟の旅

民宿で聞く方言が面白し

唐津市 田口虹汀

のっけからあつさり来られたら負けや

同じ手はもうプライドが許さない

永年の交際よって手が読めず

肩書もすっかりとれた露天風呂

松籟は流人の私語か島の宿

「君が代」を他人の後から大声で

国会で決められてくる他人事

デパート売り他人でないセリフ

他人の血毒味しているハネムーン

兵卒に他人名儀の金はない

唐津市 久保正敏

賞味期間空しく過ぎた寡婦の胸

シブチンに渡り窮屈する紙幣

浮気願望ありますにマルをつけ

仲人をリリースで済ます岩田帯

参加する勇気を募るきびだんご

唐津市 浜本義美

元旦の屠蘇に忘れる世事俗事

木の葉ふる裏高島の空遠し

古稀にしてまだ嚙られる瘦せた脛

世の変り男の頬をぶんなぐる

病院で読む週刊誌は念が入り

唐津市 浜本ちよ

パンの耳法一さんに気が咄め

山ぶどう秋の華麗を家で愛で

子は宝は多い方がよい

糠に釘一生母は打つだらう

街へ出る用も無いのに着替えて見

唐津市 山口高明

朝風呂の富岳へ喉が唸り出す

牡蠣鍋も良いなど謎を掛けられる  
男なら家の五軒も潰すやつ

靴下の穴から見える他人の貌  
自立する才女が君をつけて呼び

倉敷市 稲田豊作

一家の和祖父の喜ぶ語を探す  
面白く言えぬ律義な父の口

いと易く泣ける妻です善女です  
中流の誇りで暮らす日めくりよ

たまさかの帰郷虚飾の僕になる

大阪市 江城修史

楯となる妻あり温い飯を食う  
七五三親が目立ってどうするの

裏切られ裏切る枯葉舞う街に  
余生なお子らと離れて住む運命

亡師を偲ぶコーヒー少し甘くする

奈良市 天正千梢

金に惚れいびつな男について行き  
みなかみはあまごの遊ぶ清流で

原稿用紙巨万の富を考える  
憂き事は伏見の山へ預け置き

浮気は自由コーヒー店また替える

東大阪市 森下愛論

皆勤賞くれない程パチンコ屋  
独居暮らして人様に解け込めず

こんたんを女は察知座を外し

鏡よ鏡随分年をとりました  
ゆっくりと死角で動くかたつむり

忘年会古き手帖のスケジュール  
喜寿過ぎて諸行年常の日がつまり  
神戸市 仲どんたく

嬰鑠もまじる病院待合所  
水軍の末裔太鼓へ血が騒ぎ

総入れ歯珍珠の皿が造反す

米子市 政岡日枝子

大根を洗う物語だつてある

ガン検診魔女も秘かに行つてきた  
情を詰めたびっくり箱を差し上げる

踊らせておいて酒など呑んでいる  
恍惚の鼻はやさしい人が好き

橿原市 岩井本蔭棒

よその児のおもちやを見ては駄々をこね  
都会人雲など見てるひまがない

金もらいながら日本を悪く言う  
へびとかげご馳走だった敗走記

白百合の香りの中にある魔性  
守口市 羽原静歩

新春

土に還るいのちぞ初春の酒を汲む

幼稚園(二句)

洋蘭も日向ほこして幼稚園  
保母と一味違ふ保父の味

骨董の艶は明治か大正か  
コスモスに縁なし朝のコメをとぐ

羽曳野市 榎本吐来

妻の居ぬ夜は詩人の貌になる  
米不作よろこぶ国の裏表

中流の下に六十の箔がつき

晩酌で主役の顔を取り戻す

尼崎市 春城 武庫坊

古書展で少年倶楽部にある人気  
シルクロードの夢昇華した歓喜仏

ロボットの仕草を一度真似てみる  
署名簿が全て味方とみた誤算

木枯しに影法師から走り出す

尼崎市 春城 年代

物干し台で雲のかたちと少し立つ  
馴染み深い秋です柿の色づきも

窓の灯はぬくいばかりでないらしい  
文楽を娘とふたり行く待ち合わせ

買うはめになったというて買うて来る

岸和田市 植山武助

菊の苗買って優雅に暇埋める  
もう一年済んだか六十路の独り言

老妻は話題豊富な夜長なり  
又一人淋しい喪中のはがき来る

結局は孫に合わせた夜の膳

お正月蛇の穴にも酒そそぐ

もみじさえご遠慮申し薄く燃え

湧き水のつきぬ想いが有難い

吹きたらぬので二次会についてゆく

水少しさして議論をさまそうよ

十月十日おなかの児にも物語

年金でこまめに僕の像きざむ

仏身につかえ心を丸くする

帆を張って僕の力を試される

宴果てて貰って来たな玉手箱

湖底に咲いて語りつがれる物語

散り果てて裸木一から出なおそう

陽だまりを辿れば天へゆく小道

コスモスの風に亡夫から使ってくる

さわやかな亡夫の電波よ秋の空

鳥取県 土橋 螢

十二月の予定忘年会ばかり

天に舞う枯葉が雪をつれてくる

花道にきて儂さを知る宴

白い菊散ってその後は雪になる

北風の噂も雪も解けてゆく

大和高田市 岸本 豊平次

米子市 青戸 田鶴

米子市 田中 亜弥

米子市 澤田 千春

気前よくおごったお札を妻が聞き  
衰えた足が無理した山紅葉

歩こう会考古学者にした飛鳥

竈の火にあたって話した亡母恋し

姫路市 人見翠記

七十八歳九十八翁の手が引ける

九十八の翁と歩けば日本晴

九十八歳論文の書ける底力

好奇心私の虹を追いかける

好奇心年など忘れて翔んで居る

高石市 浅野房子

交錯する夢の中鳥が舞っている

染め重ねあなたの色になる私

かりそめの縁結んでは解けて行く

巳年の新春何かありそな武者震い

巳年には財布の重くなる話

大阪市 大塚節子

知恵の輪がどれどれと座を回り

なんでやのてこでも動かぬ洗濯機

肘枕主の姿に似てる猫

色黒もお人好しなも亡母ゆずり

冬眠もゆっくり出来ぬ巳の春

箕面市 坪田紅葉

ひとことと急に元気になる老後

留守の家コスモスだけが派手に咲き

世話好きが今日も出かける傘さして

腹だちがそのままつたわる電話口  
生かされて今年の菊も盛りなり

寝屋川市 岸野あやめ

みんなみんな新しく見えお元日

いそがしい耳だメガネとイヤリング

ホカ弁で主婦が済ませる昼もある

ダイエツト達成出来て皺が増え

相部屋へ遠慮会釈もない見舞

大阪市 古川美津枝

里芋も柿も贈られ秋ゆたか

きざみネギおろしもバック大手振り

新調に老母も女の初鏡

女坂過ぎこし初春の福寿草

床あげて初墨父のよき笑顔

富田林市 藤田泰子

背くこと知らぬ瞳で裏切れぬ

冷静におなりなさいと白い菊

バラよりもこの頃菊に魅かれてる

目立ってはならぬと思うかすみ草

大きな目の器で稚魚を泳がせる

大阪市 本間満津子

右側を歩いていても突き当り

淵に出てほっと息つく川下り

達者なら良いさと私も筆無精

さしかける傘をやさしい人が持ち

新調の服と靴とに励まされ

しあわせのくだりへ挟んでおく某  
風が止むたつた一つの出来ごとに  
手鏡に写る範圍は明るうて  
お隣のさわぎへつくづく我が家の和  
童心にお伽の国の青い風

岡山市 川端 柳子

松原市 佐藤 藤子

おめでたい話舞い込む菊日和  
紅葉に和服美人も負けている  
城下町道に迷ってから親し  
黄昏の淋しくのぞく宝石店  
夕暮にほっと明るい娘の電話

高知県 赤川 菊野

中国旅行(二句)

秋空へ仏塔追うて旅をゆく  
ふところの深さを語る仏像の瞳  
アドレスを聞いて私をどうする気  
背かれた痛手をバネに立ち上る  
ワンテンポずらして姑についてゆく

寝屋川市 柴田 英壬子

くねくねと年越しそうなりクルート  
情熱のタンゴ教えた光る靴  
自転車に空気満たして柿を買う  
控え目に賀状一色刷りとする  
抜けがらの皮を財布に初春を待つ

兵庫県 辻 文平

流れつくところで静かな余生地図  
どん底の藁一本が放せない  
酒とろり愚痴にも節がついてくる  
灰皿が男の私語の嵩になる  
胸内の鬼一匹が追い出せぬ

島根県 榎原 秀子

小心で挑戦するをためらわず  
無農菜手造り野菜荷へ詰める  
スーパで出会って長い立話  
バーゲンの品へ見付けた落し穴  
底辺で人救すこと慣れている

大阪市 神夏磯 典子

も一人の私を連れてフルムーン  
フルムーン他所のケンカの種になり  
宿命を悟ってからは比べない  
婆ちゃんの味を知らないハンバーガー  
精いっぱい役目果している輪ゴム

町田市 竹内 紫 鏑

筆者筆者と我ながら肩が凝り  
禿けてても体操の手は床につく  
来客に訊けば電話に立ったまま  
和食派に戻ってやめる英会話  
満艦飾日米野球に如くはなし

和歌山市 垂井 千寿子

昭和史の汚点踏み越えて来た平和  
秋空に溶け込んでいる絵筆持ち

本堂の話し上手に聞き上手  
責任の無い陰口が風に乗る  
理屈言う子へ成長を見ています

弘前市 田中 叶

天気雨晴れて街ゆく霊柩車  
進まないバス リヤカーが前にいる  
ふりかえるヤモリ自分の尾が見える  
映るものすべてに映す自己嫌悪  
天皇もパンダの時もそうだった

羽曳野市 田中 隆二

火の女風の吹くのを待っている  
魯山人の皿で秋刀魚横になり  
競り合うて以下同文の列に居る  
一城の主情けにもろくなる  
注文が多くて傾く父の船

奈良県 田中 紀美代

言い過ぎてしばらく無口な妻になる  
少し欲出してる母の若々し  
知恵袋今日は補修の雪となる  
おとなしい良い子がドキツとするセリフ  
月末になっても妻は花を買い

松原市 小池 しげお

領収書女の詐欺にひっかかり  
振りむかぬことに決めとく登り坂  
花束を渡して勝ったと思う  
片方の靴がなかった救急車

表札が汚れ雑巾で拭かれ

鳥取県 新家 完司

風邪ひいて古いアルバム見ています  
悪人がみごとに負ける本の中  
お嬢さん鼻からけむり出さないで  
逆風に案外もろい男傘  
ていねいに母はわたしに札を言う

鳥取県 江原 とみお

芸のない指爪だけはよく伸びる  
和尚さんがネクタイで来た秋祭り  
収入役やめてお神楽舞っている  
スポーツの秋だとポチがやかましい  
たこ焼やスポーツウェア着ています

西宮市 奥田 みつ子

年明けてものさし少し変えてみる  
長い橋競うつもりはない歩巾  
文机に使い古した有馬筆  
魁夷の絵見つめ深まりゆく秋思  
行く秋に源氏絵巻はしずかなり

西宮市 西口 いわゑ

炎えた日もあった着物を出してみる  
大切に読まれたらしい亡父の本  
さまざまの秋の広がるいけ花展  
白足袋を脱いで自分をとり戻す  
忘れ物して来たような青い空

西宮市 藤村 宏子

絵の具箱みな塗ってみる冬の海

つましさを絵にしたような島の浜

ふるふき大根母の姑から胡麻みそで

クラス中湧いて失言だとわかる

人生のたのしさ知ったつまみ食い

いろいろな結んで解いて春の帯

六十は六十なりの花結び

幾重にもあなたを繋ぐ糸を繕る

つづれ帯めぐる歳月織り込んで

結び目がどうにもならぬ処に来る

出雲市

園山良子

腕時計見る演技して募金前

お隣も大声だけの父権らし

長い壁権威張った松が枯れ

嫁不足小耳にはさむ柿たわわ

祭笛財布落した娘の袂

東大阪市

崎山美子

合掌の心にしみる鐘の音

京なまりひびきやさしい抜き衣紋

無造作に捨てた人形の瞳に出会う

負け犬が群れの温さを恋しがる

ヤジ馬の群れで自分を見失う

富田林市

田形美緒

成長の一里塚かもまた背く

良心に背くとやけに胃が痛む

暗礁も迂回しました夫婦舟

燃えて燃えて燃え尽きてゆく通天橋

コスモスが急行待ちの駅に咲く

一汁一菜グルメ番組見て足りる

八尾市

八尾市

鴨見章

柚小屋に冬の戸閉じる槌の音

反核の輪に少年と手を結び

推理小説前頭葉をリフレッシュ

占いに出了た艶福を待っている

高知県

中内朱坊

暈から素足が盗む秋の彩

念入な化粧も年に勝てぬ朝

だんだんと女がいらぬ酒となり

今更に季節が憎いダイエツト

潮騒が旅愁の一句おいてゆく

熊本市

永田俊子

木の実落つこの従順を包む土

砂時計の砂なんでそんなに落ち急ぐ

嘘を言う人のハンカチが白濁ぎる

誰かに影を作って歩く日な大道

そして冬生々流転陶汰され

有田市

松井かなめ

口惜しさがはずみになって立ち上り

駐在の地図新自動車道の手つてない

魔がさしたとはほんとに詭弁やろ

女五十世間が見捨てた求人欄

障子越し細いあかりに親が住む

海南省 三宅 保

薬飲むのもやめておく休肝日  
真っ直に蟹は進んでいるつもり

無口だなキヤツシユカードという奴は

やさしさと強さを見せる肩車

百薬の長に処方を書いてない

吹田市 茂見 よ志子

体重計無視した秋の後遺症

酢大豆がよいと根こんぶ袖にする

決めた箸まとも迷いの色模様

立て札はビルの建つらし枯れ芒

症候群私は何の部類やら

大阪市 鍛原 千里

シクラメンお前の青春がやってきた

痩せる話を食べながら聞いている

金銀の鞍を忘れた夫です

人が好き話が好きな甘納豆

スネークと書けば優しいひびきです

鳥取県 森山 盛桜

陰性を嫌ってからのいばら道

冷たさの限界線を出す気品

鵜の群れもそれぞれポーズ持っている

野辺の花誰を裏切る訳でなし

塩粒の一つ一つに抱く怨み

紫香先生おめでとう(二句)

尼崎市 奥山 美智子

十七文字に豊かな心さりげなく

喝采に埋もれてしまふ好々爺

結構もうけています古本屋

雨だれへけだるい視野の昼下り

風の噂をもっとシビアで考える

倉敷市 野田 素身郎

山里に道路がついて貧富の差

検査結果明日はわかる夜のしじま

睡魔に勝てず肝心なこと聞き漏らし

定年後も尾を引きそうな後遺症

京都市 都倉 求芽

あいさつが下手で正月もてあます

味覚音痴へまだ懲りもせず料理本

マニキュアの先でつり銭小突かれる

本心を持ってないから多数決

堺市 高橋 千万子

消されたらしいとは人間の命なり

舞い戻る手紙に行方断ち切られ

もう一度財布にきいて見たい残

不運とは落したところは水たまり

鳥取市 両川 洋々

不倫へのスイッチだから切っておく

減反の土へ脳死を言いわたす

菊の紋いくさの傷が嫌い抜く  
帯に短かい男に娘もつてかれ

出雲市 園山 多賀子

愚を通し未だ夢を追う昼の月

結び目が少し緩んだ倦怠期

銀髪になったおしやれを考える

温かい言葉復誦よく眠る

出雲市 吉岡 きみえ

ふるさとのせせらぎ早春のわらべ唄

しじみ舟浮かぶ六道湖絵となりぬ

酒飲みにチクワの穴の大きくて

藁屋根に出会いこころ安らぎぬ

出雲市 板垣 夢酔

コンバクトうまく化けたとほくそ笑む

あこがれた都会で花芽枯れはじめ

頭ではわかつているが腹が煮え

見当らぬへそくり夫に聞けもせず

呉市 林野 甦光

ヒマラヤの雪若者の目の奥に

円満という夫婦にて世にうとく

豆の蔓少し放浪癖がある

そんな癖がある人だとはつい迂闊

大阪市 藤田 頂留子

観心寺秋を満喫してる句座

天高く甲乙のない秋もみじ

悪知恵に又もおくれを取る捜査  
片道しか買えぬ切符で落せない

川西市 氏林 洋敏

飛行機に托す命で軽くなり

古九谷も古女房も愛してる

頼られて妻も嬉しい時がある

髪黒く染めてお金を借りに行き

八尾市 宮崎 シマ子

スーパの名も斉の宮とある伊勢路

鶴が来て冬の景色が濃くなる

よく眠った朝は雀が窓に来る

年あけたら同窓会が待ちうける

八尾市 山下 美津留

波風を立てに女は化粧する

町の火が冷えて居酒屋活気づく

二代目を継ぐ気がない娘婿

遺産分け庭石哀れ見捨てられ

神戸市 山口 美穂

愛秘めたまま山茶花はほろり散る

読書週間わたしの臉は仲が良い

地へ帰る日近し紅葉あでやかに

グルメブーム口養生がままならぬ

松山市 谷 信夫

あげるのがうれしく柿もぐおばあさん

可愛がっても背を搔いてはくれぬ猫

頻尿の代行それはちよつと無理

おんぶしたばつたが続く枯れ野径

京都市 山本 規不風

初恋の面影に逢う道祖神

クリスマスローズの魔力に勝つた恋

言い勝つた悔いカトレアの首落ちる

美少年の持つ水仙に憧れる

米子市 野坂 なみ

幹を大切に今菰を巻いてます

小さな灯でよしそつと燃え切ろう

無駄な灯を消して回るはおばあさん

パスポートの出逢い生きざま変えと言ふ

米子市 寺 沢 みど里

真白い蛇が神話を聞いて居る

忘れたい台詞鸚鵡が繰り返す

一人居てひとつの鍵の置きどころ

髪染めてまだ老醜を受け付けぬ

米子市 光 井 玲 子

花むしろ気弱な蛇がとぐろ巻く

雑草と仲良くしたい蛇母

ロボットもいつかは謀反おこすだろ

歩道橋律義な風が馴染んでる

米子市 小 村 てい子

年金がせわしくなった寺めぐり

乱気流私の守護神荒神さま

アングルをかえて眺める他人さま

王さまとほら吹きごっこして転ぶ

マニキュアで金借りに行く十二月

寂聴の般若心経で寝正月

喋るだけ喋ってメガネの玉ぬぐう

長生きをするほど幸せうすくなり

岸和田市 古 野 ひ で

神様も時には不公平な事なざる

御しやすい人と見られて日々多忙

待つ事も耐える事にも慣れて老い

巡り来る冬へ柎花芽つけ

岸和田市 島 崎 富志子

チャンチャンコの赤が目沁む当り年

血圧という敵に逢う六十歳

嫁った娘はスーブもさめる遠い土地

遺言状妻へ最後のラブレター

岸和田市 清 野 こ う

宅急便つぎつぎ届き借りがふえ

病窓に夫と見つめる大夕陽

逢うている安らぎを見る夫の瞳よ

早春を彩る花の芽が芽ぶく

岸和田市 原 さよ子

お見舞は先輩顔して言うてくる

バリウムを飲んで安心貰うてくる

増築へ嫁あつさりと家具を捨て  
おとしぶたことと我が家の味にする

岸和田市 芳地狸村

リハビリの杖に生甲斐ためされる

墨壺にお酒がまじる勸亭流

守り札割れてたすかる事故現場

たいそくに離婚の噂流す記事

和歌山市 内芝登志代

肩の荷を下ろし人生味気ない

借り貸しもなくて薄れてゆくなさけ

あわただし人が動けば金動く

お隣とつかず離れずいい笑顔

和歌山市 神平狂虎

居酒屋の隅に私の海がある

心の中の森にあなたの馬車が着く

冬の絵に亡父は独りで佇っていた

思い通りにゆかぬ引き潮満ちる潮

和歌山市 細川稚代

これ以上追えば傷が深くなる

祖父ちゃんが手柄話をもって逝き

傘寿過ぎ編目たしかな祖父の背な

幸せの風が絵になる隣の灯

和歌山市 寺田裕美

行く時の元気で帰って来ておくれ

軌道修正しよう暦がうすくとも

お土産の新米枡からあふれ出る  
百姓でよかつた仕事の切れ間ない

和歌山市 福井桂香

大好きな人の手駒となりたくて  
軽く出たジョークも尖る二日月

忘れ上手あなた身勝手すぎないか

自画自賛ワインの酔いに身をまかす

和歌山市 桜井千秀

昂ぶりはおさめてくれぬぼたん雪

瓦焼く里で燻ぶる枯すすき

白鷺の白さ鴉は訝しげ

一人相撲覗き見なんかするの誰

和歌山市 山川克子

どの駅に降りてもそれは君次第

制服を脱いでも序列つきまとう

ストレスを吐き出す旅にいるお金

生活に余裕運転にも余裕

和歌山市 後藤正子

三枚におろす手際を肩ごしに

窓越しに見たのは喜劇だと思ふ

ほほ紅を差しては秋の絵を描いて

やがて雪を降らせてくれる舞台だな

和歌山市 青枝鉄治

腰据える客の後ろで妻の手話

中流をやつと支えているパート

ミンク着てうさぎ小屋から出る女  
黙秘権どんぶりだけは平らげる

倉吉市 渡辺 独歩

シルバークの世代狙えとJR

印籠に秘書という名のきずぐすり

念仏を唱える胸に湧く浄土

リハビリに來いと句会案内状

倉吉市 渡辺 苦句

色エンピツの赤がいちばんおチビちゃん

霧もやもや頭から出ぬから困る

君のイメーシタンクに病人の僕

ちりめんじゃこ食べて味みて買わぬ人

倉吉市 野中 御前

ハミングの妻ごきげんの靴がなる

泣きにくたびになだめてくれる海

巢作りの蜘蛛を見ているうちの猫

わたくしの血に似た音の日本海

鳥取市 森田 熊生

迷うだけ迷って別の道選ぶ

けんかして仲直りしてみんな好き

四季が好き日本が好き茶をよばれ

猫今日は勝手がちがうけとばされ

鳥取県 林 露杖

徒に馬齢重ねて去年今年

ワンカップ七十一のペースデー

老人会ワインレッドのペアルック  
農を継ぐ嫁は欲しいが娘はやれぬ

鳥取県 金川 満春

賞味期間過ぎた妻でも有難し

お洒落してみても矢張り前屈み

騙されてみよう貴男の嘘ならば

色と欲人生ドラマ神代から

鳥根県 錦織 文子

福相な老母は苦勞を語らない

初詣女にかえる日本髪

初詣米寿の母に歩を合わせ

台所女の歴史をくりかえす

鳥根県 石田 清泉

通帳の残高動かぬ日を佯びる

六十の手習い余白をおびやかす

生涯の筆を托した手の震え

先生と呼ばれ腕がついてけず

鳥根県 松本文子

わたしの弱さへ絹着せ紅をさす

捨てねばと思う甘えて着ぶくれる

遮断機が降りて俵せ届かない

断わりを書く便箋が白すぎて

大阪市 北 勝美

自肅への批判自肅を願う老い

今日もまた花で揉めてる物干場

すすきの穂軽さに人生見てしまふ  
雲影が模様を画く冬の山

大阪市 吐田公一

ロスの娘と話す時計の速い針  
子のために親は鬼にも仏にも  
この人のドラマもあつた無縁仏  
七人の敵がいるからこの元氣

大阪市 塩田新一郎

月が出てこんな街にもある風情  
年金暮し悠々無くて自適だけ  
盗掘も調査もあらし眠る人  
死をみつめ生もみつめて宝籤

大阪市 板東倫子

選良がノーコメントと言う不遜  
御容体に一喜一憂の民で居る  
薄笑いしてテレビで見る喧嘩  
有難し達者に産んでもろた恩

大阪市 町田達子

石仏を酔わす奥山紅葉照る  
道連れの話題金が頼りで夢が無い  
ジェラシーも匂う久々の姉妹  
木枯しの私語を聞いている旅の宿

寝屋川市 宮尾 あいき

まだ恋はみのらないのよ虫が鳴く  
盃にとび込んだ虫アル中か

枯すすき淀の川原は冬の色  
枯枝のアクセサリーかからす瓜

寝屋川市 平松 かすみ

勲章は無いが真直ぐ歩く幸  
ちんまりと万年青おちつくマイホーム  
一枚の舌が代々遺産です  
正直な舌でときどき輪をくずす

高槻市 川島 諷云児

命綱握ってくれる妻がいる  
独り身が気楽と言えば嘘になる  
人生の岐路で滋石が狂いだす  
ただならぬ伸と知つてる宿浴衣

高槻市 河瀬 芳子

終焉のときへ凜然たる菊よ  
灯を囲むみんな寂しいから囲む  
駅裏に男を繋ぐ灯がともる  
華やかなバラを視ているおじぎ草

大阪府 坂口 公子

足踏みに慣れて日向へ出そびれる  
段ひとつ踏みはずしてからの不遇  
掌中の玉を逃がした勇み足  
腹の底さらけて屈託ない女

富田林市 松本 今日子

荒波が好きで帰って来ない船  
寝ころべば背いた話も喜劇めき

秋さかり黒のダブルが目立ちます  
南天の赤に一息ついた寺

富田林市 片岡 智恵子

労働歌喉を流れる缶ビール  
禅堂の深さ無欲の明日がある  
滅びへの共感紅葉の美しさ  
七五三もう人形でいてくれず

岡山県 直原 七面山

亡き母の齢になって思うこと  
除雪車は雪をかぶって静かに寝  
ライバルに苦しい時を救われて  
ブランドを纏うて妻は旅に出る

岡山県 小林 妻子

一つしかない口で善悪使いわけ  
賛成の右手は高くたかく上げ  
十年も帰らぬ兄の孝行論  
まだ客は帰っていない雪の跡

岡山県 山本 玉恵

焦点を合せ合せてくれる人  
背伸びしてつい仲間から見放され  
白足袋を脱いで女の役おりの  
丸裸になって故郷が見えて来る

岡山県 井上 柳五郎

祭り客一人も来ない世の移り  
紅葉の山かと見たは松喰虫

すぐ済んでよかった妻の愚痴を聞く  
生きてゆくただ懐古への言葉ふえ

貝塚市 行天 千代

亡き人の良い事ばかり思い出す  
コスモスが亡夫のお墓かこんでる  
老人会はお医者通いで不参する  
お年寄り和服姿の上品さ

宝塚市 丸山 よし津

断りの嘘を並べる重いペン  
本だけは売らぬ捨てぬと父の印  
枯れ枝に命与えて華道展  
カタログが殖えて郵便受け詰まる

羽曳野市 佐野 白水

梯子から植木屋日本シリーズ尋ね  
年金の兄弟四人湯につかり  
ご近所の売値で我が家値踏みする  
落ちぶれて売った屋敷へ出る噂

静岡市 渥美 弧秀

夜明け衝くピーポアの音妻と聞く  
幸福を味噌汁に問う夫婦箸  
詩と楽の暮しに弾む古希の初春  
賑やかな街を逃れた影二つ

河内長野市 井上 喜醉

思い出を匂い袋へ詰めて置く  
手探りの人生あれこれ欲がある

ちよつとだけ席を外していた不覚  
野良犬は飢えると好きな空を見る

姫路市 丁坪 サワ子

紋付も背広も昔から袖の下

裏話知らずにピエロ踊らされ

ベンツ ポルシェ塾への送り迎いです

華燭外遊ローン残つて娘は離婚

堺市 柿花 紀美女

世渡りが下手で石橋まだ叩き

ウインドの定食Aへ待つ期待

涙した流人の島も観光地

夏の旅冬の恐さを教えられ

羽咋市 三宅 ろ亭

言訳も止そう誤解に輪をかける

生活にポイント作ろう喜寿の歳

鉄瓶の湯気対談の間を詰める

妻が居て労務管理をしてしまつ

福岡県 横地 雅風

苔むして石転げたる磨崖仏

雨風の苦勞をよそにペンで生き

焦らされた約束掲示板の文字

木の株のきのこみやげも温泉の帰り

豊中市 辻川 慶子

コーヒーの匂いで二階降りてくる

シナリオの主役がほしいかすみ草

カレンダーめくれれば雪の兼六園  
秋日和ふと蒸発したくなり

大阪市 中西 兼治郎

ジョギングが咳と一緒に帰つて来

仲間までだまして二人の恋進む

手足より左官は道具先ず洗い

大阪市 渡部 さと美

何よりも正月らしい道の広さ

酒爛器悪いがうちはちろり党

逢うたびに優しい風をもつ人よ

大阪市 松尾 柳右子

停電に右往左往の隣組

帯の音におんな倅せはじき出す

たてまえは招待しての展示会

大阪市 北山 悟郎

人生に喜びを積む感謝状

内外野心が一つ声送る

インターホン社会を知る窓となる

大阪市 寺井 東雲

ポータスの明細二枚書かされる

カメラアイ奪つてほしいこのポーズ

姉女房着てる服は皆紅い

大阪市 井上 白峰

合槌を打つて竹光抜かされる

ああショック同じ柄着た人が行く

回覧板噂も一緒について来る

姫路市 大原葉香

鳥取県 田村きみ子

人畜無害それでも矢張り気にかかる

不在確かめている電話かも知れぬ

鳩飼うている訳でない寺の屋根

姫路市 中塚遊峰

絵日記に親子のポーズ書いてある  
車椅子押しして緑の陰さがす  
早起きの出来ぬ娘の縁きまる

鳥取県 さえきやえ

仏彫る手で猪も撃つ山ぐらし

意地っ張り本音は同居願って居

千姫の文箱語らず天守閣

鳥取県 森田布堂

肩書を捨てて気楽な冬となる  
冬の笑い皮の袋へつめかえる  
毛皮展ケタまちがえて笑われる

鳥取県 乾喜与志

足の裏の灸が頭に効きました

世渡りが正直すぎて馬鹿にされ

ラーメンで晩酌という癖をつけ

鳥取県 羽津川公乃

鱒三匹ついた夕餉のゆたかさよ  
わたしの寝顔知っているのはお月さま  
生かされた八十歳よありがとう

岡山県 荻野鮫虎狼

ほお杖はあくまで甘い夢を見る

これからが欲しい保険はみな満期

謎解きの紐を見つけた玩具箱

鳥取県 土橋はるお

白寿まで世話になります鎌を磨ぎ  
陽の当る方へ年寄輪を抜け  
よく笑いよく泣き女よくたべる

岡山県 二宗吟平

脛の出たズボンで山を降りて来た

民宿の親父は牛を飼っている

隣より高い地盤に住んでいる

鳥取県 津村八重子

一車両貸切りで行くローカル線  
右脳が惚けかけたのか頑固爺  
人並みに声をからして流行かぜ

岡山県 岩道博友

大根も芋も明るい春を待つ

本当の事は言えない義理がある

宿浴衣うき世はなれた顔で着る

靴から出て来た下手な正義感  
パソコンは苦手手書きで温か味  
炬燵酒珍客を呼び新春の色

岡山県 池田半仙

土壇場になれば手のうち見せてやる  
秋風につい騙されてあう時雨  
瓢箪の手入れ閑人らしく見え

竹原市 岩本笑子

正月の顔でミカンが盛ってある  
冬のまん中でこたつを三つ出す  
男と女の涙を知っている素顔

竹原市 信本博子

童唄遠い耳を傾ける  
失って優しさを知る古里よ  
心臓を計りにかけた罪と罰

島根県 松本はるみ

自画像に黙って雪は舞い降りる  
寒のバラ勿体ぶった開きよう  
好きだからだまし舟など折りましよう

島根県 北川民子

留守番へ時計の音が高すぎる  
ああ言えはこうだと古希は反抗期  
強くなれ他人の事なら言い易し

島根県 藤原鈴江

ステージの興奮抱いたまま戻り  
せわしくて一輪ざしがちようどよい  
張り終えた障子にうつる花の影

米子市 金山夕子

彼岸花半端な赤は大嫌い

似たような話をしてるコーヒー館  
さよならは中途半端にしたくない

米子市 白根ふみ

何ごともない顔をして鍵にぎる  
幕切れに半端な風は吹かせない  
ふるさとの山に似ている父のせな

和歌山市 玉井豊太

お参りへ神様寒をご存知か  
好調で滑る命を波に乗せ  
止り木で時には吠えて気を休め

和歌山市 山田高夫

秋暮色定年竿へ背を丸め  
そして秋友と呑む酒爛がいい  
哀しさも混じる佳き日の菊日和

静岡市 永倉僕川

力にもなれぬ話を聞く辛さ  
いい嫁と言われ仮面を外せない  
親切が過ぎて息抜きしたくなる

静岡市 安本孝平

半分の答だけ出す妻の指  
呆け防止医者より妻の厚い世話  
告白のときの踏絵は買ってある

出雲市 竹治ちかし

高山の冬には悲しい唄が  
どنگりもどنگりなりの順があり

一本の糸を信じて舞う子風

出雲市 小玉 満江

計算の上手な女うとまれる

新築へ昔の家具はそぐわない

金からだ嫁は姑を大事がり

出雲市 久谷 まこと

年寄りの言葉素通りして暮れる

マナーなど子には無用な実家の膝

素直さも三日坊主の伸び盛り

豊中市 上田 登志実

九州の旅

五味五珍おこぜばかりの料理佳し

黒牛と赤牛で知る県境

モッコスと飲んで馬刺しの美味いこと

守口市 森 川 まさお

あほになることを覚えた外務員

上役に内輪話をせぬパート

住みついて艶のでてきた段梯子

守口市 結城 君子

警官の人相みてから物尋ね

パートして古参の人情味にふれる

冬はもう来たのと心配する秋刀魚

高槻市 竹内 花代子

三軒目の耳鼻科で癒えた秋の風邪

間違い番号確認された電話口

シャコバがに咲いてホーム炬燵を楽しませ

加賀市 細呂木 魯木

人生を暗示させてる砂時計

無人駅奇特な花がアクセント

グループはささやき好きの女連れ

藤井寺市 福元 みのる

お目当てがないと女は太り出す

年のせいにしてごまかしてはならぬ

窓際でやつと支えた追われる身

境港市 細木 歳栄

雀にも特攻隊がいるらしい

凜として菊は霜夜に動じない

大山よ私も燃えたい時がある

唐津市 筒井 朴竜

ご快癒を願う記帖の列へ立ち

シグナルの指示へ気忙しセルを踏む

手を上げて渡る園児を待つ笑顔

奈良市 宮川 古都路

温室に春が咲いても外は雪

菊花展花の苦勞を祖母は知る

性別は男か女咽ぼとけ

富田林市 新開 千代女

じつと見りやまんざらでもない孫の顔

気が弱いくせに冒険あこがれる

気の弱い性格出てる淡い色

和泉市 西岡洛醉

糞虫に成る還暦の日向ぼこ

四季の無い自画像がある四帖半

真白い乳房と逢うた山の宿

弘前市 真喜内 實

頑張るぞバネのついてるような脚

妻ならば置き場所きつと知っている

この人に笑顔だけならあげられる

弘前市 斉藤 効

秋茄子に菌型残して虫が死に

嫌煙権広がるばかり秋桜

轢死鳥埋めた辺りに咲く野菊

黒石市 相馬 一花

厠にも昔はあった新聞紙

下宿屋の娘にとうとう逮捕され

他人には見せてはならぬ白髪染

茨木市 井上 森生

脱皮する蛇ならいつも新天地

問答を仕掛けてみよう京の庭

長女結婚

あいさつの一句新婦の父の詩

西宮市 瀬尾 六郎太

魚より多い釣り人秋や秋

親から子子から孫へと山とあり

カルガモに似た親子たまにあり

和泉市 岡井 やすお

強くなったと思うと喧嘩したくなる

あまりにも日本語知らぬ日本人

ブランドのシャツのマークを見せたがり

羽曳野市 吉川 寿美

紙コップ転ぶ思想のないままに

お喋りで困ってしまう網代垣

泡立草身の上話はほどほどに

兵庫県 都里 遊光

趣味一つ抱いて明るい事初め

病名を隠す笑顔がゆがんでる

豆殻で焚いた雑煮や一里塚

高知市 北川 竹萌

甘い汁苦く解けないリクルート

太くて重い大根選るのがよい主婦で

武さんと呼ぶ里の声温かい

倉吉市 淡路 ゆり子

煩惱の渦にとまどう杜の鈴

生涯を母は雑用強いられる

借金に埋もれて暮す中流意識

寝屋川市 堀江 光子

真向いの店へ陸橋上り下り

グルメにも倦きた夫婦の焼くさんま

役職を下りて分った敵味方

茨木市 堀良 江

世界旅行その気にさせるオリエント  
あなた美人よ誰にでも囁く鏡  
ダンスシューズ穿いて気分は鹿鳴館

倉敷市

田 辺 灸 六

寒くなったなと肩書のない名刺  
贅肉の愚痴は聞かない二重顎  
運鈍根亀の歩幅は変えないぞ

吹田市

栗 谷 春 子

お詣りを兼ねて本格派のカレー  
不参加の理由グルメの文字が無い  
頼り甲斐のない警官が立っている

広島県

藤 解 静 風

光らない石を磨いているのかも  
わたしのは百円ですよ阿弥陀さま  
残り火を燃やしたあとの火の仕末

河内長野市

植 村 喜 代

柿の木は柿の重さを知っている  
ここからが明日になるのに眠れない  
よその柿色づく日日を見て通り

鳥取県

谷 口 次 男

昨今はハマチもタイも塾育ち  
うれしくて蟹が泡吹き足をする  
幕末が戻ったようだらろは丸

吹田市

園 田 文 子

百薬の長くよくよしない父の酒

せつがちがひとり歩きをして困る

川西市

松 本 ただし

今に見て居れと仇も思ってる  
乱れ咲く花もあろうに菊大輪

豊中市

一 瀬 福 一

どこへ行くあてはないけど春シヨール  
鈍感な妻歳時記をよく覚え

箕面市

椎 江 清 芳

七十の手習い婆さん本を買う  
天二物与えず妻は元気です

東京都

吉 川 一 郎

土地家屋付きの田舎に嫁不足  
浪曲に親父の海が和いでいる

広島県

田 村 新 造

千支づくり蛇が並んだ備前窯  
巳の年の彼女にいつも巻かれ気味

岡山市

花 田 たけ志

万難を排して酒席に見せる顔  
改元の議論は無情なひびきあり

大阪市

富 岡 温 子

母屋とも疎遠になって子が育つ  
おきまりの順序で一日暮れる老い

弘前市

小 寺 花 峯

腕まくり女で目線上に置く  
俎の音に女の意地を載せ

# 自選集

工藤甲吉

新しい年に構える彩を持つ  
歳相応夢はのどかな灯を点す

八木千代

兜虫 武田信玄ここにあり  
蟻螂の斧も一矢はむくいたし  
することが無くても三度三度食い  
病院はデラックスでも嫌なとこ  
モンローを読んで無聊を慰める

正本水客

新しい屋根とわたしも冬を越す  
あわてずに雨を迎える屋根瓦  
塀を繕うこれでわたしも梅の木も  
門の扉もどうやら笑わなくなった  
宿も仮りの世身も仮りの身の長い刑

水粉千翁

石ひとつ隔てて川の湯にひたる  
ゆかた一枚砂湯の胸へ海が晴れ  
朝もやが川面のみどりを深くする  
鳥の影水の涼しさ知っている  
旅暮れる離れへ続く石だたみ

児島与呂志

己巳の春  
瑞雲を仰ぐ南南東破る  
巳の春へ亀万年の心注ぐ

お正月やっぱり昔のままの朝  
青春の今更されど戦陣訓

くりごとと知りつつ老いの聞き上手

美賀子さん嫁ぐ(十月二十三日)  
嫁ぐ日へ白より白き秋ざくら  
嫁ぐ娘へここに幸あり父と母  
式場金光教麻布教会  
み訓えの深さ麻布の丘まろし

茶六さんへ

幕引けば素顔が浮かぶ句碑の主  
ポーナスは他人事にして冬の膳  
母の手で結ぶといきな帯になり  
男結びの紐を信じて来た私  
人の児も見過し出来ず叱る祖母

藤村 女

初夢にまだリクルート顔のぞく  
いつまでも仲良くゆずり合う夫婦

立久恵峽

晩秋の立久恵絵になり詩がある

山内 静水

有働 芳仙

入れ替わる世代背と背が冷たいネ  
やり直し出来る年でもあるまいに  
父と子と酌む盃に嘘がない

人前では悪妻と云うて置き  
椰子の實の苦労話を聞く人魚

金井 文秋

早足のリズムが戻る万歩計  
万歩計満たして心暗れてくる  
老いて腰曲らぬ姿勢意識して

大分胃がよくなって来たつまみ食い  
健康食品高くつくので止めておく

藤井 明朗

福相の顔が揃った新春の膳  
木杯に幸せを盛る三ヶ日

もつともな話うなずくしかあらず  
ある日ふとなんの気なしに読んだ本  
霊験はあらた御簾すこしゆれ  
お逢いたした時からなんてささやかれ  
トップにアタック後にはもう引けぬ

本田 恵二朗

胸襟をビール二本で開き合い  
通ぶってみたがあげ底見透かされ  
こけそうでこけない二人三脚です  
ホケ知らず長命競争の列にいる  
詩があり八十路街道夢もあり

野村 太茂津

顔上げて挑んでほしい詩の個性  
人間の愛も生活もない個性  
詩ではないあなたの影が見当たらぬ  
雲は流れて手負いのひとと冬景色  
訴えて心清めるうたが欲し

小出智子

山陰の旅ではいつも雨にあう  
杖がわり孫が運転してくれる

米澤 暁 明

スリッパにわたしの癖を覚えられ  
莫迦な女が一人ぐらいは居てもいい  
柿の蒂つまらんことに気を遣い

シャンソンを聞くさみしさが夫にも

夕焼けこやけいささか齡をとりすぎて

月原宵明

補聴器を忘れてものに動じない

終電で眠りこけてるのが素顔

女二人いる台所ややこしい

余生とはなんと淋しい文字である

ウイスキーの小瓶は汽車の窓が好き

大矢十郎

申し訳すらすら嘘は消えはせぬ

子の稼ぎ財布は一つだからと言う

母にしてとても死ねない知恵遅れ

よう喋る孫奴おしっこだけ言わぬ

誰よりも今年早く買う賀状

小林由多香

達者だけが取得で二人の十二月  
齡ですね靴下さえも匂わな  
あんたも齡よとちと薄味の塩加減  
お人好し夫婦で貧乏くじを引く  
空っぽの頭で暮れの街へ出る

阿萬萬的

宝くじ当れば松葉蟹食べる

眼帯をはずして陰気から抜ける

力では解けぬ知恵の輪もてあまし

黒川紫香

一人吟

# 秀句鑑賞

—前月号から

佐野白水

麻生路郎先生の「俺に似よおれに似るなと子进行い」、麻生霞乃先生の「飲んでほし止めても欲しい酒を酌ぎ」の不朽の名作に少しでもあやかればと思ひ、夫婦・親子等の作品の鑑賞をさせて頂きました。

妻も子もこの指に止らない

安平次 弘道

男が仕事と給料運搬係を止めたら、殆どの家庭はこんなものではないでしょうか。でも皆さんは、感謝の眼であなたを見守つておられます。

溝掃除する日も化粧して出かけ

高杉 鬼遊

女性はいくつになっても美しくありたいもの。女心を溝掃除にかけて、サラッと句に纏めておられ、感服。

老妻と話ある様でない様で

土居 耕花

私の実感とピッタリ。永い人生をお互いに

助け合い、語り合つて来た仲ですもの。

アンバランスな呑気者一家です

柳 楽鶴丸

お家族ご一家の和気あいあいのご様子が良くわかります。笑つても一日、怒つても一日、呑気に暮らしましょう。

一合へ夫は白黒ない軒

堀 江芳子

毎月、ご主人に対する細やかな愛情の作品を拝読し、芳子さんのお人柄をお察ししております。白黒もない夢を見ながら、軽い軒を出してお休みのご主人、それをじつと見守つておられる芳子さんのお姿が目に見えます。血を流す喧嘩もなかつたなあお前

越村 枯梢

秋の夜長にホームコタツつに向い合い、お茶を飲みながらお互いに取り立てて話すこともない毎日。過ぎ去りし昔を思いながら、口喧嘩や軽い殴り合いなど何回かあったが、そこは夫婦の愛情と良識で血を流すようなことはしなかつたなあと、老夫婦の何気ない会話とお見受けします。

遠花火まつこと静かに凡夫婦

吉川 寿美

ご主人のご全快の姿を遠花火に例え、静かにそれを持つておられるお氣持と推察。凡夫婦とありますが、愛情濃やかなご夫婦とお見受けするのは、思い過ぎでしょうか。ご主人のご全快の日を氣長に待ちましょう。

メダル無きマラソンコース行く夫婦

仲 どんたく

人生の長いマラソンコース、ゴールもわからず、メダルありませんが、ご夫婦揃つて走りましょう。人生八十歳時代、金婚式、ダイヤモンド婚等々、立派な桶が用意されております。

年金で充分ですわと柔和な眼

森下 愛論

ある人が私たち夫婦に、「お二人でお暮しのようですが、年金だけで暮して行けますか。夫が二、三年で定年になりますので、老後の生活についていろいろ考えております」とのこと。妻が年金で充分ですと答えてくれました。ご主人が気になりお尋ねになったのを、柔和なお顔でお返事なさつた奥さまのお顔が目に見えます。騒々しい世の中ですが、老人らしくつつましく暮して行きましょう。

散らかした部屋は息子の自己主張

小澤 幸泉

壁と言わず、机の上と言わず、自己主張以外のなものでもないものはかり。しかも青春の男臭い部屋、親が小言を言つたり、片付けようものなら何をするかわからない年頃。大人になる一過程と思ひ、じつと見守つてあげて下さい。

家出でもするのかわ妻の旅靴

三宅 保

二泊三日ぐらゐの旅行でも、女はあれやこれやと一パイ詰めて行きます。「家出でもする」と大げさに表現されたところが面白いと思ひます。

川柳太平記

(128)

川柳の群像

北川春巢

東野 大八

「私をはじめ路郎先生にお目にかかったのは忘れもせぬ、阪大川柳会にはじめて出席した昭和十二年五月であった。丁度二十八年前であるから、逆算すれば路郎先生のお年は当時四十九歳、今の私よりも少しお若かったわけである。

阪大恵済団の小会議室で、コの字型に配置された椅子席であった。先生は正面の椅子に座られ、それに次いで故長崎柳秀先生、故笠原路生先生、故石崎洗塵先生、故尾崎方正先生、現阪大名誉教授布施築川先生、現大阪警察病院長井上薄三先生その他「大川端」に名を並べておられる方々が、文字通り綺羅星の如く居並んでおられた。「大川端」は阪大川柳会創立五周年記念に昭和十年発刊された句

集の名前である。私は入会の記念として同書の一冊を頂き、現在も愛蔵している。

当時の阪大川柳会のメンバーで、今も川柳を続けていられるのは西尾葉氏ただ一人だけである。路郎先生はお髪もお髭も黒々として、川柳家というより、居並ぶ医学博士の上には「大」の字をつけて「大博士」と呼びたい御風貌であった。その時抜いて頂いた句も忘れはしないが、柳秀、路生などの大教授の句が抜けた時の子供のようなお喜びの様子は忘れることができない。

私が『川柳雑誌』を知ったのは大学二年生（昭和九年）の十二月で、長崎柳秀教授の試験（薬理学）の後であった。柳秀教授が川柳の大家であることは学生間にも有名で、もし

試験問題が分らぬ場合は（試験は口頭試験であったから）川柳を一句いえば合格させて貰える、という伝説さえあった。幸い私は川柳をいわず合格させてもらったのであるが、試験が終わってからはじめて教授室を訪れて、川柳のお話を伺った。その後もひまを見付けてはお部屋へ伺って、川柳のお話をきいた。

その頃から路郎先生のことも阪大川柳会のことも予備知識を受けていた。柳秀先生は、御在室の時には、嫌なお顔もされずに、一学生の私に会って下さって、句会で抜けた句、殊に三才に入選された句のことを得々と話して下さった。

「卒業したら阪大川柳会へ入れてやるが、学生の間は駄目だ」

ともおっしゃった。しかし路郎先生のことはその頃から承っており、はじめて拝顔の栄を得て紹介された時も、はじめてのような気がしなかった。

路郎先生の御選句ぶりは、当最も最近も変わらず、コップのオチャケを黙々と飲みながらの選である。添削ということはない。

質問があれば答えられたが、時に三才の句の批評をされることもあった。しかし三才を抜くということは批評である、というようなこ

とをおっしやっていた。

それ以来、二十八年間、私は路郎先生に可愛がって頂いたと思って感謝している。先生はこわい先生だったという人があるかもしれないが、私にはそんな気がしたことは一度もなかった」（川柳雑誌・昭和40年8月号）恩師路郎先生を偲んで」北川春果。

本名北川睦男・大正二年四月広島県生れ。

大阪市交通局病院院長、大阪市立桃山病院院長兼同市民病院院長、同高等看護学院院長等を歴任。

柳号の春果は、健康のヘルスからとられており、柳歴は川柳不朽洞会会員、『翠柳』（吹田クラブ川柳会）発刊、『川柳大阪』（大阪市交通局文化部川柳会）刊行。川柳不朽洞会理事（昭31）、川柳塔社副理事長（同46）など。『川柳雑誌』時代は同誌『近作柳樽』欄には、麻生路郎と肩を並べる共選の選者となり、『川柳塔』誌ではずっと『近作柳樽』の選者、昭和四十年七月十八日の麻生路郎葬儀には葬儀委員長という大役をつとめ、切々たる弔文を読んでいる。

本文はじめに引用した文章にみられるところの、けれども味のない実直な文章で、川柳誌上には数多くの柳論、柳文、医家随筆を発表、それをまとめて昭和49年12月に『川柳随筆』

句集聴診器』を刊行している。句集の自序に

われながら完全癖に腹が立ち 春 果  
の句に見るとおり、この瀟洒な刊行本には、春果の人の柄のすべてが語り尽くされている。

しかし、この生涯唯一の自著の発刊後のちよつと一年後の昭和五十年十二月二十七日、胃癌のため死去した。享年62、顕照院釈宝医居士。

「昨年九月頃、私が川柳塔の事務所に居た時、大変、緊迫した面持ちで春果さんが訪ねて来られ、不二田二三夫君を別室へ呼んでひそひそと話して帰られた。その様子にただならぬものを覚え、不二田君に訊ねると「句集の相談に来られたのだが、一寸気にかかる一言があった」と話してくれた。その後、間もなく入院し手術との統報をきいて、もしやと不安な予感に馳られたのであるが、今にして思えば、あの時既に「癌による死の運命」を予見されていたの覚悟が出来ていたのだ。

その後、小康を得られて三洋電機の診療所に勤められてからも、二、三度、お手紙や電話を頂き、平靜淡々のご生活のようにみえたが、実は死と対面することによって充実した人生の最終を生きぬいてゆこうとされた御様子が、尊くもまた莊嚴にさえおぼえてならな

いのである。誰であつたか、西欧の哲人の言葉に「死を手もとにかきよせて生きる」というのがあつたが、命終の時に臨んだ心ばえて一年有半を生き抜かれた春果さんこそ、菩薩不退位の境涯で寂滅されたものと羨望にたえない」（若本多久志楯文）。

「酒癖の噂が先に着任し 春 果

大ジョッキ二杯で人生観変る

長生に開けば毎晩酒を飲み

春果さんの酒の句となればいちだんと冴えをみせてくる。謹嚴な春果さんが減多に見せないが、酒興至れば、座ぶとんを三つ折りにして赤ん坊に見立て、サック破れてこの子が出来て、この子いまだにゴム臭いと、鹿児島おはら節にのせた身振り、手振りのきこちなさが無性になつかしい。

胃癌とは知らず入歯に通いかけ 春 果  
48年2月の句報にこの句を見出して私の筆はもう進まなくなつた。春果さん、何時までも聴診器を放さないで下さい」（正本水客倅文）。

病人の顔へばつかり蠅がくる 春 果  
伊勢海老のめでたい色になって死に

★次回は「高橋月南」

# 誹風柳多留廿六篇研究

(三十九丁)

本多正範・石田成佳・大屋六郎  
八木敬一・鈴木 黄・石田晋一  
南 得二・小野真孝・多田 光  
故岡田 甫

666 長半坡たにてう斗ニツ出る

石田成 長半坡は『三国志』の山場の一つでもある。「劉玄德は民をたすさえて江を渡り、趙子竜は単騎にして主を救う」（長坂坡の血戦）に場所名としてあり、また「張翼徳（張飛）に長半橋を隔がし劉子州漢沢口に敗走す」ともある。

丁半ばくちの賭場で賽を振つても半が出ず丁の目が二つならんで出たことを丁半場の語呂合せにより、趙雲と張飛との長坂坡での出合いを踏んでよんだ句作。

南 長坂坡に於ける趙雲の句は二十句ばかり、

張飛の句は十句ほどありますが、他に川柳に登場する趙雲の句は左の一句だけのようです。

趙雲も後家しめの場はりちぎ也 拾六五  
多田 贊。

667 七月下旬ア、でおすコウでおす

石田成 紋日である八朔を目前に控えて白無垢を縫うお針との布地の選定やら仕立上りについでの話の一端をとらえ、さらにその費用の工面に悩む遊女の有様をよんだもの。

文月の三十日とふせふのく 玉14  
七月三十日けいせい大さわぎ 明二義2

八木 八月は八朔と月見と紋日が続くので、

遊女はやりくりに大わらわである。それを「ア、でおすコウでおす」といったのであろう。

白無垢を作るのに「布地の選定」はあまり必要がないように思う。

小野 贊。金の工面でしょう。お互いにこぼし合っている様と思います。

多田 贊。

668 ひまな見せ愛にも四十騎の軍

石田成 商売の閑な時に将棋を一局さしているところ、隣の店番とさすとしたら柳原土手の古着店での一景がふさわしく「隣りから隣りへ続いているので閑な時には座つて居て隣

りと将棋もさせれば世間話も出来る(「川柳江戸砂子」とあり、将棋をさすことを四十騎(将棋の駒数)の軍といったところが本句の妙。

隣から一番来いとやなきハラ 拾九八

八木||この句よく分らなかつたが、将棋説贊。

小うりをはいたしませぬとさして居る

二五4

「柳原」も場所として適切の一ではあるが、それと限る積極的な理由もちよつと弱い。

南||閑な時あつちこつちと将棋風景の見られるのは、柳原とは限定できないが、もつとも適切な場所か。

多田||同右。ご明解。

669 嘘つきのかうべにやとるかよふ神

石田成||「通う神」は道祖神のこと。手紙の封じ目にこの言葉を書いて、その安着を祈ることが遊女などに行われた。

紋目を前にしてか、無心文の宛先として遊女の悩裡に浮かぶのは……どら息子が亭主か

通ふ神目付であれる山の神 七五2

通ふ神山の神にハ引さかれ 一五二6

大屋||贊。「正直のかうべに神宿る」の援用。

多田||贊。

670 沐浴をして蘇生する暑い事

石田成||現代の上戸ならば一風呂浴びた後、冷えたビールをグツと一杯。ここではじめて生きかえつた心地がするところ。

大屋||贊。沐浴・蘇生という漢語を用いたところがミソ。貧乏儒者の面影あり。

多田||贊。

671 御年貢につまり下駄やとてうへ売

石田成||親の病気でか年貢に困窮し、せつかく丹精した、しかも未だ箆箭に使用できるまでは生長していない桐の木を下駄屋へ。同様未成年である娘を吉原へ売るはめになつてしまつた。

町へ売り又下駄屋へ売るといふ間接的表現により、娘と桐の木共に未成熟であることを暗示し、哀れさを深めた謎句。

短命な娘ハみんな下駄に成り

三四25

大屋||贊。

御年貢はこわい物だと禿いひ

一〇35

多田||贊。

672 貧僧を夢に見下女ハかつがれる

石田成||諺言「貧僧の重ね齋」、ろくな檀家もない貧乏寺の坊主が同じ日に二軒からむ齋によばれる。よい事がたまにあると間がわるいことが起り、世の中のまわり合せは皮肉なものといふたとえ。

ものがたつた下女ひんそうのかさねとき

かつがれた下女ひんそうのかさねとき

明七義6

という句もあるが、平生、男にかつていい好色下女もかつがれて(婦女が誘拐暴行を受けること)数人の荒くれ男に御馳走を一度にされたのでは全く有難くないとの意。

多田||贊。

673 物置キの錠ハぬかみそだらけ也

石田成||物置きは日常あまり使用されない品々を格納して置くほかに、漬物樽などを置いてあり、それをとり出すのは下女の仕事であり、古川柳ではそこが下女の情事の場所とさされている。

もの置で下女たくあんをふり廻シ

安仁3

下女の尻つめればぬかの手でおどし

宝一智3

句は、漬物をいじつたその手で施錠するゆえ、ぬかみそで汚れたままであり、そのことにより下女の色事をも併せて暗示したもの。

八木||贊。小生にも下女の色事がにおう。

多田||私は、ただ下女が主家の用で物置をあけると思っている。

# 『武玉川』には前句附の句もある

阿達義雄

## (一) 前田雀郎先生と武玉川調

先ず第一に故前田雀郎先生が、その著『川柳探求』(有光書院・昭和卅六年刊)の中に述べておられる「武玉川調」について紹介してみよう。

——『武玉川』は寛延三年初篇を出し、引続き宝暦六年までに十篇を刊行、『燕都<sup>よと</sup>枝折』と改題して、これに五冊を次ぎ、同十一年終つたが、彼の歿後二代目紀逸により、更に三冊が補われたので、現在では全十八篇として世に行われている。

この集は、その初篇の序に「点を以て流行を極める事明か也、されば日々の愚判の数々、秀逸とする句々を書き留め置待るを」云々とある如く、彼が日々点耕の俳諧の巻々より高

点の手柄あつた附句を抜いて一冊としたもので、所掲の句に、短句、即ち「武玉川調」と今呼ぶところの十四文字の句を多く見るものこのためである。

右初篇の序に「附合の句々その前句を添待るべき所を事繁ければこれを略す」とあるのを見て、この書をもまた後の『柳多留』の如く、原本は前句附であろうとしている人が尠くないが、これはその後続く「三句のわたり、或は付合の勝所」の文字を見落しているのであつて、更に六篇の序に「三句のわたり、俳諧第一の用心也」として、そのことの詳細な説明を試みているのをも、これを前句附とすることは誤りである。

右に雀郎先生の言われようとしていることは、武玉川の句は俳諧の巻々から高点の手柄

のあつた附句を抜いて一冊としたもので、この中の短句、すなわち「武玉川調」と今呼ばれているところの十四文字の句を多く見るのも、このためであり、この書もまた後の「柳多留」のように、原本は前句附であろうと考えられている人が多いが、これは、その後続く「三句のわたり或は付合の勝所」の文字を見落しているのであつて、さらに六篇の序に「三句のわたり、俳諧第一の用心也」として、詳細に説明していることを見ても知られることであつて、これを前句附とすることは誤りであるといふのである。

## (二) 『武玉川』の「此蜺壁で死ぬ

とは思ふまい」

だが、右は武玉川の句の大体について言えることであつて、實際の武玉川の句に当たつてみると、前句附に由来する句も発見される。例えば、宝暦十三年刊の『筆鸚鵡』を見ると、『武玉川』六篇に見え、

此蜺壁で死ぬとはおもふまい

の句は、二十五、六年前の前句附の「知れぬものかな」という題につけられた勝句であつて、俳諧の附合の句ではなかつたと述べられていることによつても知られることである。

「武玉川」の長句の中に、俳諧的であるよ

りも、むしろ前句附的又は川柳的な句を屢々発見するのは、右のような前句附の附句から採られた句もあったからとも考えられる。

### (三) 「遠くきこゆる鉄砲の音」は明治以降の附句

なお、雀郎先生は、その『川柳探求』の37頁に、

草鞋は斯う召す物と泪ぐみ

という句は、武玉川第十一篇所掲のものであるが、天野八郎が獄中で綴った『斃休録』という彰義隊始末記の輪王寺宮上野落ちの条に「昔年、或俳人に聞くことあり、

わらんじは斯う召すものと泪ぐみ  
遠くきこゆる鉄砲の音

此附合の体、今目前にあり、燭身泣涕数行なり。」と、この句が二句立のものとして引かれている。思いがけぬところで、その原形を知ったのに興を深くしたが、これを見ても、「武玉川」の句が連句からの抜萃であることに間違いない、と述べられているが、右のわらんじは斯う召すものと泪ぐみ  
遠くきこゆる鉄砲の音

のと泪ぐみ」という長句を戊辰(明治元年)五月十五日頃、江戸の俳人が前句として、「遠くきこゆる鉄砲の音」と附けてみただけのもので、この二句立の連句が明治以前に、はじめから存在したものではない。そう考えるのは雀郎先生の錯覚である。

これは熟考してみれば誰にも知られることである。

### (四) 「草鞋は斯う召すものと泪ぐみ」の原句

寛延三年というのは、漸く「武玉川初篇」が成った年である。この年、即ち寛延三年十一月に濃州の露石丈が『俳諧雪の獅子』を撰しているが、この中に見える「うき世なりけりく」を前句として附けた句に、

草鞋をかふ召す物と泪ぐみ

という句が発見される。

すなわち、こちらの方が『俳諧武玉川』十一篇の原句であっただけではなく、宝暦四年三月刊の『武玉川』六篇の中に、右の類句と考えられる句に

夜中草鞋をはかせ奉り (武玉川六の)

という句のあることに注意すべきであろう。

なお、参考までに『雪の獅子』の中に、どのような句が採られていたかを見ると、例え

は、

舌斗大名になる料理人

—前句「ちよこりくくとく」

娘持ッ親ハむすこが目にかかる

—前句「あるきくもく」

後ろ指びさしたる人にかくまわれ

—前句「うき世なりけりく」

煎豆と女房ハ側に置くが毒

—前句「ちよこりくくとく」

子がないで泣くに泣く子が有て泣く

—前句「うき世なりけりく」

などというような句が見られる。

『雪の獅子』での寄句高は、合計一万千六百七拾九句もあったというから、佳句もあったが、駄句も多かったようである。

喪中につき年賀のご挨拶を

欠礼いたします

〒664 伊丹市西野七丁目九二

榎 谷 寿 馬

電話〇七二七(八一)一三九八



花が咲く女がきつと逢いにくる  
 気付く頃いろ褪せていた花ことば  
 押し葉して小さな自然手に触れる  
 忍の額だるまになった気で見つめ  
 偽善者が軽いつづらを提げてみる  
 求人の子ラシに私の齢がない  
 りんごの皮一里も剥いて津軽春  
 可愛くて孫に打出の小槌振る  
 爺ちゃんの素語を聞くもう春か  
 雨雨雨しつとり似合う京の旅  
 義理で来て出口に近い席を占め  
 もう急ぐことない老いの凡夫婦  
 草いきれ戦の終り北で聞き  
 流れ矢の如きに当りたくはない  
 石が心を躡わす京都の雨の庭  
 世の中を鬼も仏も喘いでる  
 慌てても種は急いで芽を出さぬ  
 人間の顔が丸くて河馬笑う  
 深い海で祈ることしか残されぬ

米子市	岡山県	福岡県	和歌山県	泉佐野市	奈良市	広島県	岡山市	倉敷市	出雲市	呉市	鳥取県	弘前市	堺市	美祢市	東大阪府	姫路市	和歌山県	島根県
政岡	土居	横地	山川	阿萬	宮口	田村	井上	野田	小玉	林野	羽津川	斉藤	高橋	安平次	森下	大原	桜井	西村
日枝子	耕花	雅風	克子	萬的	笛生	新造	柳五郎	素身郎	満江	魁光	公乃	千子	弘道	愛論	葉香	千秀	早苗	

楽天家あしたの風を信じてる  
 ていねいに暮していますおぼろ月  
 柿むいて父だまつてる嫁ぐ朝  
 遍歴の草鞋数えているホーム  
 みの虫よお前も宅地の無い不安  
 嘯りに喜怒哀楽があるのかも  
 人生にたとえると夕暮れの五時  
 カルダンを着たべつびんの河内弁  
 お達者のへいへいへいと春の風  
 台本にここで笑うと書いてある  
 天使にも夜叉にもなります女川  
 遠い娘に心通わす花筏  
 生涯を詩と音楽に賭けて生き  
 資本家に雑草の意地見せてやる  
 瘠せるだけ瘠せても生きる薬漬  
 セレモニーはたから見ればみな喜劇  
 ふるさとは日本ツバメの子が巣立ち  
 そう言えば還暦という初日の出  
 糟糠の妻へ着せたい竹の柄

河内長野市	弘前市	高知市	唐津市	唐津市	倉吉市	静岡市	出雲市	八尾市	和歌山市	倉敷市	吹田市	倉吉市	西宮市	岡山県	神戸市	寝屋川市	奈良市	富田林市
井上	波多野	川竹	浜本	浜本	奥谷	渥美	石倉	宮西	山田	水粉	藤村	渡辺	瀬尾	荻野	仲ど	平松	天正	新開
喜醉	五楽庵	松風	ちよ	義美	弘朗	弧秀	芙佐子	弥生	高夫	千翁	メ女	菩句	六郎太	鮫虎狼	どんたく	かすみ	千梢	千代女

平凡に恋平凡に結ばれる  
 母のペンいつもやさしい語で終わり  
 ラストナイトの事にはふれず朝の雪  
 しあわせごっこしたくて花をまとめ買い  
 嫁さんが動いて少しずつ狂う  
 ワイングラスジョークの好きな人ばかり  
 フルムーン今夜の妻は美しい  
 秋暮れて鳴き疲れたか虫共よ  
 取り替えのきかぬ部品へ張り薬  
 戦争の彫りの深さを埋め切れず  
 あした咲く程は山茶花散っておく  
 ツンドラを渡り終えたら鶴になろう  
 三さがり嫌な日もある師の音色  
 泣きに帰れぬ嫁の実家は北の果て  
 小商人グツと耐えてる喉仏  
 申告の経費へ税が怖くなり  
 欲目ですどの子も美男美女に見え  
 一点でよいのに満塁ハイファイブ  
 政治家を逆さにすれば飴が出る

大阪市	西条市	羽曳野市	大阪府	寝屋川市	豊中市	松原市	和歌山市	七尾市	熊本市	米子市	鳥取県	姫路市	姫路市	姫路市	姫路市	姫路市	姫路市	藤井寺市
河井	片上	佐野	西出	稲葉	辻川	小池	玉井	松高	有働	石垣	江原	中塚	都里	丁坪	越田	増田	植村	吉岡
庸	明	白	楓	冬	慶	しげ	豊	秀	芳	花	とみ	遊	遊	遊	み	と	客	美
佑	水	水	楽	葉	子	お	太	峰	仙	子	お	峰	光	子	子	子	子	房

正月と運動不足と消化剤  
 逆縁の骨壺天は土砂降りに  
 ほとけ様亭主が無理を申します  
 まだ続く旅であるなり道草も  
 職持たぬうしろ姿は隙だらけ  
 リハビリ十年そろそろ戻る主婦の席  
 人一人死んで一つの時代去る  
 年寄りが居って頼りのない返事  
 几帳面すぎて貴方は絵にならぬ  
 雪を見るところに春の詩がある  
 深呼吸して決断の矢をはなつ  
 一徹の父を泣かせるお立ち酒  
 いたずらの記憶残した傷の跡  
 季が巡り人それぞれの暮し持つ  
 針供養ミシン針しかない夫婦  
 沈む陽が明日を約束してくれる  
 そつとして欲しいわたしは活火山  
 雑草の耳に流れる川がある  
 ハイハイハイいつも正しいのはあなた

鳥取県	米子市	米子市	兵庫県	加賀市	大阪市	柳井市	静岡市	静岡市	鳥取県	平田市	岡山市	大阪市	大阪市	鳥取県	米子市	寝屋川市	岡山市	貝塚市
新	澤	光	中	細	黒	弘	永	安	土	久	二	金	岡	松	青	岸	矢	行
家	田	井	田	呂	田	津	倉	本	橋	家	宗	井	田	下	戸	野	内	天
完	千	玲	白	魯	真	柳	僕	晃		代	吟	文	ふ	た	田	あ	寿	千
司	春	子	李	木	砂	慶	川	授	螢	男	平	秋	み	み	鶴	や	恵	代

出た釘と知ったら潔く打たれ  
 生活の詩をゆつくり聞く老後  
 春を待つ心が花屋覗かせる  
 六十になって童話を書きはじめ  
 献血車礼儀正しく動き出す  
 ひと一人ゆるす勇気をあためる  
 さんまを並べ臓器移植を考える  
 大物にさせたいさせたくない我が子  
 ひと言を信じて生きる青りんご  
 蓋をした過去が余震で顔を出し  
 新しい顔で出てくる陽が好きだ  
 泣いたから今美しいものが見え  
 喰べ残し一切れもない皿洗う  
 人間の匂いで悩み分かち合う  
 虚飾には遠く神父の黒い服  
 雄蜂よすこし自分を取り戻せ  
 ひと息で吹き消せぬ過去誕生日  
 寡婦ひとり甘え許さぬ向い風  
 音痴でも唄えば孫は寝てくれる

岸和田市	岸和田市	富田林市	和歌山市	豊中市	米子市	大阪市	鳥取県	米子市	高石市	竹原市	出雲市	伊丹市	和歌山市	唐津市	寝屋川市	和歌山市	岸和田市	倉敷市
島崎	古野	藤田	野村	田中	小村	本間	さえき	田中	浅野	信本	竹治	櫻谷	西山	仁部	堀江	堀端	植山	田辺
富志子	ひで	泰子	太茂津	正坊	てい子	満津子	やえ	亜弥	房子	博子	ちかし	寿馬	四郎	光子	三男	武助	灸六	

嘴で殻を破って出る勇氣  
 温もりが流れる母の子守唄  
 下り坂で振るサイコロは力まずに  
 短かすぎる紐を必死に結んでる  
 さくら餅言いたいことは明日にする  
 拝まれて石も仏になってゆく  
 棘抜いてあげよう痛みわかるから  
 敗者復活時期を失したなと思う  
 木魚が打ち身薬を飲んでる  
 焙り絵の向うに青い嘘がある  
 蟻の列味方と信じてついて行く  
 生一本妥協許さぬ土佐育ち  
 アメリカの日本いじめはヒスめいて  
 老骨に鞭うつ敗者復活戦  
 大いなる遺産は親の生きざまだ  
 熱湯三分冷えた愛など戻します  
 叱られてこのぬくもりは何だろう  
 仏さんごめんネ今日はそうめんよ  
 まん中で指揮棒を振る水すまし

茨木市	岸和田市	大阪市	大阪市	和歌山県	和歌山市	和歌山市	下関市	鳥取県	富田林市	大阪市	高知県	青森市	大阪市	藤井寺市	富田林市	寝屋川市	京都市	守口市
井上	芳地	町田	神夏磯	寺田	内芝	福本	石川	土橋	片岡	鍛原	赤川	工藤	井上	福元	田形	江口	松川	結城
森生	狸村	達子	典子	裕美	登志代	英子	侃流洞	はるお	智恵子	千里	菊野	甲吉	白峰	みのる	美緒	杜度	杜的	君子

十五夜に我慢の胸がふっと切れ  
 納得がゆくまで太い木をきざむ  
 初日の出山から明けてくる大和  
 知らぬ町通れば知らぬ花に逢い  
 赤い実の成る樹が胸の奥にある  
 一瞬を見事に飾る流れ星  
 裏切りに遇うてジャガ芋芽がのびる  
 きれいにも汚なくもする血の絆  
 比べものにならぬというて比べられ  
 手抜きして欲しい日もある海の音  
 風化したキャリアが背なにからみつ  
 神の森身内にしたたい人が住む  
 軍国の歴史は知らず散る桜  
 木枯らしに美味しいパンを抱えてる  
 反骨の人も駅へは急ぐなり  
 乾盃のコップ置いたり握ったり  
 空調の音がすかなり美術展  
 青い鳥追うて悠々たり八十路  
 群集を抜けて拾ったこぼれ種

寝屋川市	寝屋川市	西宮市	黒石市	守口市	吹田市	鳥取県	倉吉市	東大阪市	米子市	八尾市	宇部市	出雲市	大阪市	和歌山市	鳥取県	大和高田市	米子市	吹田市
里	近	奥	相	森	栗	森	渡	崎	寺	宮	平	吉	北	神	林	岸	菅	園
	藤	田	馬	川	谷	田	辺	山	沢	崎	田	岡		平		本	井	田
小	一	み	一	ま	春	布	独	美	み	シ	実	き	勝	狂	露	豊	と	文
路	途	つ	花	さ	子	堂	歩	子	ど	マ	男	み	美	虎	杖	平	も	子

いま聞いた内緒がじっとしていない  
 腹減らぬのが怖いこと考える  
 履歴書を一度も書いたことがない  
 息抜きのはずの手習い重くなり  
 人形になつて浮世の外に居る  
 火のついた煙草のような物思い  
 いとおしむ命は限りある命  
 これ以上何を見んとて眼鏡ふく  
 木守柿刻を飾ろうかと思う  
 祈りつかれ鶴折りなれて冬の章  
 男世帯で糸が纏れてばかりいる  
 逆境に耐えて野心をあたためる  
 顔のしわ伸ばしておくれ小糠雨  
 湯豆腐に熱燗建國記念の日  
 墓石を洗うしかない恩返し  
 やさしさと厳しさがあある大和がな  
 厳格な父の涙で嫁ぎゆく  
 振りかえる者に空しき飛行雲  
 そこいらで待っててくれる福の神

川西市	島根県	大阪市	和歌山市	高知市	寝屋川市	鳥取市	松江市	羽曳野市	和歌山市	高槻市	大阪市	西宮市	和歌山市	寝屋川市	松原市	今治市	尼崎市	
松本	松本	松尾	津守	青枝	北川	宮尾	小林	恒松	吉川	後藤	河瀬	江城	西口	垂井	柴田	佐藤	月原	黒川
ただし	文子	柳右子	柳伸	鉄治	竹萌	あいき	由多香	町紅	寿美	正子	芳子	修史	いわゑ	千寿子	英子	藤子	宵明	紫香



深く耕やそう土の呼吸が楽になる  
 山脈の続く明日を疑わず  
 稜線の雲旅人を繖す  
 帽子が一個轍に残る旅の果  
 てのひらにわたくしだけの天がある  
 うっかりと方向音痴のあとにつく  
 ほんとうの味方味方の顔をせず  
 独言喋りはたきに力入り  
 実直に一人一役して終る  
 たっぷりと泣かせてくれる母の膝  
 俺という扁平足を野に晒す  
 捨て切れぬ古里があり星光る  
 脱税の城はガラス張りのビル  
 師の揮う生きものの如き筆の先  
 振り向いても振り向いても陽が落ちる  
 勝ち馬の手綱に群がる影法師  
 別れるときめてはならぬ冬の虹  
 あの雲はすがりつきたい胸に似る  
 目の位置に時計が置いてある客間

島根県	岡山県	鳥取県	箕面市	唐津市	大阪市	大阪市	吹田市	尼崎市	米子市	米子市	和歌山市	米子市						
小田川	河原	細木	松本	藤原	石田	岸本	小林	森山	椎江	久保	小林	中西	茂見	奥山	林	林	福井	野坂
智重子	恵美子	歳栄	はるみ	鈴江	清泉	輝水	妻水	盛桜	清芳	正敏	トメ子	兼治郎	よ志子	美智子	瑞枝	荒介	桂香	なみ

美は乱調にあり花吹雪

向い合う炬燵で夫を採点す

天皇の肩に昭和史燦然と

目の毒というのが宝かも知れず

ヨチヨチの孫に合わせた鳩の足

湯に浮かばいっそおかしあばら骨

これからの夜が明けてくる淡々と

蓋とれば女が見える火消壺

人妻の名残りをとどむ好きな指

心配をおし切り朝の靴をはく

老人の諦めに似て霖雨降る

千本の菊を束ねて神を呼ぶ

のほほんど夫婦の爪がよく伸びる

他所さまの幸せばかりよく見える

仕事着が愛のかたちに干してある

コンピュータのしつぺ返しはきつとある

愛情の極み乳房にある重み

父と子の対話塩辛なめながら

胸にある火口へ檸檬しみてくる

島根県

倉吉市

藤井寺市

豊中市

岸和田市

松原市

富田林市

島根県

大阪市

寝屋川市

岸和田市

尼崎市

尼崎市

芦屋市

八尾市

竹原市

富田林市

鳥取市

和歌山市

小

淡

笠

江

原

谷

松

北

古

北

福

春

春

上

高

古

和

森

松

砂

路

原

口

垣

本

川

川

美

綾

勝

武

年

佳

鬼

節

維

熊

寿

白

ゆ

吸

明

さ

史

今

民

美

勝

武

年

佳

鬼

節

維

熊

寿

子

汀

子

江

光

子

好

子

枝

子

晴

坊

代

秋

遊

夫

子

生

子

子

探しものするよう帰郷してきたが  
 喜寿すんで傘寿までもと老いの欲  
 なんやけど豆もするめもかめまする  
 灯を消してただそれだけの夫婦なり  
 火をつけるだけの男の肩書よ  
 悪党は悪党づらをしていない  
 大丈夫でっかと長風呂覗かれる  
 無駄口は決してきかぬ力釘  
 首に吊るクルスが揺れる生きるとは  
 あんたかてうちかて阿呆で仲直り  
 人生に無駄でなかつた回り道  
 裏側がぬれてる悲しい鬼の面  
 釣宿の館ともかくくえくえの味  
 長い目で見てとは寿命持つかしら  
 空港で訣れて二十年は経ち  
 木々芽生え期待ばかりが先走る  
 紙コップ話相手を選ばない  
 地球守る緑の種は風に乗る  
 ふたり居て二人の世界くちびる二つ

鳥取県	鳥取県	羽曳野市	大阪市	大阪市	松原市	大阪府	桜井市	高槻市	堺市	西宮市	松原市	大阪市	岸和田市	竹原市	羽曳野市	大阪市	奈良市	大阪市
中	中	田	鈴	小	北	坂	岩	川	河	林	玉	西	高	山	榎	藤	長	西
原	原	中	木	出	野	口	本	島	内	置	田	須	賀	内	本	田	谷	森
諷	み	隆	節	智	久	公	雀	諷	天	は	重	柳	金	静	吐	頂	春	花
人	さ	二	子	子	子	子	踊	云	笑	つ	人	宏	太	水	来	留	蘭	村



春陽に土の俸せ嗅いでいる  
 うぬぼれがつのりはしごを外される  
 秘境縫うSL降りたい場所がある  
 日傘くるくる昨日のことは忘れよう  
 愛深く母の怒りに海がある  
 厄年のヒマワリコスモス菊の花  
 挨拶がととも上手なにぎり飯  
 秋摺むうれしきトンボ返りする  
 よかったネと言われる生命だったるか  
 旧人類大日本が捨て切れず  
 ラストまで弱音は吐かぬ亀の足  
 山茶花の散りしく庭の去年今年  
 お腹蹴る子へありがとうありがとう  
 中国路伊部の里に立つ煙  
 菊人形淀君はいま着替え中  
 翔ぶまでは孫の風船持ってやる  
 悲しみに負けてはならぬ深呼吸  
 七癖の中に茶漬の箸の音  
 ハンカチの白で押し通すは難し

豊中市	岡山県	岸和田市	海南市	大阪市	大阪市	堺市	松山市	唐津市	和泉市	大阪市	堺市	富田林市	羽曳野市	京都市	岡山市	高槻市	大洲市	鳥取県
橋	山	宮	三	柳	坂	河	谷	筒	岡	神	藤	板	塩	山	川	辻	米	中
高	本	園	宅	原	本	内	井	井	谷	井	尾	満	本	端	澤	原	原	原
薫	玉	射	静	仙	月	信	朴	やす	凡	一	岳	規	柳	白	暁	汲	香	香
風	恵	月	香	吉	子	夫	竜	お	九	二	人	不	子	溪	明	香	香	香
	芳	保	保	郎	郎				郎	三		風	子	子				

明けましておめでとうございます

川柳塔社常任理事会

理事  
副理事

常任理事

西尾 栗  
阿萬 的  
橘高 薫風  
黒川 紫香  
西田 柳宏子  
野村 太茂津  
板尾 岳人  
岩本 雀踊子  
榎本 吐来  
金井 文秋  
神谷 凡九郎  
河井 庸佑  
河内 天笑  
川島 颯云児  
小出 智子

里 小路  
塩満 敏  
高杉 鬼遊  
田中 正坊  
谷垣 史好  
玉置 重人  
辻 白溪子  
春城 武庫坊  
吐田 公一  
藤井 二三  
松川 杜的  
宮口 笛生  
宮園 射月芳  
吉岡 美房



黒川紫香選

西宮市 秋元てる

藤井寺市 高田美代子

嬉しくて友情押し売してしまい  
祝事なのに聞きわけない涙  
絵日記に書かれたママのいい笑顔  
絵の中におさまり切れぬ野望抱く  
お守りの有効期限切れていた

米子市 足立由美子

いつからか老母の口調で生きている  
逢うまでが楽し電話の打ち合せ  
嬉しさをいっぱい詰めて逢いに行く  
簡単に水に流して出直せぬ  
思い出の橋はいつでも美しい

尼崎市 児玉歌子

悔しさを散らしてくれる酒の量  
偽善者の涙はすぐに渴き切る  
月光を胸に遊ばす片思い  
目線まで執拗に追う嫉妬心  
譲れない線が夫婦の中にある

また白髪増えたと冬の風がいう  
何しても調子が良くて怖くなる  
兄に似た人で甘えてみたくなる  
気分少し変えます漫才聞いてます  
よく笑う客に仔猫が落ち着かぬ

鳥取県 小谷美千

わが胸に真つ赤な薔薇をくれたひと  
パフォーマンス時の流れに逆らえぬ  
食卓の花一輪も愛ですよ  
人恋しくて月の雫が頬つたう  
満月に丸い乳房を覗かれる

今治市 野村京子

引き金をひいてしまったイヤリング  
赤いバラへはしゃいで見せるカスミ草  
そして秋別れ話へ雨続く  
さざ波が立つ風知らぬ水中花  
生きべたがくにて咲かしたこぼれ種

広島市 流 奈美子

人形の会話はいつもやさしすぎ  
額いた後で言葉聞き返す

晩秋の案山子にセーター着せてやり  
都会への翼上げる子の助走

耕花集くよくよ病が消えました

高槻市 笠 恵美子

充電にしては短い旅プラン  
魂胆があるから砂糖効かせとく

野仏の何やらうれし童謡

時雨ではいよいよ秋が深まりぬ

おんな対おんなの視線凍りつく

八尾市 高 杉 千 歩

嫁に座を譲って初の屠蘇祝う  
学間に励もう殊勝な計をたて

亡母の笈へやさしくゆれる花手桶

雪しんしんひとつ覚えの数え唄

チャンネルの嫌いな鬼と兎小屋

富田林市 池 森 子

運命線辿ると無人の駅に着く  
思いつき妻になりきる殺意抱く

欲望が強くて積み上げている荷物

直感の的をはずして風になる

岐路に立つ男の嘘に支えられ

熊本県 大 川 幸 子

張りつめた糸が息切れせぬように

出世には届かぬゴマをすってみる

しゃれた名のカクテルについ酔わされる  
風にもまれ生きて居ります無我夢中

火傷せぬ程度の熱さで恋ゲーム

名古屋市 藤 井 高 子

虹いろを纏い傘寿の翺び上手

煮大根 亡母の情けに浸り居る

そろそろと鬼が後へまわりだす

騒ぐだけ騒いでうつろなり孤影

居酒屋に脱ぎ散らかした面兜

佐賀市 寺 中 三 枝 子

クラス会恩師の髭も白くなり

テリトリー守るかある靴を買へう

歳巡り小指の嘘はもう時効

温かくして欲し母へシヨール編む

裏鬼門にいつ植えたのか肥後椿

富山市 舟 渡 杏 花

決定打焦りはじめる折り返し

仔猫に弄ばれてるラブレター

ここでは裏はら笑顔美しい

ひと刷毛で消さねばならぬ男の名

土地を売る話へノラが舞い戻る

熊本市 宇 野 昭 代

自惚れがあつてこの世に生きる張り

味噌汁がしみみうまい旅帰る

咳二つ三つ赤ん坊から隔離され

二の足を踏むお隣の門構え  
名月をほめ合っている電話口

長岡京市 木本如洲

しあわせは遠い故郷の森にある

筋書のない一日が旅にある

秋の街鬼のひとりが笛を吹く

アジトの坂を逃がれて母の海へ出る

下帯をしっかり締める細雪

静岡県 菌田 猿 沓

溪流釣り知らない人がダム造る

鬼やんまの飛翔を孫に見せた夏

生字引き一人になって辞書を繰る

昔から犬が苦手で吠えられる

ひまわりのブームで買ったシャツ仕舞う

徳島市 宮武 まつ女

ふり向けばひたすら恥じる赤い糸

幾とせのテスト強気な糸車

鈍行でとっても嬉しい夢をくれ

ぬか漬けの中へ投げ込む妻のぐち

一病を抱いて哀しい花遍路

久留米市 鶴久 百万両

人間バンザイひとの情けを知る賀状

週刊誌の口絵に妻を推そうかな

あなたとならタンゴワルツは踊れそう

住宅ローン完済までは死ねないぞ

芸術のようにリンゴの皮を剥く

滋賀県 久保和友  
鉛筆を嘗めねば書けぬ入国カード

雲灼けて砂漠も灼けて昼寝どき

ウイグル娘がイメージこわすごと受話器

くすぐりたいぞ孫悟空がいるシルクロード

裸灯に夫婦のミイラ悲壮めく

静岡県 片平 静代

したたかに笑って涙拭いている

騙されてみよう迷路抜けるまで

追伸へ今度のデート打診する

両隣いい人ばかり朝の顔

湯の街へ寂しい心誘われる

和歌山市 堀畑 靖子

肩のこり解すワインを飲む夜長

哀れっぽくなるから年は言わんとこ

仲直りしよう木枯し吹く前に

コトコトとお鍋も冬の音になる

兵庫県 酒井 靖子

胸算用言葉に釘を差しておく

手袋の白さに女の詩がある

躓いたところで拾う母の笛

どん底で友の絆に酔うた幸

大阪市 上田 柳影

一病が癒えず食欲の秋嫌う

餌蒔いといたからあつさり二度の職

百万ほど儲けましたと電話だけ

この頃は妻が教える株価値欄

尼崎市 吉永伊三郎

ひとり寝の男の汗は絵にならぬ

点字読む笑顔に親は救われる

マンションの窓の数だけ夜が更ける

読本の塵を払えば礼智信

尼崎市 野瀬昌子

問題の人が来合せ座がしらけ

寝すごして予定立たない昼の月

旅疲れ深いねむりに落ちている

皮財布カードずらりと並べてる

出雲市 金村青湖

子の帰省秋の夜長を飲み明かす

渡り鳥冬をわが家にして帰り

見栄捨てて帰ろう郷里に老いた父母

割り切れぬ数をはじいてみる師走

熊本県 高野宵草

撒く種は餌ではないよ雀さん

ポックリと逝った話が羨まれ

行き先は終点安心して眠り

コスモスがきれいな駅に止まる汽車

西宮市 松本一郎

出世には遠くわたしと影法師

外出の昼はうどんに決めている

ひまな僕孫が相手をしてくれる

親に似て世渡り下手な子を案ず

鳴門市 八木芳水

信念があるので耳を貸さぬ僕

間違いを誰も言わない悲劇かな

生き甲斐を人に説くほどゆとりなし

鬼からも情けを貰う不幸也

吹田市 井上照子

幻想にかられ雨戸に耳当てる

濃いブルー入れて風景描き上げる

天眼鏡あてて原画に筆を足す

立ち向う女のひとみ生きている

酒田市 永沢裕子

赤提燈男の愚痴も聞きあきる

カルチャーに來るのに揺れるイヤリング

白鳥も仲間に入れて冬將軍

貴婦人に今日はなりたい三面鏡

相生市 中塚礎石

戦争のことには触れず寡婦でいる

安全帽だけは被って日雇夫

丸腰と知って野良犬ついてくる

原発の電気も同じ灯を点し

寝屋川市 宮崎菜月

今年こそ棚ぼた願う福の神

魂のずれ落ちそうな終電車

物書けばひよっこり君が出てくるよ

淡雪の名残りはうすく風ばかり

兵庫県 東浦砥代

寡婦として風の便りを聞き分ける  
老いてなお人それぞれにある魅力  
思い出を折る指先に亡母がいる  
悔い一つ背負うおんなの涙壺

堺市 山本半銭

程ほどの力で仲のよい二人  
遠足の子供にかえる唱歌集  
ドリンク剤今日も仕事に追われてる  
お昼寝を起こして電話切れていた

鳥取県 伊吹富恵

やり直し利かぬ人生峰高し  
雪が舞う昔少女の日の如く  
大根の白さに恥じる愚痴一つ  
青い鳥郵便受の中にいた

静岡市 沢田きん

逆立ちがとても自慢の孫が居る  
年頃の娘二人へ悩む親  
時どきは一人ぼっちになる女  
なる程と分った顔で聞きもらし

鳥取県 西浦小鹿

青春の交換日記白いまま  
母親が幕の裏から糸電話  
都会からブルドーザーがやってくる  
秋の陽を受けた干し柿神棚へ

尼崎市 森安夢之助

愛情を待つてる犬の私語を聞く

売り時を逃した株の泣きぼくろ  
胸張ればぶつかって来る風の音  
青りんご自慢の絵からころげ落つ

堺市 桜沢あかり

原筈の町一見平和そう  
今だけを楽しんでいるイヤリング  
目の前のヒントを敵にさらわれる  
どちらともとれる返事で燃えてこず

大阪市 吐田純子

子や孫と集う茶の間の輪がぬくい  
快復を信じる母の百度石  
くすり指に一生誓った愛がある  
いい席をとってあの世で待つと言う

静岡市 久保きぬ

胃カメラの意見すなおに禁酒させ  
デパートに妻のストレス捨てて来る  
几帳面だから手抜きが気にかかり  
ただ黙って見守るだけで血が通い

東子市 小山悠泉

採り入れの柿も農夫も染む夕陽  
ストープ列車心がぬくい北の旅  
敗者復活再就職へ賭ける靴  
人一人救う嘘なら許される

熊本市 北川一進

弁当が追っかけて来る忘れもの  
回り舞台半分口を開けたまま

この金魚僕の給料より高い  
遠くからステージ見てる元スター

尼崎市 木下 義嗣

白煙が遠くに見える連絡船  
栗飯に秋の味覚に舌つづみ  
兄弟が敵と味方で綱を引く  
自慢する話半分聞いてやる

岐阜市 渡辺 杏村

年の暮土壇場に來てあわてだす  
頭下げ利子の要らない金借りる  
高校生鼻で笑ったお説教  
節約はしても欠かせぬ餅頼む

廿日市市 森川 抜智

ここまで來たから百まで生きる気だ  
回覧板持つて行くにも化粧する  
八方ふさがり一つ空いてる道があり  
天皇の平癒をねがう戦友会

大阪市 今西 静子

中流のくらしか朝のパン コーヒー  
悪女にはなれそうもない泣きぼくろ  
輪になって上座下座のない笑い  
法話きく善人いつか眠りこけ

京都市 木村 たけし

逃げてゆく鬼の背中に罪がない  
口紅の紅がすぎない返事する  
矢印の親切山荘までのこと

舟からの仰ぐ嵐峡月涼し

尼崎市 鈴木 良征

週休二日制無視されている小企業  
病んでいる鳩の行方が気にかかる  
ピカソの絵にピカソの指紋ついてない  
先生がさきに挨拶してみせる

貝塚市 池田 寿美子

順送りと聞き流して今日も生き  
願う事たった一つにしておこう  
先入観今年の運を考えず  
水紀行昔の貌がなつかしい

米子市 大田 みさと

引き出しに嘘をつかない鏡がある  
この壺もいつか壊れる定めです  
おうむだって好きな言葉を選びたい  
口笛を吹いて気持をはぐらかす

和歌山市 田中 輝子

仲裁をかって出たのは庭の花  
見逃した筈のゴキブリ死んでいる  
中ビール一本飲んで多弁なり  
肩の掌を素直に受ける長い坂

町田市 上鈴木 春枝

ご帰宅を見られたような電話ベル  
お散歩の相手をさせる犬を飼う  
おかわりのたびにコーヒー薄くなり  
ひと呼吸置かせてくれぬ自動ドア

菊仲間自慢話を先にする

尼崎市 的場 十四郎

馬鹿力出して若さの水かぶる

人さまの暮しに溶ける裏表

表面に出ない男が金貯める

尼崎市 山田 保藏

鐘の音が淋しく暮れる京の秋

金持ちの後家は美人に見えてくる

いやな客また来なさいと送りだす

出囃子にハッと目がさめ老夫婦

和歌山市 田中 みね

親切を時に負担と思う日も

育て上げ今朝は手離す娘だるま

エリート椅子で味わう孤独感

明日は明日今日倅せの仕舞風呂

和歌山市 山口 三千子

たて横が解る電話の話しぶり

心の眼開いて闇を見きわめる

スベアキー作ってからは失わず

留守番電話に大事なことは話せない

大阪市 山田 妙子

自動ドア開いたからには入らねば

為せば成る四十女が免許取り

多忙でも遊びはしかと組んである

元旦に毎年同じ願かける

和歌山市 前田 美子

ひと言は心の隅に秘めてある

ベッドから鏡に写す十三夜

ヨチヨチが可愛い主役演じてる

老いてなお明るい彩にあこがれる

川西市 野村 静雄

人生の無常を語りながら列

五十年前の小川がある故郷

汚されにぼっと出て来た美しさ

先生の瞳は少年の瞳を躲し

十和田市 阿部 進

一日の疲れをいやす妻の酌

落ち込んだ子ども励ます母の愛

不養生結局医者世話になり

さわやかな朝の目覚めで老い達者

伊丹市 猪原 石莊

侵されず侵さず真の平和あり

雨の街肩をすくめて雀居る

当然と思えば不平湧いて出る

御神木目よりも高く注連を張り

岡山市 後安 江山

遠来の客母さんの標準語

ハッピー着て親子孫つき祭り好き

山芋の味まろやかに祭りの夜

親孝行させて下さい肩をもむ

鳥取県 太田 幸枝

機転きく妻が警笛くれている

爪先も生きてるシンクロのポーズ  
自殺した男の通夜が冷えている  
財布のひもが笑いをくれた縄のれん

京都市 渡辺圭坊

ふところは乏しく万両よく実る

蟹の値も天文学的数字かな

寶貝と育む夫婦王城園(中国の旅)

シルクロードロマンの入口西安市

鳥取県 萩原美雪

思うこと言えぬ自分に腹が立ち

この年になって恋に憧れる

もつれてる影を砂丘の風が妬く

人が皆信じられない日の孤独

出雲市 金森知恵子

残り陽をお前も恋うか赤とんぼ

苦勞した文字は大きく書きたがる

チューハイはホット眠れぬ夜を埋め

岡山県 土居ひでの

浄土まで道を計りに行つたまま

野辺送りここにも哀し曼珠沙華

娘がくれた服着て行こう旅の計

藤井寺市 楠昭子

彫り終えた仏と向う無の時間

聞きもしないのに答えるから疑われ

二十一世紀まではと青竹踏んでいる

吹田市 山本希久子

さりげなく愛を告げてるシクラメン  
一日を不満が四つ暇三つ  
てにをはに迷った拳句もとのまま

鳥取県 西川和子

吉日に水引堅く結ばれる

袋帯今日から姑になるのです

なんとなく満足いかぬ耳掃除

和歌山市 森茜

おだてられてるらし踵かえさねば

伝言板隅で見つけた小さな恋

ついたちを忘れぬ母のお赤飯

高槻市 芦田静江

祇王祇女短い秋を舞いおわる

任されて家の急所に老いの脈

堪え抜いた姑のつむぎに手を通す

羽曳野市 福田満洲子

NTT昔ばなしもしてくれる

ぜいたくなペットフードに飢餓想う

ベテランの中のピリなら気が軽い

守口市 森川春子

朝焼も夕焼もよい富士の山

履歴書に時間がかかる遠い過去

流行を追わないままで嫁に行き

熊本県 岩切康子

意気消沈煮干がやたらと煮えてくる

錦絵の溪谷を行く雲走る

柿食えばみかんが転ぶピクニツク

枚方市 森本節子

栗ご飯炊けばあちこちおすそ分け

植木屋がひげを生やしてやって来た  
年寄りを見ればお年聞きたくて

旭川市 朝倉大柏

嘲笑はつんばさじきにも聞こえ

ソロバンを弾くと友が一人去り

決めるのは結局あなたと相談欄

大阪市 島路太郎

あの人もこの人も逝き秋もすぎ

えらそうに書いた誓いの小さな字

ふぐの鱈べたべたはった法善寺

尼崎市 中澤向西

ローカル線地声は高い待合所

慣れている手真似で外人着物買う

表札に親父の名前頑とある

寝屋川市 河合時弘

謙譲の美德古いと笑われる

赤信号で渡る若気の無鉄砲

根回しがうまく同志に担がれる

大阪市 川原章久

もしやもしや妻のへそくりクルート

出たそうに覗く小猫がガラス越し

猫舌が困る生姜湯冬の宿

岡山県 千原理恵

東北の旅(二句)

鶴ヶ城白虎の無念今あらた

謎かけて思索の中のつむじ風

疲労こんぱい一服の茶のありがたさ

兵庫県 森脇和子

天高し野良着で唄う里の秋

奥の手は一つ心得ているピエロ

母ちゃんの味方で温い部屋にいる

大阪市 亀井円女

あの頃は花いちもんめで日が暮れた

老夫婦悟り顔にてすすのお茶

クラス会みんな踵のひくい靴

尼崎市 尾宮弘治

指切りで決めた相談荷が重い

生臭い煙に尼僧蓋をする

コーヒーが冷えても言えぬさようなら

尼崎市 明壁敏之

からっぽになった財布の一人ごと

程ほどに八百長もあり草角力

軽い気で返事の後で思案する

和泉市 中川楓

くつろぎを心にもらうミレーの絵

帯解いてまだ紅葉に酔っている

湯豆腐が女の愚痴を聞きにくる

島根県 加本義良

握手する中には敵の手も混じり

人並にタイムカードを押して出る

菊の白人の心を信じきる

京都市 小林英子

患うて身辺整理思いつく

負け犬が強がりと言うコップ酒

亡母の手紙に長い文句が生きている

米子市 新正子

白鳥が冬の神さまつれて来る

笹舟が目指すつもりの地平線

胎動と語って母となつてゆく

八尾市 椎尾公子

灯がはいり京都情緒に酔いしれる

モダンガールと言われた頃の灯が赤い

鉢の中泳いで金魚恙なし

豊中市 滝北博史

家中のリズムが狂う妻のかげ

女房が求人広告読んでいる

旗色が悪くなつたらどなるだけ

佐賀市 江口万亀子

無礼講で飲めば恩師も出る寮歌

旅の湯も溢れ解けあう嫁姑

日曜日はだめ雑用が多すぎる

愛媛県 八塚三五島

人を許してやっと自分も許される

声聞いただけで安心する電話

世の中はどう変ろうと笹小舟

(前月分)

廿日市市 森川抜智

入院は一番楽な隠れ場所

収賄は私の預金と桁ちがい

奥さんの株も旦那は無関心

尼崎市 新井泰子

笑わない約束ほつべが耐えている

予定表書き換えている受験生

深呼吸出来そもない様な店舗跡

岡山県 福原悦子

たとう紙の淡い香りに亡母偲ぶ

里の味ズシンと重い荷を送る

肩の荷の重さを言わぬ母の顔

静岡市 小木久子

すぐむきになる若さまだあるらしい

自慢ではないがと家系誇つてる

叱られて叱つた人を好きになり

和歌山県 森三枝子

出る前に用事が多い外出着

裏口へまわつてみたがやはり留守

むらさきの着物させたい母の夢

米子市 小塩智加恵

また一人友が逝きます六十路

ファッションで若さ買います六十路

厄年もあと一月で幕が下り

堺市 近藤豊子

アドバルーン紐の長さを揺れてます

秋の風祭りのあとを吹き抜ける  
大空のレンズ磨いて秋の山

新潟県

高野不二

敗者復活が俺にもあればよい  
子離れが出来ないうちに孫が出来  
栄養ドリンク信じる顔で吞んでいる

静岡県

杉山やす

老い一人まわりの風が身にしみる  
仲よしの友と出かける瀬戸の旅  
叱るより愛の言葉を探さねば

岡山県

大石あすなろ

とりあえず洗車おわると雨模様  
いやなこと早く忘れて花鋏  
小引出し淡い思い出こぼれ落ち

静岡市

浅子まつゑ

ドングリを拾う子供に秋深し  
幼子の目のきれいに嘘はない  
雑草の強さに負けて天仰ぐ

泉南市

坂根流水

金持ちでないから幸福あるのです  
山あいの池も冬鴨忘れない  
天皇の病状すなおに受けてきく

八尾市

片上英一

会者定離たまつた名刺整理する  
ときどきは心の旅路してみたい  
点と線終着駅が見えて来る

子約券二枚買ってはみたものの  
物解りよい父さんに金がない  
凡人へ以下同文の努力賞

河内長野市 大西文次

週刊誌斜めに読んで一人居る  
身のほどを知ってか妥協癖がつき  
標準語を喋ると舌がもつれ出す

久留米市 中垣米之

見返りのない愛でよし母の傘  
心ない風のドラマに冬が来る  
青い空みんな許してもらえそう

岡山県 清水悠貴女

珍しく早起き出来たボヤ騒ぎ  
ビタミンが足らんと医者に笑われる  
建て増しへこの度嫁が参ります

藤井寺市 菊地繁男

幾山河夫婦で渡る長き道  
団地ではサンマ焼くにも気兼ねする  
通勤のバスはいつしか指定席

静岡市 柳沢たま

碑に今年平穩の水をかけ  
クシャミ出て気にしてくれる孫がいる  
排気ガス残して跡取り去って行く

寝屋川市 井上すみれ

世渡りは下手だが常に客がいる

川西市 田中喜俊

老いてなおセンスのよさで人目ひく  
手をやいた孫に老いの身委ねてる

島根県 松本 聖子

日溜りへ幸せそうな老母の背な

いらいらを押さえるためのお茶を入れ

言い訳を聞いてやる日とやらぬ日と

愛媛県 石手 武

目に見えぬお金が消えて行く祝

カラフルな薬に頼る風邪の熱

損な道ばかり走ってお人好し

岡山市 中嶋 千恵子

胎動に母となる日の虹の夢

全力で回りつづける夫婦独楽

カタコトで通訳出来る孫がいて

熊本県 増田 一乗

誤字一つ旅の前夜をねむらせず

旅土産買って重荷が一つ減り

不意の事故予算に入れて老いの旅

大阪市 平山 登代

住む人のゆかしさ思わる庭の菊

姑の年忌曾孫の話に発展す

捨てようと整理したのにすてきれず

兵庫県 奥野 テル

そして秋焼芋の味落葉焚き

すれちがう和服のひとつのいい匂い

背の丸み束ねた髪も小さい母

富田林市 加藤 ミツエ  
秋草もそつと手折って墓に供え

物干のパパママの洗濯ラブコール

一人暮し秋刀魚一匹買って行く

岡山県 森下 正子

責任の重みに耐える老いの杖

艶話根掘り葉掘り聞きたがる

鯨尺亡母の指紋が生きている

鳥取県 鈴木 芙美

空っ風もみじにポーズ変えました

一年のつとめを終えて葉っぱ飛ぶ

伴せの風を吹かせて嫁が来る

藤井寺市 武部 敦子

目減りする貯金を孫があてにする

昼下りテレビドラマで舟を漕ぐ

物忘れ頭のさびに油さす

青森県 福士 トキ

菊まつり三条夫人とげがあり

野の花を仏間に飾る秋日和

足元のきれいな花を見失う

奈良市 米田 恭昌

均等法見せる女の底力

藤ノ木に眠る貴人の自己主張

捨てるにも大決心がいる世代

高知市 山崎 一求

病院が患者を招くPR

言分も程々で済む老夫婦

正札の値が上がりつた五割引き

尼崎市 長浜澄子

義妹嫁し同じ立場の味方増え

褒められてつい一回りする落葉

落葉一つ障子に入れて母徳ぶ

大阪狭山市 桜井莊次

身の上がどンドン飛躍する話

人情味溢れる路地の子沢山

合す掌をするりと抜けた願ひ事

豊中市 三宅つえ子

平素はどうしてるのかかぶと虫

防犯ベル切れていました霧の町

車椅子誰にも出来ぬ旅をする

大阪市 榎本路児

酒の量減つたが味がわかりだし

見て御覧蟻もしている立話

一人居の女で酒が好きになる

出雲市 森山健歩

追伸でやんわりとひとを刺す

稲を刈る音が好きだと都会の子

謹厳実直痴呆が早くやつて来た

島根県 菅田かつ子

ごめんなさいただそれだけで気が和み

ブレーキのきかぬ若さが気をもませ

上役の手もとが見える日の焦り

年金が時には汗をかけと言う 今治市 渡邊伊津志

も一人の僕が労働させたがり

コスモスの揺れが教える処生術

米子市 服部朗子

曲り角橋を尋ねて旅続く

生きたくて峰を仰いでペダル踏む

一徹の性根が匂う林なり

大和高田市 寺脇三倉

弁解か懺悔か貝が砂を吐く

五つ玉まだ捨てられぬ父がいて

母だけは味方小言は多いけど

豊中市 玉井房子

水すまし誰に習うたその泳法

負け犬が逃げ込んでゆく縄のれん

負けました貴方がみんな正しいの

堺市 神原文

玉手箱知りつつ開けるあまのじやく

隠そうとしても隠せぬ皺の数

汐時をとらえて女将無理を言う

岡山県 富坂志重

心のうさ初雪きれいに消してくれ

旅の宿十円で足る電話する

思ひ出が糸にきしんで母の顔

出雲市 岸桂子

老母が未だ息災でいる今の幸

故あって皿一枚を割りました

一円は一円なりの旅に出る

香川県 上藤多織

再職はもう諦めた冬案山子

写経の字気ままが少しずつ消える

子を打ったその手が先に泣いている

宇部市 中村三良

メーキャップ落して老いの坂のぼる

くすぶって少し傾く自尊心

約束がとて綺麗な花言葉

弘前市 肥後和香子

青春の味してりんご丸かじり

奪われし心たたんでみじん切り

確実にやさしくなつて胸の線

鳥取県 久野野草

流れ玉当らぬ森の奥へ行く

奥行に老舗の汗を隠せない

汗にじむ米一粒を踏まれない

富田林市 浦田トシエ

病む姑も陛下のご病気案じつつ

柱時計掛けては老いの友とする

往きはよいエスカレータの付いた駅

学者帝を秋の植物なぐさめる

卵バナナ昔の値段で出ています

韓国の分も日本に雨が降り

奈良市 井上大

東大阪市 大平 太一郎  
頭から惚れた味方に足取られ

良い悪い一息いれて迷い出し

玄関の菊一輪にもお人柄

鳥根県 喜島ノブ

あしたからなどと言えない忙しき

ペランダの隅に禪干してあり

届かぬと知りつつ恋の投げキッス

鳥取県 山根八重

おしゃべりが過ぎた女の昼さがり

トップの座奪われてから貝になる

鳥取県 木下 芙葉

言い過ぎて心の底をのぞかれる

腹にある事言いにくい事ばかり

寝屋川市 北岡 波留吉

貞女ではないが愠気ばかりする

野仏が店番をする山の辺路

大阪市 柏木 八重子

秋雨にぬれゆく古都は静かなり

菊活けて共に元氣な誕生日

岡山県 伏見 すみれ

コスモスがかすかな風にも首をふり

欲しかった本が届いて寝ずに読み

鳥取県 黒田 くに子

手の指の太さ農一途に生きる

泣いてなんかいられるもんか天高し

花手種柴栗ひとつ帰り途

自己流の体操をして今日終る

島根県 今川 三津江  
大阪市 平山 和多留

いさぎよく辞めた議員は軽率か

地下鉄が無料で医者代ふと忘れ

和歌山県 田中 隆積

さりげない態度に自信にじみ出る

秋深し佐藤春夫の詩を読む

吹田市 大沢 宙宙

誘われて断り切れぬ人の良さ

打ち明けて心がやつと通じ合い

吹田市 山田 里子

荒っぽい言葉の裏で温い友

三界に女家あり離婚ふえ

岡山県 後安 ふさえ

たどたとど回る八十路の夫婦独楽

かん高い声をきいてる二日酔

鳥取市 武田 帆雀

菊見事彩あり名誉回復す

碁と菊と達磨も画いて世に遠く

和歌山県 岩崎 瑞穂

頑固者孫には素直な好々爺

口下手で大事なことを言いもらす

兵庫県 円増 貞子

おしゃべりの相手どころ毛糸玉

いい母でいつも家族に負けている

静岡市 三井 三津子

無防備を装うばらの痛い棘

どことなく浮気な顔に見られてる

岡山県 牧野 秀香

歯切れよい話は心によくこなれ

移り香が残っています洋ダンス

奈良県 横井 都姫子

近道を抜けてきました泥の靴

碧い空見れば見るほど碧くなり

唐津市 中村 順子

バーゲンの値札は秋の陽に晒し

マネキンの贅次々にニューモード

鳥取県 横山 房子

逃げ腰を見ぬかれ尻尾にざられる

喪が明けて気を取り戻し涙ふく

静岡市 大石 たき

怒るけど心やさしいいい夫

祖父さんの昔の話自慢だけ

岸和田市 三輪 通彦

子無し夫婦で互いに老後案じ合い

肩叩く孫も打算があつてする

静岡市 小幡 芳男

金持ちの日本がとれぬ金メダル

年金で三食昼寝保証され

田辺市 染道 佳明

魔女からもらった庖丁錆びていた  
陽が当たたらぬから買います赤い花

(前月分) 松江市

原 長 三

十五夜の月に兎はもういない  
金魚鉢底に溜っている不平

松江市 原 長 三

小波に月を遊ばせ蜆舟

小銭入れ少し重たく初詣

藤井寺市 中 島 志 洋

托鉢の息真つ白な京の冬

大吉のみくじ素直に信じよう

兵庫縣 倉 垣 恵 美

足跡の深みを拾うた日記帳

引出しの中へ夕日もしまいこむ

大阪市 神 保 拓 生

堤防を歩け歩けと万歩計

ちえの輪が解けず売場に聞きに行く

鳥取縣 吉 田 孝 志

企業誘致僕も帰省をしようかな

列車からいつもの山がみえてくる

大阪市 乾 哲 静

消費税もリクルート株に食われそう

割り勘で飲める気楽なお付き合

岡山縣 松 本 元 江

気のきいた言葉が温い助け舟

すぐそこにある倅せに気がつかぬ

菊も良し紅葉また良し秋日和

黄門の一喝欲しいリクルート

岡山縣 杉 本 伊久栄

ときめきも一緒につめた旅靴

乱雑な机が心落ち着ける

豊中市 村 上 とく子

急ぐまい一歩一歩と進むだけ

柿一つ鳥に残してみんな挽ぐ

唐津市 野 田 旭 恒

休養をとれと検診ひっかかる

石橋を叩く男で嫁がない

出雲市 高 橋 きよし

ぬげがらの二人が見るは時代劇

叱られた過去なつかしむ寡婦の夢

静岡市 青 柳 金 吾

断りの上手な妻の泣きどころ

車間距離つめ過ぎ上司に追突す

神戸市 岩 田 信 義

蕎麦畑白い秋風吹きぬける

夜叉になる女の業の悲しさよ

大阪市 松 永 すすむ

幸福とは妻と室内犬昼寝

この人にやっぱりジョーク通じない

樺原市 西 本 保 夫

三人で開く傘寿の同窓会

島根縣 山 根 峰 雪

尋常科の話懐し同窓会

豊中市 田中道胤

余生です争い事の外に住む

信号の赤が団体切り離し  
万物を皆輝かせ初日の出

流山市 神田治

掬われる足があるからうろたえる

大阪市 山北三三三

金に行き詰れば怖い夢をみる  
雪が降るケンチン汁が欲しくなる

呉市 岡田寿美礼

動物が嫌いで女冷たい眼

楽書の顔に似た人来て詫びる

岡山県 江口有一朗

好きな人ちよつと甘えてみたい秋  
気になったこと一つ済み今日が暮れ

吹田市 西岡豊

初風呂に傷跡多き身を浸す

七十二の春にちよつぱり燃えるもの

奈良市 米田芳子

ぜんざいのコーナーにぎわう文化祭  
数多く便りをくれと外地の子

島根県 児玉幸子

菊大輪ほこらしげなり玄関で  
ほうじ茶の美味しい寺で経写す

富田林市 山原昭水

山肌に野菊見つけて手折られる  
豊作の柿あざやかに玉のれん

泉佐野市 大工静子

織田作もぜんざい食べた法善寺  
弁当にもみじが落ちた渡月橋

八尾市 向井しづ子

リハビリに連れて優しい夫の愛  
よだれ掛供えし日ありアジサイ寺

茨木市 藤井正雄

花嫁を出す気で外へ菊飾り  
気ばたらき精一杯が行きちがい

大阪市 清水絹子

降雨率信じた傘の重さなり  
みせかけの飾り悲しいセツト裏

唐津市 入江喜久夫

二上の山乳房の間から陽は昇る  
立冬に日持ちしてきた仏花

静岡市 大村正雄

尻もちをついて起きれぬ老いし夫  
うちの妻怒ればアスがひどくなる

大阪市 堀口欣一

名案が迷案となる長談義  
茶柱が立って鼻唄わいて出る

羽曳野市 麻野幽玄

親馬鹿と妻を笑って僕も馬鹿  
十二月途端に人がふえて来る

泉佐野市 真崎 浪速子  
遺産分け青筋立てた縁者くる  
振り込んだ金が入ってない口座

倉吉市 青砥 菊枝

刺青を彫る思いにて灸据える  
ココロとしあわせ夫人よく笑う

広島市 名和 喜一郎

夫婦とは無色無臭を良として  
靴磨く妻に左遷が切り出せず

静岡市 丹羽 定次

人柄が友達集め話題出し  
引出物見栄ばかりで押入に

大阪市 平井 露芳

一、二番違つてもくじのスカはスカ  
役員は賢人ばかりの県人会

豊中市 額田 明吉

正倉院シルク博より余韻増し(奈良周遊)  
ロマンの鞍額田部のルーツ尋ね

静岡市 三浦 つね

男女とも同じに見える宿浴室  
人生の終着駅はお寺様

兵庫県 西脇 富美

残したい風紋をまた風が消し  
学祭で忘れた空気吸ってくる

島根県 高橋 武衛

共白髪歩む二人はまだたしか

やきいもの匂い庭から呼んでいる

豊中市 小林 一夫

手土産に絵本をもってくる男  
ちちはのはの好物を買う旅の市

島根県 岩田 三和

ヤカンの湯たぎって浪花節うたう  
ヤマイモをすればねばりが丸くなる

鳥取市 西村 黙光

わが家での祖父はドブク欠かさない  
年金の三食昼寝へ医師もつき

大和郡山市 渡部 トキワ

微酔と演歌でほぐす連れ糸  
七癖の似ている二人同い年

大阪市 喜多 佐津乃

紅の橋かけに行くのは私の手

寝屋川市 豊福 路子

曼珠沙華だけがまっ赤な白い壁  
鳴る三味に孫と笈持ち安来節

熊本県 松田 シキ

### ◆ジュニアの部

偏差値で決まらぬ私を見て欲しい  
妹の寝顔が夢を語ってる

尼崎市 新井 朋子  
(中三)

アルバムとかがみの顔とくらべてる  
かがみ見てかかみの中に入りたい

尼崎市 新井 晶子  
(小五)

# 愛染帖

## 橋高薫風選

大阪市 小出 智子  
旅のつづきで夜のハガキを書くことも  
灯を消して故里の山濃くうすく

青森市 工藤 甲吉  
馬は人夢政治家は金  
青立ちを刈って泣きたくなつてくる

和歌山市 西山 幸  
手のつめたさとぬくさを鍵に教えよう  
本棚の麻生路郎と一日居る

羽野市 吉川 寿美  
無蓋車よ二度と戦につながらな  
明日の日覚めも昭和の御代であるように

奈良市 井上 大  
奥襟をとらさぬ間合いとる首相  
導火線だけ燃えているリクルート

唐津市 中村 順子  
船溜り舳そろえて秋祭り  
学問のある奴もいる蟻の群れ

鳥取県 新家 完司  
星を見るみんなよく似た顔になる  
運の良いわたしは檻の外にいる

町田市 竹内 紫緒  
併殺のバーコードめくユニホーム  
コンクリートジャングル千支の絵は増える

寝屋川市 堀江 光子  
点滴に雲は動いていると知る  
掘り出しの句集にコーヒールをいれる

倉吉市 奥谷 弘朗  
生き残るための握手がまだ疼き  
バイカル湖生涯忘れぬ水の味

守口市 結城 君子  
僕が先が先と生きていく  
遊んで暮すための修行を積んでます

守口市 森川 まさお  
気むずかしい人とお通夜の連れになり  
手の込んだ料理を素っ気なく食べる

吹田市 栗谷 春子  
汚れついでの様に病葉散つてくる  
仏さまもしも贖ならどうなさる

寝屋川市 岸野 あやめ  
三枚目裏の裏まで見えました  
四捨五入とどうも私は四らしい

西宮市 奥田 みつ子  
木屋のみの虫までも香りそう  
トラビストに高い空あり針葉樹

海南市 三宅 保  
ロボットの血も赤くなることがある  
順風に乗った男は軽すぎる

和歌山市 木本 朱夏  
なんやかや言われるうちが花やねん  
札束の匂い覚えている靴

名古屋市 藤井 高子

夕映えがクラスメートがみなきれいな  
老斑一つサハラのバツタかと怖れ

米子市 八木 千代  
網越しに百済ぼとけの息すこし  
飴玉の芯は決して甘くない

米子市 政岡 日枝子  
灯が一つついて味方がふえてくる  
天井に羊一匹飼っている

米子市 新 正子  
一枚の葉だが只では落ちませぬ  
拳銃の強さ錯覚してしまふ

大阪府 神夏磯 典子  
あの人にちよつと此の世はせますぎた  
赤ワイン似合う小さな江戸切り子

茨木市 堀 良三  
苛立てば手からこぼれるものばかり  
職安に來た案山子には影が無い

尼崎市 春城 武庫坊  
ずっと前からわたしを離さない羽音  
気が付くと人につられて走つた

和歌山市 後藤 正子  
夫無口ひとり芝居の日が暮れる  
母の顔ふいと浮かんで茄子苦し

富田林市 藤田 泰子  
島根県 榊原 秀子  
香川県 上藤 多織

豊中市 辻川 慶子

額縁の中で静かに秋暮れる

奈良市

米田恭昌

ほつれ毛に女一人の暮らしを見

尼崎市

春城年代

平城京跡もすそひるがえして消える

今治市

月原宵明

ふるさとで老うそのかみの恋仇

吹田市

西岡豊

細胞が正常でない無礼講

平田市

久家代仕男

洗濯機ほどの仕事はよう出来ず

流山市

神田治

我輩は明日の十より今日の六

米子市

金山夕子

巻けるだけ巻いて静かな鳩時計

藤井寺市

高田美代子

時々はりんこの唄を歌ってる

弘前市

波多野五楽庵

昔話が溜まると姉に逢いに行く

東大阪市

大平太一郎

菊作り花の顔には老いはない

和歌山市

桜井千秀

逸らす目はこちらも逸らすことにする

羽咋市

三宅ろ亭

わが歌は譜面通りに出ぬことも

今治市

矢野佳雲

遅刻した子に校庭の広いこと

鳥取県

江原とみお

宴会のかえり狐雨に合っ

鳥取県

西浦小鹿

魂が雪降る夜に蘇る

溢れる涙一歳の胸にある

堺市

近藤豊子

雪ばさり払って竹が立ちなおり

鳥根県

小砂白汀

泣くことを止めれば笑みも忘れてる

鳥根県

松本文子

人妻にすこし防虫剤の匂い

豊中市

滝北博史

古寺の門にも一札して去りぬ

大阪市

榎本路児

蟻が好き今懸命に生きている

大阪市

小村てい子

フランスパンの長さを孫と見つけたり

米子市

山健歩

金バッジ庶民泣かせて来た胸に

黒石市

相馬一花

虎刈りが巧い親父の三周忌

橋本市

岸本木魚

母さんは黙ってトイレ掃除する

田辺市

染道佳明

精神病が居るので自叙伝はちよつと

鳥取県

土橋螢

わたしは中途半端が大嫌い

鳥取県

亀井円女

アブノーマルに生きたかったね一度だけ

和歌山市

福本英子

貞女の真似と悪女の真似で来た半生

和泉市

岡井やすお

自肅など何処吹く風と馬走る

西宮市

松本一郎

五十年今振りかえる夫婦とは

出雲市

久谷まこと

影法師自分の主権かめる

出雲市

真喜内實

深呼吸五体爪まで透き通れ

弘前市

塩田新一郎

盗掘も調査も同じ眠る人

大阪市

入江喜久夫

夫逝きて曳山囃子遠く聴く

唐津市

中塚礎石

日本晴れ心という字が書いてある

相生市

高橋千乃子

恋でなく愛でとどめておく閉え

堺市

朝山千世子

嫁姑肚さぐり合う練りからし

西宮市

光井玲子

シクラメン冬の心を慰める

米子市

松下たつみ

大器晩成の虫か短かい秋を鳴き

鳥取県

小池しげお

威勢よい声にかれい目は目を覚まし

松原市

森茜

お前もか影法師までまといつく

和歌山市

越村枯梢

老残やここにも粗大ゴミ捨場

名古屋市

瀬尾六郎太

二球団儲かりまっかて身売りされ

高槻市

小松良

堪えてるを優雅ですなと他人様

唐津市

久保正敏

セールスが俺の余生を指図する

鳥取県 萩原 美雪

羽曳野市 麻野 幽玄

旅人へきびしさを説き雪囲い 大阪市 島路 太郎

ずんどうのセーター妻が編んでいる 岡山市 川端 柳子

秋帽子まだまだ毒気が抜けてない 和歌山市 青枝 鉄治

起工式また青空が削られる 岡山市 灰原 泰子

静けさがほしく野菊の花ている 岸和田市 古野 ひで

仏像の微笑に心溶けてゆく 岡山市 土居 ひでの

小春日の陽にせかされる老いの皴 和歌山市 山田 高夫

幸運といつもどこかですれ違ふ 唐津市 福島 紀一

賑やかな祭り囃子も寂しいよ 大阪市 山北 三三三

桃色の息はき磨く鏡の娘 富田林市 片岡 智恵子

まず目よりはみ出す文字をいとおしみ 鳥取県 さえき やえ

冬の笑い入れるポケットなおしてる 吹田市 井上 照子

いまさらの嫉妬みつめる万華鏡 和歌山市 玉井 豊太

三姉妹順に産れた苦なのにな 茅ヶ崎市 山上 元孝

核家族気付かず過ぎた七五三 大阪市 板東 倫子

諦めを悟りだと言っ負け惜しみ 和歌山市 古久保 和子

成り行きをじっと見守る隅の席 岸和田市 三輪 通彦

金で済む話の金で採れている 豊中市 田中正坊

古書店で逢う亡き友の蔵書印 鳥取市 岩原 喬水

天皇の血は国民と入れ替り 堺市 井上 たかし

初詣でまず賽銭というお金 堺市 山本 半銭

お祓いの茅の輪をくぐる昼の月 尼崎市 明壁 敏之

目標のないまま群れの中で住む 廿日市市 森川 抜智

飛行機は落ちる船は沈む家で寝る 川西市 野村 静雄

恥ずかしい曰くはさけて語り合い 静岡市 渥美 弧秀

音楽に詩にときめきの古希忙し 高槻市 河瀬 芳子

飛んで来た輪ゴムに深い訳がある 豊中市 三宅 つえ子

筆をとるひとりの夜は静かな炎 川西市 中内 孚彦

紡れない事実自分が左遷される 高槻市 川島 颯云児

孫のオベ不安の窓に昼の月

愛媛県 石手 武

寝正月菓子のにぎさに茶の波さ 今治市 渡辺 伊津志

あわだち草刈れば芒の花が枯れ 鳥取県 乾 喜与志

青い眼の人形と還暦を祝つ 和歌山市 神平 狂虎

線路は星に向かって延びるのだそして 八尾市 片上 英一

ムンクの絵真似してるのか冷凍魚 熊本県 高野 宵草

デパートはおばはんばかりいる時刻 米子市 林 荒介

足枷が走らぬ父にしてしまふ 豊中市中校塚三丁目13-15

投句先 下560 橋高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「光」 選者 橋高薫風

締切 1月10日 (ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラジオセンター」川柳係

発表 1月29日(日)ラジオ第一放送 午前11時5分

— 水煙抄

# 秀句鑑賞

— 前月号から

青戸田鶴

鉛玉をひとつ口止め料として

山根 八重

大きな鉛玉をなめて、ほくそえんでいる大  
人の姿が、浮かんでくるような句だと思いま  
す。

振り返る地図が私の中にある

児玉 歌子

ふりかえるといろんな場面がよぎります。  
だれにでも大切な地図があると思ひ、私にも  
あるのだと思われてきました。

花いちもんめ遠い言葉が風になる

中尾 まゆみ

歳月は言葉も想ひも風化してしまいます。  
長い長い暦を感じます。

明日が見えたらこんな事してられない

大川 幸子

だれでも想うことですが、いたずらに月日

に流され、こうしてはいられない気持が何え  
て、共感をよぶ句だと思ひます。

弱いから苛めに合うと限らない

高杉 千歩

ひ弱そうでしんががあったり、強そうな子が  
案外に脆かったり、子供の世界もなんだか日  
々に変つてゆきますね。

木杓子と遠いくさの話など

藤井 高子

いくさを知らない若い世代には、ぶさいく  
な鍋や木杓子で代用食を盛つた頃などわから  
ないでしょうが、木杓子の温かさがつたわつ  
てきます。

眼を閉じて聞けばこころに響くはず

笠嶋 恵美子

菩提寺の鐘の響きも若者の音楽もじつとし  
て聞くと、心に沁みることばかりです。

その先を聞きたいロバの耳になる

高田 美代子

だれでも、それからそれから聞きたいも  
のです。ロバの耳は、聞き手の心の中のこと  
だと思ひます。

カムフラージュするに程よい月明り

田中 輝子

一日を終えた疲れた顔も、今の見せたくな  
い表情も、ベールに包んでくれるおぼろ月の  
道が目に浮かびます。

切る日だけ決めて少女の長い髪

新 正子

ショートにもしてみたい、でも切るのは惜  
しい。揺れ動く少女の心をよくつかんでいる  
句だと思ひます。「決めてある切る日」がい  
のちです。

木枯しへせて一汁添えようか

松本 聖子

冬の夕暮、帰路を急ぐ夫や子供の姿、温い  
一汁がどんなにやすらぐ家庭の味か。やさし  
い女らしい句だと思ひます。

川柳にとつと笑つた患者部屋

井上 すみれ

しめつばい病室の空気へ、よほど風刺のき  
いた川柳で部屋をわかせたことでしょうね。

アグネス論争子供の声が聞こえない

近藤 豊子

仕事場に子供連れで行くアグネスに林真理  
子が辛辣な批判をなげかけ、賛否両論がまだ  
くすぶつていますが、何より大事な「子供の  
声は聞こえない」が面白い川柳にしました。

窮すればやはり踏絵を踏むだろう

小林 一夫

どんなえらい人でも、窮地に立つとやはり  
してはならぬ事でもついやってしまつような  
弱さをたくみに読んだ句と思ひます。

テレビまた一休さんに変えられる

森川 抜智

ひと目見て親子とわかる目とえくぼ

服部 朗子

どちらも素直な句で好感が持てました。

## 尚香のむ 小出智子選

各駅停車私の降りる街がある

和歌山市 西山 幸

出発やてのひらの鍵じつと見る

足ばかり踏むパートナーと組んでいる 富田林市 藤田 泰子

それから夫の部屋を丸く掃く

いつになれば無欲になれる雪月花 米子市 青戸 田鶴

しあわせな人やつかむ鬼を見た

極限を温め合うては夫婦かな 羽曳野市 吉川 寿美

折り目節目を姑であり妻であり

父に似て母に似て来て老いてゆく 米子市 新 正子

合格のハチマキを巻く秋深し

公園の毛虫も用があるらしい 大阪市 堀 いくの

やりくりが上手になったのも淋し 河内長野市 植村 喜代

生きようとするカマキリはカマを研ぐ 島根県 松本 文字

ワンタツチの傘に銜いは見当らぬ 米子市 林 瑞枝

父母は明治人なり番を待つ 大阪市 田中 弘子

繊細な鏡わたしを遠ざける 和歌山市 後藤 正子

損得で割り切りいつそこよろい 大阪市 西出 楓楽

孫の背丈こちらも応援しています 大阪市 鈴木 節子

髪の変えた理由は外にある 富田林市 片岡智恵子

フルムーン嫁はパンザイしてくれる

松原市 北野 久子

虫の音よやさしい人に電話する

大阪市 本間満津子

ため息をしている芋の煮ころがし

西宮市 林 はつ絵

はりぼての石を侮ってはならぬ

堺市 桜沢あかり

満月が許す心をくれました

米子市 茂理 高代

すれ違っているのに妻に気が付かず

松原市 佐藤 藤子

よそさまの米が熟れてもうれしいな

鳥取県 さえきやえ

何回もかけてわが家は話し中

和歌山市 山口三千子

ポストまで十月の月満ちている

尼崎市 春城 年代

楢山はあとへあとと遠ざける

吹田市 栗谷 春子

二人居て二人が別な物を食べ

米子市 石垣 花子

笑い種蒔いて若さ呼び戻す

大阪市 上江洲勝子

雑踏で笑い話の種拾う

米子市 沢田 千春

こだわりをかくしてすこし派手を着る

八尾市 宮西 弥生

自粛する気持はあれど十二月

大阪市 鍛原 千里

幸せと思うご飯のおいしい日

吹田市 茂見よ志子

輪の中に居てしゃべり続けている

和歌山市 坂部紀久子

夢のような話 風船が破れる

西宮市 西口いわゑ

普段着でつき合う友を友と呼ぶ

高槻市 笠嶋恵美子

男には見せぬ涙を溜めている

岡山市 灰原 泰子

お別れの手紙四角い文字で書く

和歌山市 木本 朱夏

枯葉舞うスカート一寸工夫して

貝塚市 池田寿美子

心の奥のぞく姑の老眼鏡

大阪市 神夏磯典子

満足な絵にしてくれる娘は二十歳

和歌山市 田中 輝子

一本のペンでも平和叫ばれる

米子市 政岡日枝子

無器用で帯一本をもて余す  
 愛の証に長い黒髪きらすおく  
 子育てを担ってくれた裁ち鉄  
 茶柱が立って挨拶念が入り  
 鳩になり鷹にもなつて母老いる  
 折れた矢を束ねて冬を耐えている  
 フライパン機嫌いい日と悪い日と  
 かまどの火母の繰り言聞こえそう  
 お百度を踏む手を洗うねんごろに  
 犬の尾の曲りも嫌う無神論  
 やりくりの知らぬ夫の高軒  
 まつまらぬ思案抱えて始発バス  
 孫の目はかくす涙を見のがさず  
 うす紅を引き山茶花のしたたかさ  
 同窓会昔のわたしに会いにゆく  
 駅の鳩こぼれた愛で生かされる  
 銀行でチラリッと見た札の束  
 明日の絵の中に赤とんぼも飛ばそ  
 浮気など邪魔くさいとはほんとなの  
 心までみすかれまいと厚化粧  
 秋蝶の浮かれ姿をわが影に  
 肩の荷をおろすと足が宙に浮く  
 美しく咲いたら種をまた採られ  
 不意打ちに攻めて来たのは冬の風  
 アルバムの亡夫の笑顔へ愚痴こぼし

米子市	光井	玲子
和歌山市	松原	寿子
堺市	小西	小雪
寝屋川市	稲葉	冬葉
和泉市	中川	楓
高槻市	河瀬	芳子
大阪市	山田	妙子
和歌山市	古久保	和子
和歌山市	福本	英子
羽曳野市	福田	満洲子
和歌山市	前田	美子
和歌山市	桜井	千秀
高槻市	小松	良
岡山市	松本	元江
堺市	鈴木	三千代
竹原市	信本	博子
和歌山市	砂山	千枝子
名古屋	藤井	高子
堺市	神原	文
米子市	小塩	智加恵
香川県	上藤	多織
宝塚市	丸山	よし津
兵庫	倉垣	恵美
藤井寺市	高田	美代子
有田市	生馬	美英子

落葉しきりいつか疎遠になったひと  
 前向きの姿勢へ拍手してやろ  
 病み上り突いたら夫崩れそう  
 がらくたの山を笑うなみな記念  
 洗濯機の渦を見つめる悩み事  
 健康は何より宝餅うまし  
 再会の友の遍歴聞く夜長  
 七十五日じつとしていたかたつむり  
 みくびらないで単細胞も血が通う  
 いい笑顔いい涙だよインタビュ  
 大声で叱った母も泣いている  
 ホッチキスでとめた封書の無神経

茨木市 堀 良江  
 大阪市 津守 柳伸  
 有田市 松井かなめ  
 堺市 高橋千万子  
 奈良県 横井都姫子  
 青森県 富士 トキ  
 吹田市 井山 照子  
 堺市 宮本かりん  
 和歌山市 田中 みね  
 和歌山市 内茂登志代  
 埼玉県 根岸 方子  
 東京都 吉川 一美

年が改まり、三年目をバトンタッチ致しました。大切な皆様の一  
 句一句、疎かにできないと心を新たにしています。「この選者はど  
 んな句を抜くだろうか」ではなく、「自分はこんな句が作りたい」  
 そんなものが大切ではないかと思えます。続けての投句をお待ちし  
 ています。

ゴシックの一句目、新しい出発をされた作者。「私の降りる街が  
 ある」とこれからの決意の程がよく表現されて、心意気を感じさせ  
 られました。二句目、あのグロテスクな毛虫にも、生きものとして  
 の愛情を感じられ、感性の素晴らしさを思いました。三句目、主婦  
 としての暮しの中で、ようやく安定した生活を振り返っての感慨で  
 あろうかと思われます。女性でなくては出来ない句です。

ハガキに雑詠3句。毎月10日締切。

投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出智子

受賞作品

工藤 甲吉

三界の万霊雪となつて舞い

荒武者に似る鱗の顔北の貌

山一つりんごの花に包まれる

原爆の日はみちのくの果ても照り

二人寝てチンチロリンを聞いている

評 今回の愛染帖賞の選考には、三人の候補者が最後に残った。工藤甲吉、江原とみお両氏は、ともに風土性と諷刺と軽みを存分に生かした作品で優劣つけ難く、八木千代さんの個性もまた遜色がなかった。

西山幸、高橋千万子、神夏磯典子、奥田みつ子、波多野五楽庵、立道善太郎、堀江正朗の諸氏が続き、佳吟一句ながらすばらしい句を寄せられた作者の多いのが目立った。

(橋高 薫風)

江原 とみお

袈裟をつけると本ものに見えてくる

乱という馬が一头住みついた

竜門の滝を見あげて五十年

春がくる馬百頭をいななかせ

虹の橋に通せんぼうがしてあつた

八木 千代

神様も冬と歩いていられよう

朝までを壺の椿はどう過ごす

面を打つ部屋へは誰も入れられぬ

罪の絵もうすい墨なら画けそくな

西域百済仏の眉に宿る月

受賞作品

後藤 正子

木守柿 刻を飾ろうかと思ふ

ほうれん草の僅かな紅が衝いてくる

心ばそい日暮れを愛撫してしまふ

両肩を絹の重みにみたされて

山の名をひとつ刻んでから越える

評 全く新しい眼で、巻頭句にこだわらず、澄んだ最終選をさせて頂けますようにと祈りながら、二度、三度と全作品とあらためて対峙したので、稲葉冬葉、春城年代、佐藤藤子、政岡日枝子、松原寿子、田中弘子さんたちの五句抄は最後まで掌からはなれず、次いで、西山幸、寺中三枝子、竹内寿美子、藤井高子、田中輝子、高田美代子と続く苗香の花さんの艶と気魄に打たれています。そして、今にも開く花々がいつばい。ありがたい選をさせて頂いたと至福感もまたいつばい。

次の年もまた、香り高い花を咲かせてくださいますように。

(八木 千代)

林 はつ絵

ガス漏れ器つけて死ぬ気のさらに無し

公園でちよつと調律して貰う

曼陀羅のロビーへひとり異邦人

犬よりも貧しい嘘でなかうか

切腹の座が頂点に置いてある

広本文子

懸命にわたしを遠くとおく置く

フィクションの中のことだと信じよう

その背まで下りても母を越えられず

そくそくと両肩を打つ風のあり

しわよせはやさしいものに降りつもる

# 句評リレー

十一月号から

新家 完司

月原 宵明

牛尾 緑良

辻 白溪子

其処に亡母が居る顔の無い紙人形

松川 杜的

**完司** 「顔の無い紙人形」という表現にベテランのただならぬ手腕を感じますが、なぜか胸に迫って来るものがありません。

句評から外れますが、句会で「亡父」「亡母」と書いて「ちち」「はは」と読ませる習慣には抵抗を感じます。

**宵明** 亡母を想い、敬慕し、愛着することを現わすに、「顔の無い紙人形」としたところが私には理解できず、猟奇的なものすら感じ冷たいものを覚える。理論的な川柳は冷た无情の川柳は温さがあると思っている。適切な評で、お教え願いたいものである。

**緑良** 紙人形は母の手づくりだったのではないのでしょうか。何度も手に取って顔が取れ

てしまったが、あえて手を加えず、その温もりを大切にされているように思います。不気味な感じは拭えませんが。

**白溪子** 亡母が住んでいた部屋が「紙人形」で昔を追憶している情景はよく表現されていますが、あえて「顔の無い」と言うのはどうだろうか？

**完司** 「顔の無い紙人形」とは、まだ顔が描かれていない紙人形と解すべきでしょう。そこに線の細い、自己主張の無かった亡母の姿を重ねて見つけている。日本的な情緒を感じさせる佳句だと思いますが、母が健在で親不孝者の私には今ひとつ胸に迫らない。

**宵明** 「顔の無い紙人形」が論議をよんでいるが、この紙人形が「この句」のすべてであると気付く。また、「其処に」が説明的ならずや。いずれにせよ、古い型の私は句の姿やリズムについて基本線を守って行きたい。

**緑良** 亡母を引合に出せば、何とか句にな

るとの思いがあった一時期がありました、結論が生まれません。

**白溪子** 水客先生の句に「母の居ぬ障子をあけて又閉める」という句があったのを思い出した。この句からも同じ情景が感じとれるが、やはり「顔の無い紙人形」は、意図は分かるが少し作り過ぎではないでしょうか。着想によっては技巧がオーバーでない方が佳句になるのでは。

盃は月のまるさか誕生日(満76歳)

堀江 正朗

**完司** 月を言葉だけで説明するのは至難のわざですが、正朗さんはご自身の感覚と言葉で月を「自分のものにされた。ただ、「盃は月のまるさか」という素晴らしい表現に対して、「誕生日」というまとめ方は、少し安易ではなかったでしょうか。

**宵明** 失礼ではあるが、お目の不自由な正朗さんが、お誕生日祝の一献の後、盃を撫でつづ月の丸さに思いを馳せられたのでしょ。ご不自由な環境にありながら恨まず、訴えずじつと耐えている正朗さんの句には品格がたよっている。丸さそのものの佳句。

**緑良** 昔、点訳をして、指の感覚の鋭さに驚いたものです。宵明説に同感です。

**白溪子** 盃を手にして月を描いておられる

気持に感動しましたが、やはり下五の「誕生日」は句が動くようです。

**完司** 誕生日の偶感であるから素直に「誕生日」とまとめられたのでしようが、やはり少しもつたいない気がします。

**宵明** 下五の誕生日は、これでよいと思う。正朗さんの一年と私たちの一年とは、同情的なものでもなく大変なものでもあり、誕生日の感概にはひとしおのものがあると想像する。やっぱり「誕生日」がよい。

**緑良** 正月、誕生日には生きている節目を感じます。素直に感動が伝わります。

**白溪子** やはり下五の誕生日が論議になつたよつですね。この作者の場合は実感の句と思われまますので、あえて論議をはさむ必要はありませんが、作者をご存知ない方には、いろいろ意見が出るかも知れません。

### 裏切つたのが散髪をして現れる

檜 谷 寿 馬

**完司** 文句なし。こういう句は理屈抜きに惚れてしまうので、適切な評ができません。パスさせてください。

**宵明** とかく風刺・ユーモアの少なくなつた中で、注目をしているうちの一人です。裏切つたのが散髪した—その後の現われるが喝采である。一面、この裏切者が散髪したとこ

ろに、慚愧の心がちよつとあるのかも知れない。佳句。

**緑良** 潔い者同士の顔合せ、許し合いそつなふんい気があります。男ならではでしよう。

**白溪子** 本人は決して裏切つたと思つていないのだから。「散髪をして」の着想がなかなかおもしろい。

**完司** このよつな句は、深読みしないほうがよいと思います。何事もなかつたように、サツパリとした涼しい顔で裏切つたのが現われる。ただそれだけでおもしろい。寿馬さん独特のユーモアが湧えています。

**宵明** 完司説賛。句評無用のもので、パツと聞いてパツと響く軽妙さ、寿馬さんの独壇場であり、ずつと期待しています。

**緑良** 自分にてきない句。脱帽のみ。

**白溪子** 昔、「川柳雑誌」時代に須崎豆秋さんがおられ、句会での作品に魅せられたのを思い出しました。やはりユーモアの利いた句は楽しい。こんな句がある限り、川柳は大衆の中に生き続けることは間違いない。

### バス通り裏にてあさきゆめみしや

中 原 諷 人

**完司** 文句なしの後なので点が辛くなる。「バス通り裏」も「あさきゆめみし」も古い既製語なので、全体の印象が弱い。解つたよ

うでイマイチつかみどころがない。言葉に頼りすぎてはいないだろうか。

**宵明** 「バス通り裏」とは、一昔前の言葉であるが、裏町の人生を自嘲したつたであろうか。「あさきゆめみし」に「えひもせず」を投げかけているのかな、とも思うが、自信なく、浅学を悲しむ次第です。

**緑良** 裏通りの赤提灯でしようか。それにしても「バス通り裏」には不満が残ります。

**白溪子** 句の意味がよく解らない。「あさきゆめみしや」は、物事が順調に運ばなかつたのことか？ そうすると「バス通り裏にて」へどのように繋がるのか、教えてほしい。

**完司** 作者は私の友人なので「裏町でうかうかと歳をとつてしまった」という軽い自省の句であることは解るのですが、一般的に見て「あさきゆめみしや」が、この句を曖昧で解りにくくしていることは否めない。

**宵明** 「バス通り裏」に一瞬、ハツと思わせたが、古い歌詞の裏町であつて、大きな意味はないよつである。「あさきゆめみし」は「浅い夢を見つづけた」と解すべきか、何かしら時代めいて新鮮さがない。ペテラン諷人さんのお話を聞きたいものである。

**緑良** 自己の詠嘆句。いまひとつ、作者の心に飛び込めませんでした。

**白溪子** 最近、作風が大きく変化して時々むつかしい句にお目にかかるが、この句もその一つ。各氏の句評もさきまでであるが、ど

うも表現に物足りなさを感ずます。既製語の使い方が影響しているのではないかと思ふ。

### 手の中の螢を好きな掌に移す

久保正敏

**完司** 美しく仕上げられた夢二の絵のよふな作品で、構成も緻密です。情景も目に浮かんでくるのですが、もうひとつ感興が湧いてこないのはどういふわけでしょうか。

**宵明** 繊細で情緒的なふんい気に美しさを感ず、「好きな掌」は想像を豊かにするが、全般に説明的で内容に乏しいように思われる。しかし、きれいな句である。

**緑良** 手と掌の使いわけは不明ですが、情景は解ります。その他には……

**白漢子** 捉えた螢を恋人へ渡したのか、ほほえましいアベックの姿が連想され、綺麗な句であるが、深みがイマイチなのが物足りな

**完司** この句を「つくりごと」と感じてしまふ私の心は、かなり荒んでいるのでないかと本気で心配しているところです。作者が女性であれば、感動したかも知れませんが、ということ、美しい女性的な句を男性が詠うと、それが事実であっても嘘くさくなつてしまふことがあるのでは……

**宵明** 手(男)と掌(女)と表現の細かさ

などには敬服するが、丹念さが作りすぎに感じたのでは……。でも情緒は頂く。

**緑良** その時から句ができたときまでに、長い時間があるのではないかと思ひます。作者自信の感動も薄らいでいるのでは……

**白漢子** 単純な着想を綺麗に表現してあるので、楽しい情景が想像され、上品な句になっていますが、説明口調に技巧を加えただけの内容なのが淋しい。表現が綺麗で、女性に好かれる句。

### 逢いたくて夕焼雲にインプット

柴田 英壬子

**完司** 「夕焼雲にインプット」とはおもしろい表現です。外来語には抵抗を感じますが、若い世代に受け入れられる川柳とは、こういうものかも知れませんが……

**宵明** 「インプット」を持って来たのが新しい手法と言われたところで、共感を誘うものが少ない。この句材には余情といったものがほしいと思ふ。

**緑良** 使いたい言葉が頭にこびりつくところでも試したくなる私ですが、これはいい。「夕焼雲」は明日への期待でよし、「お願い」ほどの明るさも感じられます。

**白漢子** インプットの相手を「夕焼雲」にしたのは、なかなかメルヘンの感じが出てい

ておもしろいが、着想は平凡だと思ひます。

**完司** 川柳はできるだけ「やまとことば」で作りたいとは思っているのですが、これはど外来語があふれてくると、使いこなされて消化してしまつた外来語を使うのは、やむを得ないことでしよう。しかし、カタカナの入った句や、むつかしい漢語の混じった句は名句になりにくいものです。

**宵明** この句から夢と若さを買いました。今のように外来語が溢れると、避けることが時代に遅れるようです。しかし、あくまでも消化された「カタカナ」であつてほしいですね。

**緑良** 取り込んでしまえば、外来語も国語の一部です。片仮名が現代らしさを表現していますが、使いこなす努力もしましょうよ。

**白漢子** 川柳は省略の文学であるから、どこかを切り詰めなければならぬが、句を引締める下五に外来語を使ったのがよく利いています。外来語は、使いよつて役に立つことをこの句から教えられた。

### 欲深い血を抜いてくる献血車

河瀬芳子

**完司** 「名詞止め」がどうのこうのという理屈に興味はないが、この句の場合、「血を抜いてくる献血車」という言い回しは、なんと

# 郵便夫ルーラン

東野 大八

いま住んでいる街の郵便局から、私は郵政モニターに選ばれている。ある日の会合で私はゴッホの親友郵便夫ルーランの話をした。パリを嫌って南仏アルルに住んだ35歳の画家ゴッホは、ここで片耳を落して娼婦に届けるといふ奇矯な振舞を演じている。狂気に近い、うつ病のこの気難しい画家は、金の飾りのついた青い制服に大きな髻を垂らした老郵便夫ルーランを「まるでソクラテスのような男だ」と馴れ親しんで、彼やその家族の画像まで描いてやっている。

フランスに限らず、風雪にめげず、走り回って郵便を届ける郵便配達の人々は、庶民の誰からも親しまれている。殊にいい人柄を垣間みせる郵便配達の人には、ゴッホたらずとも大方の人達は敬愛の念を増すであろうとも述べたわけである。

川柳から俳句に移った私の畏敬する俳人磯貝碧蹄館は、その郵便配達夫で、郵便夫ルーランを思慕し、こんな名作も作っている。

髭のルーラン雪の空ゆく吾は地をゆく  
薫風さんが『川柳木馬』38号に「川柳塔の旗手小島蘭幸」と題し、五頁にわたって蘭幸論を書いている。私はこの稿によつて蘭幸さんが郵便局員であることをはじめて知つて、思わずニコリした。親めの役職は異なつてあろうが、ついゴッホの親友ルーランを思い浮かべたことは成り行きであつた。

小島蘭幸の名は本誌でおなじみで、かねてから注目してその作品を必ず眼にしてきた。薫風さんが彼の句や人柄について、詳しくあたたかい眼で描写し尽くしているの、改めてここに論ずるまでもない。ただ、私の親た蘭幸作品への注文は、現在の幸せすぎる小市民的な作句上の素材や技巧から、もう一段高くて奥深い心証の何かをしつかつかみきつて欲しいということに尽きる。

水平線を見ている迷い消えている 蘭 幸  
薫風さんは、一本の水平線に川柳の地獄と浄土が揺曳する——といっているが、私は川柳には一本の線だけではないのだという感懐に止まって欲しくはない。むしろそこから人の世の地獄こそ見極めて欲しいと、この人のためにも切に希望し、期待する次第である。  
薫風さんから別に林野甦光の『川柳句集里の灯』を送つて頂いたが、この人は路郎先生の直門、路郎調横溢がとても嬉しかった。

なく不自然に感じますがいかか？。

**宵明** 欲深い血を抜いてくる献血車の実態が、どうしてもつかめません。ご免。

**緑良** 献血すると、牛乳やジュースなどがもらえる。それがほしくて献血でもあるまいが、「欲」と見抜かれたのかと考えます。

**白溪子** 欲深い人が献血と、ふと疑問に思いましたが、着想はともおもしろい。上五「欲深い血を」は血も抜いてきたでは如何。

**完司** この句は「欲深い自分の血を献血で少し抜いてもらつてくる」という軽い自省を込めた句と思うのですが、みなさんは献血車を主語と解釈されて「献血車が欲深い血を抜いてくる」と読まれておられるようです。このようにどちらが主語か解りにくい作品は解釈の仕方によつて、まるで違った意味になつてしましますので、表現方法にもう少し工夫がほしいものです。

**宵明** 完司説正解だと思います。川柳の価値は第三者が決めるものだから、表現の完全性が大切だと痛感しました。

**緑良** 皆様のお蔭で句が見えて来ましたが、私は献血をする人は善良な人ばかりと思ひ込んでいたので、献血車が欲深い不純な血を間違つて抜いたと解釈したのです。「血を抜いてくる」の表現が、どちらにも解釈されますので工夫を要します。しかし、どちらにとつても、感覚の鋭い佳句です。

# 言いまわしの個性(七)

—— 自分史に連れ添う語彙 ——

## 竹 内 紫 鏞

### 2 その他のパターン

いろいろな叙法を知っておれば、好い着想を巧く仕上げられる。そこで西尾某主幹の作品から、言いまわしを学んだ例を二、三書いてみる。まず、同語の繰返し、または対照語を並べたという句が目につく。

人恋し人煩わし波の音 西尾 某

温泉や座り羅漢に寝る羅漢 同

実は、俳句にもそういうスタイルが多数あるらしく、最近では「俳句の文様性」(執木龍)——「狩」62年9月所載——という論文から知ったところである。文様(図形のくりかえし)を幾何学的に分類すると、帯状文様は七通りあると言われ、身近なものでは中華料理のどんぶりの縁がその一例である。

文様の各パターンと、川柳の構成様式を対比するのもおもしろい。例句は後日、多数挙

げたいが、『愛染』の中には

断崖絶壁断崖絶壁冬の恋 橘高薫風

という、四字漢語の反復もある。

この話の発端になった、帯状文様に当る俳句は原著に何十と挙げてあるが、引用すると

木の葉ふりやますいそぐないそぐなよ

——は楸那の句で、「並進文様」の好例。木の

葉が次々と落ちるイメージのほか、言葉の繰返しがあ

る。赤い椿白い椿と落ちにけり

彼一語我一語秋深みかも 碧梧桐

は「すべり鏡映文様」に相当する。

さて、西尾某の作品七〇二句(昭58、構造

社発行)を眺めながら、特徴語を数えたところ、四字熟語が平均以上に使われているのが分った。ただし、東洋の故事に基づく成語は

少なく、日常会話に出る現代語が主である。その中に結合度のゆるい四字名詞がある。

団体に一人おくれた土鈴趣味 某  
とか、「少女趣味」のような組立て方は応用が  
広そつた。

漢語を多用すると、残りは助詞だけになっ  
てしまふことがあるが、それでも豊富な情報  
を伴った名詞が働いてくれる。

菊花展雲電型は市長賞 某

は、情景を浮かばせる。全部名詞の句もある。

次に数字を入れた句がある。「二人」とか  
「二階」、年齢では25や60が現れる。七度五分、  
四十五\*、十二月某日、といった、雰囲気  
を代弁する言葉があり、体温とか体重と書か  
ず、読者が納得する数(5きざみくらい)に  
した点がよくと思った。

さらに注目したのは外来語の使用率である。

ポリウレムの携帯ラジオホームラン 某  
梅の宮カセット鶯鳴きすぎる 某

その他「胃カメラ」「エーターン」「ドアチ  
ェーン」など、近ごろの言葉がかなりある。

これら融通性のある句語の手法を見て、安心  
した。

筆者の経験では、地方の選者の形式主義に  
出会い、中八音は不可、下五は「ン」止りの  
六音も不可、と言われたり、外来語も往々拒  
否された。俳句にその傾向は濃いが、鷹羽狩  
行の入門書に

という句があり、やはり、安心した。

### 3 歌でなじんだ和語

これまで和語・漢語のどちらかを無意識のうちにも多用する作風があるので話題にしたが、その傾向には過去の職務が関係しそつである。あるいは趣味(愛唱歌・詩吟・書)に誘導されることもあろう。

読者にもカラオケのファンとか、育児以来、童謡や叙情歌を口ずさみ、気に入った歌詞を抱いている人もありそつだ。そういう人たちを三つのタイプに分けてみた。

第一は、歌詞に無関心な音楽好き。音程やリズム、協和音に鋭敏で、どちらかという器楽曲を楽しむ人である。実は筆者もその部類で、歌詞を真剣に味わわなかった時代があり、合唱仲間には詩人もいなかった。

二番目は、寮歌や軍歌を好むタイプである。「嗚呼玉杯」をはじめ、難しい漢語の詩を作ったり、叫んだりしたがる年代があった。続いて軍隊では、靴音に合わせて高唱する歌が頭に染みついた。「敵は幾万」とか、唱歌にあった「水師營の会見」などは、習ってから長い年月がたつが、忘却してはいない。

野球場にこだまする応援歌の類も、健児・勝利・母校・覇者……と、漢語の続出である。

第三のタイプは、和語ばかりを愛唱した人々である。外国の曲に日本語の歌詞をつけた唱歌(庭の千草・植生の宿など)が明治20年頃に現れてから、大正10年までの歌に我々は感化されている。大正の前期は、日本人の作曲で、詞にびつたり合う名曲が生れた。「冬景色」「朧月夜」はすべて和語。そして「早春賦」とか、「浜辺の歌」のような8分の6拍子の曲は、和語の醸し出す叙情をよく伝えていると思つ。

和語・漢語のミックスも当然ある。「仰げば尊し」をはじめ、明治十年代から道徳教育にも戦意高揚にも、漢語の師・恩・敵・軍・隊などの字音は使わぬわけにゆかなかつたが、そう悪い響きではない。「戦友」のような哀調の歌にも短い漢語がまじり、半世紀も人氣があった。おもしろいのは「軍艦行進曲」や「婦人従軍歌」などで、題は漢語そのものだが、歌詞はほとんど和語でまとめてある。

新体詩は明治前期から唱えられ、藤村や透谷が発展させた新しい七五調主体の詩形である。その流れはよく知らぬが、大正・昭和に続く間、ロマンのある漢語——真珠、馬車、時計台など——を生き生きと大衆に滲透させ

ていたのが白秋や八十であらう。

短歌も、女性向きの詩も、和語主体で続いたが、俳句はどうであらうか。例えば、俳人・細見綾子の「和語」(『句集名』)があるくらいで、美しい日本語を取り入れるという趣旨が、氏の著書にも述べられている。

第一稿で語種の分析にとりかかっていたから、品詞を辞書で確かめては集計してきたが、今では、覚えていた歌を口ずさむ瞬間々に、「これは漢語」「今のは和語」と識別ができるようになった。すると、

「はこねのやまは テンカのケン……」から  
「ゆきのふるまを……」「ちいさいあき、  
みつけた……」

という終戦後の歌謡まで、自分なりに語種の色合いが分かってきた。戦前までの軍隊経験や寮歌高唱は、日本人男性の通過期の一つであったのだろう。それらは、行進曲に向けた漢語、たとえば、カン、セン、テン(撥音)とか、シヤ、シヨ(拗音)の類が多く混じり、勇壮活発なムードを盛り上げる言葉であったような気がする(注参照)。それで、我々大正生れが洗脳されてきたのかも知れない。

歌を通して思想を吹きこむ、という手順はあるようだし、宗教・労働関係の歌詞に、目立つように漢語が配されているものがある。

読者の日常語も句語も、身に付けた好みの衣服のようなもの。歌の文句もそれに一役買っていないだろうか。

〔注〕漢字音と和語の音との差について、引用したのは、『日本語の世界4日本の漢字』(中田祝夫著、昭57、中央公論社)である。次の説明がある——  
今日、我々の感覚でも、漢語から確かにある種の

### ■句集紹介

## 林野 甦光句集『里の灯』

横 田 英 詩

柳歴四十余年、川柳塔社同人で理事に名を連ね、呉の串かつ川柳の二代目会長である甦光さんが、第二十二回串かつ川柳大会を機に『甦光川柳』の集大成として句集『里の灯』を川柳塔社副主幹橋高薫風氏の序文を頂いて刊行された。

昭和十八年頃、大阪から帰郷された佐竹彩峰さんに勧められ、十余名の同好の士を集めて句会を持ったのが甦光さんの川柳の始めて彩峰さんとのご縁で『川柳雑誌』に籍を置かれることになったという。

「感じを受ける。例えば『きのうとか』あしたを、『サクジツ』とか、『ミヨウニチ』と言い換えてみただけでよく分かる。後者には前者にない改まった硬さがある。この『感じ』を『昨日』と『明日』の例で分析すると、『漢語』の生じる由来は  
(1)全体が2+2+2+2という拍というリズム上の単位——の構成をとる

今回の句集の題名は、「里の灯の人のなつかしく風に揺れ」から採られ、飄々として気負いのない『甦光川柳』は多くの人たちに感銘を与えている。句集の中で旅の句が百二十句にも及ぶように、甦光さんは旅が好きで各地の大会参加の後、ぶらりと旅に出られた。

薫風氏が序文の中で「甦光さんの句柄は温かく、しっとりしていてユーモアとともに辛辣さも持ち合わせ、鋭い感覚を駆使し視野の広さと、対象と一体になろうとする川柳本来の大切な句作りの姿勢に、麻生路郎先生の精神がうかがえます」と語っておられるが、抜粋された句から、初期の作品を除く一部を列記してみた。

人力車降りてみごとな飛驒格子  
座禪組む臉上に春の湧く気配  
女性史を語るに女眉をひき  
逢うたびにあじさいの色増す如し  
赤い灯へひよろろ泥舟漕いでいる

(2)偶数拍に「ア」「ツ」「チ」といった拍が現れる  
(3)「ミヨウ」のような拗音が現れる  
ことにあるらしい——(以下略)  
中田氏の挙げた『サクジツ』の類は、恋い歌を主にした百人一首はもちろん、現代の愛の句には全くそぐわない。つまり漢語は文芸作品の範囲を限定する。  
(続く)

朱の幌で宿の心を見て貰い  
風を着て秋を素敵な旅にする  
晩年を食いしぼる歯を入れておこ  
マンホルの底から童話聞えぬか  
筆足して冬の絵すこし暖かく  
口笛を吸いとりるように空の青  
何も聞かぬことにしている歳の音  
被爆児の目が原作を否定する  
母の袖しかり持つている安堵  
さくら咲くまでは間のある夜なきそは  
金柑を一枝つけた窓明かり  
引き金に手を掛けている的がない  
一行詩の軽味に恥じる古日記  
湯あがりには喜寿の胸毛の光りおり

句集ご希望の方は左記へ連絡してください。残部が少ないので品切れの節はご容赦ください。

〒七三七 呉市天応東久保一丁目一〇—八

横 田 英 詩

# 川柳わかやま

—— 1989 新春 ——

橋本市・紀水川柳会・岩倉天彦  
由良町・川柳ゆら・寺田裕美  
岩出町・川柳岩出・岩崎瑞穂

今年は 明治122年

21世紀へあとわずか

多彩に充実させたいものです

手をつないで 紀州路へどうぞ

# 川柳 たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山内 静水方

本年もよろしく

お願い申し上げます

会 副 会  
計 会 長

山石田藤古古岩岡古三森時岩小山

内原村解田田本本谷宅井広本島内

ほ  
か  
一  
同  
房淑新静比太文清節不菁一笑蘭静  
子子造風子虚晴水夫朽居路子幸水

# 初歩教室

題一雪

阿 萬 萬 的

今月の課題「雪」ですが、気になるのは私たちの政治の方で、雪の清らかな白さに灰色のおえら方を覆っては頂けないでしょうか。

政界は銀世界とは裏はらに

このあたり雪で隠せばきれいだろ 喜一郎

(雪の白さで浄めてほしいおえら方)

雪みたいな白い心を見てくれず 昭 治

ここで本来の雪に戻しましょう。雪と来れば旅。本当の雪国の人にはちと失礼かも。。

四季不順紅葉待たずに雪が降り 明 吉

日本は広いな紅葉と雪だより 喜一郎

雪国の土産はやはり雪のこと 松次郎

(雪国の土産に雪と蟹の味)

白一重の山なみ瓢湖に興じた日 しづ子

(白一色の山なみ瓢湖の晴れた空)

白くなりて雷鳥は山降りず 隆 雄

(雷鳥も冬毛となって雪を待つ)

雪国の詩情求めて旅に出る 道 胤

雪を見て地酒楽しむ旅の宿 照 子

(辛口の地酒飛驒路の雪の宿)

雪見酒一度は呑んでみたい酒 円 女

(雪見酒私も少しいただこう)

雪峰を遠く琵琶湖に映りけり 八重子

(雪の峰湖北の朝は陽に映える)

カマクラも雪見ツアーの中に入れ 保 夫

(連絡船海峡彼方雪に消え)

雪吊りの景色をふたりでもう一度 宏 安

(雪吊りの景色をふたりでもう一度)

雪のない雪吊りを見る金沢路 静 子

(雪のない雪吊り見てた兼六園)

そして雪はまた童心をも呼び戻して、 芳 水

音もなく雪がまくららの笑い声 隆 雄

ポツと灯がのぞきカマクラ笑い声

(カマクラの灯りへ子らの笑い声)

雪コンコ子供は傘を差しもせず 信 一

(雪コンコ子供は傘を差しもせず)

雪の朝傘もささずに子ら元氣) ミツエ

雪兎孫が炬燵の上に置いて行く

(雪兎孫が炬燵へ見せて来る)

雪だるま幼な友とも音たえて 美 子

(雪だるま故郷の友をふと思つ)

雪コンコン祖母から語り継ぐ民話 春 枝

漫画見て雪やこんこん孫歌い 太 一

雪やこんこん孫にも覚えて欲しい歌 円 女

(絵本広げて雪やこんこん歌う孫)

そくて雪の歌となると 道 胤

雪が降る耳にアタモの音が来る 良 三

初雪に雪降る歌を口ずさむ (初雪にアタモの歌を口ずさむ)

雪はまた、女心を傷つけるものらしく

○B面は根雪女が和解除せぬ 多 織

雪の宿らしい恋か一人旅 良 三

(あきらめる恋を抱いても雪の宿)

○ヴェルレーヌよりも淋しい夜の雪 正 子

ひらひらの雪舞い降りて恋終る

(小雪ひらひら舞台は悲しい恋終る)

初雪に今年も悔ゆることがある 精 子

語れない過去を隠して積る雪

雪のごとく白く静かに終り度し

雪よ降れわが心罪消えるまで

(雪よ降れ降れ心の罪の消えるまで)

雪明りひとり雨が淋しこのように 小 鹿

だが雪国の雪はそんなに優しいものでなく

豊年のきざし待たれるでかい雪 圭 坊

時ならぬ雷雪をつれて来る

雷が鳴って初雪つれてくる 美 恵子

(雪起しの雷シングルベルも鳴る)

夜の雪静かに雪の花咲かす 三 津 江

いつか雪降る気配して部屋に居り

(今夜は雪になる気配へ裾冷える)

早や雪で干太根が凍りつく 富 恵

雪の降る子感持病が痛み出し 八 重 子

○雪空に中国針へと家を出る 喜 代 子

雪空に故郷の母の手を思ふ

(遠山に雪に手袋編み急ぐ)

遠山に雪見え手袋欲しくなる 美 恵子

山に雪足早やになる靴の音 章 久

(遠山の雪せかされる冬支度) 三 倉

喜代子 ト キ

飯場では故郷気になる雪おろし  
○夫と子の声が似ている雪おろし

勝美 春枝

○雪掻きを頼むと母の京菜漬

治

○雪払い母内職の荷をおろす

ダン吉

○雪国のさだめを顔に彫りつける

ちず子

出稼ぎの顔見えたらし雪ま近  
でも子どもたちには楽しみも沢山あって

津々と積りて明けは雪景色

方子

雪の日の朝をまぶしく戸を開ける

しんじ

一夜にして校庭は見事に雪積り

ミツエ

(一夜にして校庭見事な雪の白)

主坊

雪晴れの今日一日は恙なし

遊峰

雪の朝声にぎやかに通学路

時弘

初雪を乱す不粋な犬のあと

すみれ

下駄の齒に雪詰めで笑いこけ

下五何とかしたいですね。子ら元氣位では

雪だるまアイシドウなど入れてあり

義

(ニュータイプアイシドウした雪だるま)

和子

○始業ベルひとり残った雪だるま

みね

でも大人たちにもこんな楽しみが

喜与志

新雪を踏んで賀状の束が来る

信義

温泉へ来て初雪の筆をとる

しんじ

風流心無くても雪に酒を酌み

積る雪妻が一本つけてくれ

○雪が降るとケンチン汁が欲しくなる

風花を眺めて炬燵でみかんむく

三千子

雪国に駒子が消えてビルラッシュ  
雪国の楽しさテレビで味わい

多織 喜園

(雪国の雪を楽しませるテレビ)

雪の独り住い、まして雪国ではねえ。

雪降って単身赴任の酒が増え

信義

転任で雪国のつらさ思い知り

登代

(雪国のつらさづく知る左遷)

菊枝

独り身に雪は殊更冷たくて

三倉

(単身赴任殊更寒い雪の朝)

都落ち雪と地酒と友がいる

遊光

(Uターン雪と地酒と友がいる)

遊峰

庭一面の雪に赤い実や花は一幅の絵です

信一

粉雪にひっそりと咲く寒牡丹

つえ子

落ち椿雪中もゆる紅一点

志華子

(雪の白落ち椿の花血の如く)

志重

南天の赤い実雪に尚赤く

好笑

降る雪に孤独を溜めて冬のバラ

サワ子

雪かぶる伊吹の蓬も春を待つ

繁男

初雪の便り軒場の柿すだれ

一郎

そして雪降る里は民話のふる里でもあり、

笠地蔵さん赤い前だれ雪帽子

雪見酒里に民話の灯が消える

鬼瓦初雪かぶって丸くなる

雪こんこ足跡もなし過疎化が進んで、

そんなふる里にも過疎化が進んで、

花吹雪舞った小径も冬景色

章久 由梨

それにつけても親たちは子を案じて  
淡い雪孫の足跡消さないで

豪雪のTVに嫁した娘を案じ

雪の中帰る子を持つ牡丹鍋

雪白く白く積って病むベッド

雪だるま病気の子供へ見てやり

(雪だるまのミニを病気の子へ見せる)

雪明りこわごわ歩く晴着の娘

舞台の雪も二、三歩ありました。

紙の雪別れの場面盛り上げる

雪舞台天井裏から紙吹雪

では最後は、もろもろの雪で

雪景色澄けぬうちにとシッター切り

セスナ機で氷河に降りて雪合戦

○客寄せの雪スーパードにやって来る

○マッキンレー直巳は死なず雪の中

○雪の朝背をまるうして猫とおる

○下北の吹雪に狼は耐えて生き

木簡の氷室の雪にあるロマン

今回は私の好きな句に○印をつけてみまし

たが、いかがでしょうか。参考にして頂けれ

ばと思います。では来月を期待しております。

題「卒業」 1月10日締切(3月号発表)

ハガキに5句以内

「花」 2月10日締切(4月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一九九

阿萬 萬的

誓 い

恒松町紅選

初詣龍頭蛇尾になる誓い  
 茶断ちする妻の誓いの固いこと  
 グルマの目入ると誓い反古にされ  
 無鉄砲な誓いあとで悔いている  
 幸せにすると誓っているリング  
 薬指 愛の誓いが光っている  
 少年の誓い弾ける青い空  
 どたん場でつよい絆で誓い合う  
 裏切った誓いへ小指痛みだし  
 引き出しの隅で眠っている誓い  
 再起への誓いに励む試歩の汗  
 お百度と茶断ちの誓いはたす母  
 角隠し外せば忘れてる誓い  
 少年の宣誓どこにも翳がない  
 誓文を書いて男の顔になる  
 お百度石の下に眠っている誓い  
 指切りの誓いを抱いたままの夢  
 宣誓の声グラウンドを引き締める  
 果たせない誓いを今も抱いたまま  
 愛誓う二人埴輪の眼がみつめ  
 誓詞にはいいことばかり書いてある  
 きつときつと誓った小指が痛みだす

誓いなどすぐに忘れる縄のれん  
 仏飯を供えて誓う薄あかり  
 子のために再起を誓う花手桶  
 指切りの誓いが生きる童唄  
 背なの荷がだんだん重くなる誓い  
 孫と誓う指切り未来がかかっている  
 禁煙の誓い幾度紙に書く  
 あかね雲見てて指切りしたくなる  
 毎年毎年同じ事を誓っている  
 来世も夫婦になろうねと誓い  
 幸せにしますと言ったのはあなた  
 引くことの出来ぬ誓いへ棘を踏む  
 禁煙の誓いが雪に解けてゆく  
 誓いとはこんなはかない夢芝居  
 いろいろの誓いを知っている小指  
 住

誓っても未練の壁が邪魔をする  
 禁煙を誓うと妻が笑い出す  
 富士山に誓う言葉は本物だ  
 誓詞読むときは裏切る顔でない  
 あの時そんなつもりでいた誓い

人に  
 こにこと女が破りにくる誓い  
 地に  
 筆太に書いた誓いが壁にある  
 天  
 今日誓う日記の白が燃えそうだ  
 軸  
 愛誓うリングドラマの幕が開く

健歩  
 雄々  
 京子  
 浪速子  
 明水  
 元江  
 信義  
 宵明  
 勝美  
 佳雲  
 美代子  
 たつみ  
 遊光  
 三五島  
 達子  
 正坊  
 可住  
 鉄治  
 克子  
 正敏  
 高明  
 洛醉

待 つ

櫻谷寿馬選

酒提げて来る客を待つ鍋の湯気  
 待ち侘びて泣いた昨夜の髪洗う  
 侮れぬ女が爪を研いで待つ  
 白鳥を待たず出稼ぎ立って行き  
 失敗を黙って待っている次席  
 待ちぼうけほぼち嫌な子感ずる  
 諦めて居ても待っている胸の底  
 待つ人もいない夜更けの重いドア  
 Uターン待つて大地が欠伸する  
 待つことに馴れた灯りのひとり言  
 寝たきりでも待つ夫がいる灯が温い  
 もうちょっともうちょっと待つ花時計  
 待ち切れず見切り発車で捨てた運  
 待ったかてあかんと笑っている時計  
 清い酒呑んで待っている安楽死  
 待たされる覚悟で座る単行本  
 棚ボタの奇蹟待っている余命表  
 折り鶴に折りを込めて飛ぶ日待つ  
 思い出は何時も待たせた花時計  
 通る人彼と比べて待っている  
 床の間の花にも今日を期待され  
 待ちぼうけどうしを結ぶ花時計

明水  
 清芳  
 章久  
 公一  
 敏之  
 あやめ  
 博子  
 文平  
 京子  
 京子  
 重人  
 一乗  
 虹汀  
 四郎  
 都姫子  
 枯梢  
 寿美  
 慶子  
 よし津  
 典子  
 規不風

運だめしこはじつくり待つてみる 軒太楼  
 待ち合わすアベックに酔う花時計 純子  
 叱られる順番を待つ通信簿 正坊  
 日稼ぎの父を待つてる鍋料理 鉄治  
 母の待つ港はいつも温かい 奈美子  
 妻の待つ落し穴ならとび込もう だし  
 貫禄がついて待たせる事に馴れ 白浜子  
 ないはずの奇跡を百度石にかけ たつみ  
 待つことに馴れた女の薄い幸 倫子  
 おしまいを見よと待つてる蟻の列 佳雲  
 待つ度に疑惑の渦が強くなり 一花  
 待ちばうけ冷たい風に笑われる 元江  
 待たされる男は蟻を踏み潰し 宵明  
 胃カメラが待つ飽食の後始末 白峰  
 人間に戻って御赦免船を待つ 雀踊子

佳

従容と死を待つ心なんて嘘 本蔭樺  
 春を待つ顔はとっても美しい 螢  
 良い風を待つて舞いたい枯一葉 玉恵  
 運命を神に委ねて時を待つ 諷云児  
 残り火を煽ってくれる風を待つ 雄々

人

臓器下さい神の裁きを待つている 緑良

地

指切りが熟れる日を待つ青い恋 テル

天

待たす身に待つより辛いことがある 正敏

軸

家族にも言えないことを待つている

敵

越智一水選

一徹がまたも増やした敵の数 新造  
 敵になり味方になって長い友 大柏  
 背を向ける敵に情けの矢を放つ 三五島  
 地球儀を回すところも敵味方 保夫  
 本当の数より多く敵が見え 明水  
 敵よりも味方だますに苦勞する 雄々  
 初対面はつきり敵と覚えたり 佳雲  
 美しい女を妻は敵視する 倫子  
 ライバルのメロン届いて敗けを知る 宵明  
 自惚れが敵を味方と思ひ込む 有一朗  
 敵となる男握手の手が温い 鮫虎狼  
 世渡りがうまくて敵はつくらない 美代子  
 孫が来るこの敵ばかり勝目なし 良  
 十二月には雪という敵が来る 螢  
 七人の敵へ揃えた朝の靴 公一  
 選挙ともなれば敵です妻の票 軒太楼  
 好敵と思ふ自惚れ叩かれる 雅風  
 ライバルがいて生涯を磨き合い 元江  
 油断大敵ロボットが職奪う 典子  
 敵ひとり増やし男が肩を張る 都姫子  
 どん底で神も仏も敵にする 砥代  
 戻れない橋を渡ると敵に会う 芙美子

バラ色を浮世の敵が塗り変える 章久  
 本当の敵を知ってるふところ手 たつみ  
 落し穴掘ってライバル先に行く 寿恵子  
 だれにでも愛され母に敵がない 悠泉  
 敵のない男味方もつくれない 保  
 敵持たぬ八方美人頼りない 進  
 ライバルに今日も敗れた棒グラフ 諷云児  
 仙人の心となって敵を誉め どんたく  
 敵ながらあっぱれな奴好きになる 鉄治  
 敵味方語り合うのか供養塔 柳五郎  
 とある日の私を敵にする家族 緑良  
 七人の敵に囲まれおでん酒 多織  
 親までも敵にまわした不孝者 兼治郎  
 敵ながらあっぱれ監督ほめそやす 暁明  
 ロボットを敵にまわせばだるい足 京子

佳

敵に塩もらってからのが転びぐせ 奈美子  
 妻が味方敵がなんんおろうとも 素身郎  
 輪になると敵も味方も歩が揃う 慶子  
 皮肉にも敵の娘に恋をする 清芳  
 ロボットが敵の弁当食っている はお

人

開店の客に並んだ敵も居る 早苗

地

七人の敵が揃った通夜の席 秀峰

天

敵だからいちばん高い花贈る 正坊

軸

左遷地へ来てもやっぱり敵がおり



腹くるただそれだけが  
出来るなら

★11月15日から20日まで大  
阪心斎橋のソニータワービ  
ル9階にあるソニーサロン  
で「麻生路郎生誕百年記念  
川柳塔作品・資料展」が  
開かれました。

「麻生路郎コーナー」には  
路郎師の肖像・自画像・条  
幅・額・色紙・短冊・扇子  
句集「旅人」や「雪」「土

団子」後の葉柳「川柳雑  
誌」創刊号・「川柳雑誌」  
菊倍号などが飾られ、「直原

玉青コーナー」には、社団法  
人日本南画院理事長の画伯  
の「川柳塔」表紙絵の原画、  
「種瓜平コーナー」には、  
路郎と親交のあった漫画家  
瓜平氏から特別出品があり、  
「水粉千翁コーナー」も設  
けられました。

また、ミニミにある西田



麻生路郎生誕百年記念川柳塔作品資料展

「麻生路郎生誕百年記念・川柳塔作品・  
資料展」

当百・食満南北・岸本水府  
や本社同人の八木摩太郎・  
岸南柳・清水白柳・高橋操  
子・西尾某氏の句碑写真、  
中島生々庵・小西無鬼・白  
岩文衛らの「川柳手拭い」  
「暖簾」も、来場者の目を  
引き、西尾某主幹はじめ同  
人の作品（五十五の色紙・  
二十二の短冊）が大きくア  
ピールしました。

★愛媛県川柳連盟副会長で  
沙風川柳社顧問の長野文庫  
氏（本社参事）の句碑が沙  
風川柳社40周年記念事業と  
して建立、11月13日、除幕  
式が行われ、日川協常任理  
事の仲田たけし参院議員は  
じめ地元名士・川柳家多数  
が参列した。句碑は一五〇  
センチの四角の御影石で、



長野文庫氏の句碑

故郷の亀岡地区公園入口に  
建てられている。

#### ▼計報▲

■中村優氏（羽曳野市・同  
人）11月23日ご逝去。謹ん  
でお悔み申し上げます。

#### ▽訂正△

■12月号・本欄の第3回国  
民文化祭文芸部門川柳大会  
秀句賞に次の句と作者を追  
加します。

母のペンいつもやさしい  
語で終わり 片上 明水  
■12月号・水煙抄秀句鑑賞  
の次の句の作者名を訂正い  
たします。

行商のおばあちゃんの前  
の指定席 園田 漢香

■11月号の同人総会記事  
中「新同人」の氏名に岩本笑  
子氏（竹原市）、「受賞」

の第1回NHK学園全国川  
柳大会入選者名に植村喜代  
氏（河内長野市）を追加し  
ます。

# 本社 十二月句会

十二月七日(水)午後六時

メンズフアツションセンター

今年最終の句会で、おはなしは藤井二三氏。「祇園と祇園精舎」と題して原始仏教を分りやすく話されたが、紙数の関係で割愛。  
初出席は片上英一(八尾市) 田奈杏珠(京都市) 内海仙吉(大阪市)のみなさん。月間賞は八木千代さんが獲得。

(進行)柳宏子 (受付)泰子・美緒  
(記録)射月芳・小路

出席者―笛生・勝美・佳秋・眉水・武庫坊  
年代・敏・芳子・英王子・狸村・射月芳・重人・作二郎・柳宏子・冬葉・千秀・柳伸・幸天笑・月子・恭昌・すすむ・登志実・はつ絵英一・いわゑ・しげお・みつ子・雀踊子・小路・栞・隆二・颯云児・白溪子・満津子・典子・利武・杜的・求芽・狂虎・萬的・吐来・杏珠・規不風・憲太郎・美房・太茂津・仙吉勝晴・紫香・美智子・メ女・あいき・悦郎・三男・東雲・外吉・楓楽・頂留子・章久・藤

子・薰風・正坊・悟郎・文秋・庸佑・可住・智子・寿美子・英子・昭子・史好・寿美・吸江・度・元紀・鬼遊・美代子・二三・岳人  
寿子・花村・美緒・泰子

## 席題「大根」 都倉求芽選

人間の欲がおもろい大根煮き  
寒波襲来家族揃った大根煮  
姿変えまた大根が膳に載る  
独り居て大根一本買い洗る  
軒並みに大根干して冬間近  
錆びかけた包丁大根切ってみる  
大根も辛さあっての男振り  
ふたまたの大根ばかり与作食い  
大根と豆腐歯医者へ通うてます  
スツパスツバと大根の首はねられる  
有難い味に出来てる大根煮き  
大根の花は純白まもってる  
干大根の窓に見える位置  
大根飯のことを話して歳がばれ  
大根を漬けて小さな春を待つ  
大根と味を出し合ういかの足  
ひかえ目な女で大根の花が好き  
大根を洗う師走の川が澄み  
大根の花に初恋遠くなる  
大根飯で戦い執念で生きた今日  
ベランダに一人の大根干している  
大根が好き男とうまがあう  
大根を引き抜く力持っている

重人 年代 はつ絵 英子 庸佑 泰子 元吉 仙紀 重人 天笑 文秋 東雲 栗 武庫坊 幸度 正坊 可住 年代 梅女 はつ絵 美緒 狸村

大根おろし好きな男で善人で  
大根が美味と思う寒の入り  
うす味の大根姑とうまが合い  
土つき大根母に届いて十二月  
大根もたまには主役になるおでん  
古漬の沢庵亡母の味がする  
大根を漬けて今年をしめくくる  
大根の白さで過疎は黄昏れる  
二股の大根なんて知ってるか  
大根の花へ少女の日があつた  
辛口の大根おろしが見当らぬ  
干大根の匂いを知っている  
めし屋早起き大根きらきら洗つて  
シズテムキツン大根なんぞ炊きますか  
干大根きすすも深くなりました  
大根おろし男一人の飯つくる  
雑煮大根小さい自負を持つ  
大根おろし僕の主治医のおろしがね

## 席題「髪」 河内天笑選

散髪代不用と父は胸を張り  
恋人が変わたらしい髪の色  
黒髪のなげきも源氏物語  
髪切つてあなたについて行くつもり  
還暦に髪のある内写真とる  
ゴーギヤンの裸婦は髪からはめるべし  
貧しさは言わずに妻は髪を梳く  
子持ちとは見えぬりボンの髪かざり  
大の男がわずかな髪と格闘す

度 月子 栗 藤子 花村 元紀 悦郎 楓楽



橋を渡るとわたしの影が消えている  
橋わたるために太目の縄をなう  
渡るべしこころは鳥になつてゐる  
指と指の間を渡る赤い星

兼題「伝言」 春城 武庫坊 選

伝言を辿つて寒い風に遭い  
株売つた伝言がぐる冬の章  
別れのセリフは風に伝言するがいい  
伝言を頼りに孤児の親捜し  
我が事のように伝言まくしたて  
篋鳴きの春の伝言聞こえるか  
肝腎なところが消されてゐる伝言  
時差呆けの伝言深夜起こされる  
水枕に伝言のメモがぬれていた  
伝言板イニシアルだけでグッドバイ  
伝言板待つた時間も書いてある  
そうかいなほんまかいなでひんまがり  
伝言の怖さ白いが黒になる  
伝言を途中で曲げる袋小路  
伝言は冷たい風を持つてくる  
伝言をトイレの中で思い出す  
すれ違い夫婦にぬくい伝言板  
二十一世紀への伝言神に聞いておく  
伝言板いくつドラマを繰り返す  
親切な伝言があるおでん鍋  
伝言も鼻で聞きたい香合せ  
伝言のように第九がやってくる  
人達しいした伝言で結ばれる

智子 楓楽 千代 狂虎  
満津子 瑞枝 楓楽 満津子 妻 子 蝮 利武 太茂津 萬的 勝晴 白漢子 仙吉 杜的 憲太郎 はつ絵 三男 柳伸 典子 いわゑ 作二郎 仙吉 いわゑ 英子

とまり木に海の情けのメモがある  
昨日から今日へ伝言したいこと  
伝言板の裏に書きたいことがある  
樅の木に聞いた話は本物だ  
伝言は回り回つて的はずれ

兼題「賑やか」 河内 月子 選

木枯しは父の伝言かも知れぬ  
サンタクロースの伝言だから信じよう  
共稼ぎメモの通りに食べさせられ  
伝言が一つ雪山越えて来る  
伝言を知らぬ梯子をはずされる  
伝言に未練が残る水たまり  
伝言板にうわさの真否確かめる  
大火傷二度と伝言頼まない  
伝言がひとり歩きをする尾鱈  
伝言板へ「さよなら」を書く風の駅  
珈琲館のメッセージから雪になる  
わだつみの伝言さくら貝一つ  
あれつきり伝言は無い北の街  
伝言板の文字が斜めになる夜風

作二郎 蝮 千代 荒介 東雲 正坊 重人 吸江 雀踊子 年 度 柳伸 芳子 元紀 藤子 芳子 武庫坊 千秀 諷云児 楓楽 柳伸 敏 昭子 はつ絵

63年 月間賞杯 永久保持者  
西出 楓楽 さんに決まる

63年本社旬会における月間賞の受賞者は  
1月 岳人 2月 芳子 3月 萬的  
4月 楓楽 5月 幸 6月 智子  
7月 勝 8月 作二郎 9月 満津子  
10月 隆二 11月 雀踊子 12月 千代  
の12名で、規定により兼席題天位獲得数  
の多い西出楓楽さん(3題)が63年月間  
賞杯の永久保持者に決まりました。

なくさめに来たときわいで飲んでいに  
賑わっているパチンコ屋選つてゆく  
おでんぐつぐつ賑やかになる茶の間  
賑やかに燃えて紅葉も幕を閉じ  
賑やかに酌いで回っているピエロ  
賑やかな割に入らぬ社会鍋  
先代も賑やかなのが好きだった  
どんちゃん騒ぎが終つて水をのんできます  
賑やかな窓が明るい二十五時  
賑やかな中で黙々食べる下戸  
賑やかなワイフが留守で頼りなし  
賑やかなこと大好きで一人っ子  
雪もよう味噌汁の実は賑やかに  
むかしも今も猿の太鼓が玩具屋に  
賑やかに遊んだあの高いつけ

頂留子 三男 いわゑ 度 佳秋 勝美 英一 天笑 雀踊子 満津子 恭昌 柳宏子 千代 作二郎 隆二

賑やかなバスを迎える宿の旗  
賑やかに帰つて来たぞ連れがある  
賑やかなことは嫌いな枯すすぎ  
しんどかつたけど賑やかな頃だった  
賑やかに酔つて帰つた紙コップ  
賑やかな街で育つて淋しがり  
賑やかなアヒルの群に居る私  
賑やかな男で敵を意識せず  
賑やかに送つた寂しい袖たのみ  
賑やかな街から逃げる淋しい日  
賑やかな話が好きな五目めし  
正月と盆が一緒に来たように  
賑やかなお方でしたと通夜の席  
おしるこもビールもギャルは賑やかに  
賑やかな妻に時々くたびれる  
賑やかなにする話なら乗っておく  
賑やかな事大好きな父の酒  
賑やかな夫婦で秘密大嫌い

兼題「嫁」

西尾

昭子 荒介 正坊 智子 隆二 幸 雀踊子 笛生 射月芳 杜の 螢 美代子 小 庸佑 藤子 月子 萩選 史好 泰子 求芽 昭子 鬼遊 正坊 岳人 勝美

年金を貰いに嫁がついてくる  
ジীবンの嫁が家風を変えたがる  
電気屋さんみたいな嫁の荷がとどき  
嫁はんがあんたあんたと言い過ぎる  
核家族嫁というよりお友達  
運転もゴルフも出来る嫁がいる  
俺の血で嫁に敷かれている息子  
平凡で優しい嫁のところが  
息子の嫁と娘を比べてはならぬ  
兄嫁が亡母の指輪をはめていた  
花嫁をコーンさせている祝辞  
泣いた数だけ優しい姑になりましょう  
本当はホツとして居る嫁の留守  
いい嫁になろうと茄子の花  
俺でさえあんなエエ嫁探せない  
ここだけの話をしてる嫁同士  
年金をもうろうて嫁にわけてやり  
交替でツアー楽しむ嫁姑  
息子には内緒で嫁と飲みに行く  
糠床の底まで嫁に見せておく  
お姑さんお姑さんときしよく悪い嫁  
生ゴミの不満は嫁にはねかえる  
小遣を株で儲けた嫁がくれ  
嫁さんの掃除見ていて叱られる  
姑にうまく甘える嫁二人  
よく動く嫁の背ながら月が出る  
チンと鳴る嫁の料理が気に入らぬ  
朗らかな嫁の本心知るベツト  
初恋のまま嫁さんにしてもらう

作二郎 寿美 天笑 隆二 仙吉 武庫坊 重人 狸村 文秋 芳笑 天笑 緑良 耕花 寿美 仙吉 隆二 登志実 柳伸 紫香 荒介 可住 柳伸 佳秋 外吉 仙吉 瑞枝 柳伸 千代

女関で嫁の言葉のゆきとき

(清記・泰子) 萩

第9回

ときせん賞作品募集

雑詠2句(未発表句)

選者

大野風柳・橋高薫風・寺尾俊平・去来川巨城・小松原爽介

投句締切

一九八九年一月末日着便

発表表

ときせん賞 一名  
準ときせん賞 二名  
佳作 七名

賞

千円(定額小為替)

投句料

千円(定額小為替)

投句先

〒652神戸市兵庫区

2丁目3-18 卜部晴美方

時川柳編集至宛

多数のご応募をお待ちします。

時の川柳社

吉田笑女さんから

亡夫供養として

金一封拝受いたしました

川柳塔社

明けましておめでとうございます  
ことしもよろしくお願い致します

## 米子 川柳塔きやらぼく

桑木木川金神門大大石新足青石  
原村村上山崎脇塚田中 立戸垣  
伊春富より夕あい晶恵みさ時正由田花  
都枝美子子子子子子と子子子美子鶴子

林野野寺田菅白塩さ坂沢小小小  
坂中沢中井根谷えき口田村西塩  
荒な御みど亜ともふ八や一十て登智  
介み前里弥子み重子え江春子栄加恵

八矢茂三光政増堀藤広服林  
木野理好井岡田江井江部  
千満高寿玲日竹純文富朗瑞  
代子代子子子子馬子世枝子枝

# 老地柳塔

毎月25日締切厳守。一人一句、雅号を含めて20字まで。  
担当・玉置重人

## 川柳塔あおもり

波多野五楽庵報

一本のタオルで汗を拭く仲間  
ふさぎ込む心仲間に励まされ  
仲間目折ってたんで鶴とばす  
お通夜は酒の仲間が座を占める  
湯の仲間鳥の行水一人いて  
肩書きをつけて仲間の輪を抜ける  
テーブルに山の味覚が秋 秋 秋  
ダイエツト秋の味覚に揺らぎ出し  
紀国屋出れば一人の秋となる  
三羽鶴と言われた過去の地図を見る  
寒立馬仔馬をわかれう柵になり  
かなしみのもつれ仲間にかかされる

## 久世川柳クラブ

二宗 吟平報

凡人の食欲明日の陽が丸い  
八月の脳裏に浮かぶきのこ雲  
これによし二百十日の風の私語  
三人が尾鰭を添えて大魚にし  
幼な児のハイと答えるいとおしき  
右左見てからハイと低う上げ  
一年生ハイの返事が揃うまで

山 人  
ふさえ  
江 山  
虞 人  
ひろ子  
美恵子  
邦 人

声からし選筆戦線いやきびし  
もう一度声が聞きたい忌がめぐる  
大声がこじて聞こえる難聴へ  
どすのきく声に道理が押され気味  
新築の木の香に匂う笑い声  
もう祖母のお灸はやめた声  
人の声聞いて明日の進路とる  
ご機嫌のよし悪し分かる電話声  
声かけてふり向く見ればちがう人  
新聞をひらけば種々な声がある  
一声を掛け合い和むおつきあい  
折りにふれ声なき声きく亡母の声  
晩秋を里にも告げる百舌鳥の声  
国民の一喜一憂雲の声  
犯人の声がテレビで探してる  
歯の痛み大の男を泣かせとり  
歯車の合わぬ日もあり夫婦独楽  
総入歯外した顔は憎めない  
耳鳴りと一緒に妻の愚痴を聞く

## 川柳藤井寺

赤木

幸せを独り占めするひざ枕  
夕月にしばし戸締り忘れかけ  
幸せは手近にあつた青い鳥  
マンションの窓それぞれ月を見る  
病む人の肩から抜ける秋の風  
憂きことを忘れ静かに秋の月  
サンマ焼く秋の愁いとうらはらに  
秋の陽に今日の挫折がとけてゆく  
幸せを全部私にくれた母  
耐えて来た我慢わけ合う共白髪  
尼僧にも似た夕顔のひそと咲く

## 和子報

志 洋  
きよし  
ときお  
三 郎  
吸 江  
作 秀  
美代子  
治 子  
スミ  
敦 子  
正 枝

味覚の秋は残酷ですよダイエツト  
草笛の音色に秋がのつてくる  
足速に去る人を追うこぼれ萩  
老い二人猫四匹の冷蔵庫  
紙テープ一泊二日の船旅へ  
松茸が重荷と化した市場籠  
コンバイン古墳騒ぎの外に居る  
独り居に周りの風が温かい  
秋かしらさつきしつかり食べたのに  
コスモスも肥効き過ぎて立ち枯れる  
お隣へ食出る枝に実はたわわ  
鼻柱左右にまたぐ傷テープ  
少しすつ妻の無口で秋を知る  
わけもなく好きだと思ふ秋の雲  
紙テープ投げることにも気おくれし  
熱弁をうかがう白刃だつてある  
冬はまた来るのか木枯し吹いている  
月明り人魚に見えた露天風呂  
交番は月を残して仮眠する  
名月に子供の頃の話する  
月でさえ雲に隠れて泣きもする  
幸せはベタルを踏んで図書館へ  
月明り強い女の恥じらいを  
混沌に月も割込む露天風呂  
御平癒を祈る皇居の月明り  
獅子も老いて群れの一個になり給う

## 川柳東大阪

森下 愛論報

赤トンボ一服しに来た野立席  
鬼ごっこ野原が欲しい童唄  
還暦の祝い野良着のままで撮り  
脱線の貨車を見ている野の仏

雅美  
彩美  
昭美  
繁男  
末一  
与呂志  
政代  
伴子  
祐二  
みのる  
信子  
婦美枝  
美房  
紀子  
本蔭棒  
初枝  
美佐  
つお  
ふゆ  
好太郎  
よう女  
喜道  
秀伸  
松亭  
和子  
柳宏子  
章久  
晋吾  
孤舟

埋れ火を抱いてホテルの小母さんで  
 十階のホテル氣を揉む非常口  
 真昼からふたりもつれてゆくホテル  
 平均の寿命を越えて自信もつ  
 またいのちのびて半分病んでいる  
 余命表から消す一日に残る悔しい  
 のちまで消すにかけの純情さ  
 国訛り寄って都会の縁結び  
 寛きは女房の居ない遠い旅  
 野仏の瞳しずかな秋の風  
 野に放つ息子都会の流れ星  
 野辺路行く遍路の鈴に秋を知る  
 アラ探しワテの葉にしています  
 バレットに緑が足りぬ野の青さ

川柳塔さやらばく

政岡日枝子報

湖風 喜風 慶三 喜一郎 松山 白兔 庸佑 しんじ 雅士 美子 雅風 白屯 凡九郎 愛論 八重子 瑞枝 朗子 智加恵 夕子 ふみ 正子 花子 亜弥 恵子 日枝子 荒介 千代 壽満湖

冬型の寒さ彩る虹の橋  
 アルバムは遠い昔の遺留品  
 児の嘘が美しすぎて叱れない  
 好き嫌い二色で描けば楽だろな  
 軍神の名でアルバムの隅にいる  
 娘の手が姑の色に染まらない  
 飯食って来たといつも嘘を言う  
 ふるさとの駅にオムツが干してある  
 嘘でよいあた好きだと言ってくれ  
 終着駅老人ホームと書いてある  
 自爆するまでは嘘をつきとおす  
 アルバムに勲七等の祖父真面目  
 芒野で嘘など言えるわけはない  
 地球では嘘を言っても許される  
 アルバムの裏に阿修羅の顔がある  
 アルバムで極楽行き顔選ぶ  
 アルバムに生死解らぬ顔もある  
 無人駅わたしの華が咲きました  
 アルバムの亡兄がきょうも笑っている  
 母さんが笑う嘘ならついてみる  
 手応えがあるまで嘘を練り直す  
 耳ざわりのいい嘘を言う花屋さん  
 米朝の嘘なら終いまで聞ける  
 ていねいに母をアルバムから剥がす  
 本当の嘘は閻魔の前で言う

にた川柳会

西村 早苗報

小生 碧水 康子 京子 雄々 秋人 はるお みなど 寿朗 さつき 御前 満春 完司 康志 かつみ 瑞枝 ゆり子 次男 秋女 荒介 とみお 石花菜 千代 独歩

好きだからそんなに噂気にしない  
 秋まつり雨で着物がベソをかき  
 着物着て気分若やぐ秋日和  
 老い順に迎えに来ない仏の座  
 七光親がみんなのあと始末

佳句地10選 (前月号から)  
 高田博泉選  
 負けそうになると女を主張する 寿美  
 許される前に涙が出てしまう 蝸  
 ゆっくりと死角で動かたつむり 愛論  
 咳一つすれば隣は席を立ち 東雲  
 広い肩がつつり風を受け止める 巡歩  
 浮草の今日も流れに逆らわず 美緒  
 言いたい事も言わずに花は散り急ぐ 葉香  
 粗大ゴミそれでも男髭を剃る 昌子  
 冗談が過ぎて風船割れました 房子  
 どれほどの痛み耐えたか丸い石 昭子

はらはらと金木犀は地に還る  
 スズ虫も陸下気遣い鳴く止めた  
 楽しみは一番風呂だ粗大ゴミ  
 自殺者の下見も混じる噴火口  
 正直で渡れない世がなお続く  
 巨人戦勝つも負けるも面白い  
 原瓜水女が女らしくなる  
 原子炉の風下にタカ果をかけす  
 きつとまた逢えると思ふ萩の径  
 ビリッ子へ応援席が湧いてやり  
 親切を口に出さなから好かれ  
 十五夜を意地悪雲が覆い隠す  
 叱咤して秋は日みじか昏れ急ぐ  
 大それた事をふと聞く夜の耳

雪代 弘幸 哲三 夢酔 宗光 巡歩 三和 紫泉 花子 雪女 晴月 登美也

お見舞の記帳悪筆恥とせず

本当のことが言えない秋の風

受け皿が明日を約束してくれる

情報の流れへ心決めておく

イヤホン何を聞いたかふと笑い

コスモスが女をきまけて秋に病む

昔泣かせた女の夢を見た寝汗

帳尻へ邪魔する鬼がいて困り

コスモスがきれい呼びたいひとが居る

川柳塔からつ佐志教室 浜本 義美報

父眠る島豪雪は降り止まぬ

祭りの夜昔を偲ぶチャルメ焼き

大閣に這いつくばった虹の松

無口でも学問だけは並以上

戦前のことのみ語る呆け親爺

ダムになる村に佗しく安全旗

虫の声細り蜜柑の色濃ゆし

お祭りの屋台は子等がお客さん

禁煙の禁の字だけをつい忘れ

そろばんも暗算も得手金がない

謎めいた留守番電話からの戯画

九回裏ファン総立ち鳴る太鼓

川柳高知 川竹 松風報

目印をひとり決めて知らぬ街

佗しきはひとり夕餉の箸の音

若夫婦明るい話題置いて去に

幕下ろす小店へ積んだ人生譜

年金をみな持って行く猫の怪我

手に余る髪に女を意識する

案山子の矢放つことなし秋の風

鉄花人

寿美子

きみえ

愚童

舞吉

紫吉

雀踊子

雄々

早苗

義美報

百万両

万亀子

茂坊

順子

喜久夫

紫泉

冬子

治幸

紀一

ちよ

三枝子

義美

松風報

春枝

菊野

康子

竹萌

かず子

淳枝

和興子

遍路らしい遍路に逢うた国分寺

口車乗ってもいいと思う美女

乗りこして終着駅で酔いがさめ

薄情な男と泥舟に乗る

未練だけ乗せて夜汽車の始発駅

窓口の扱い違つて夜金バツジ

窓口の扱い違つて夜金バツジ

窓口の扱い違つて夜金バツジ

窓口の扱い違つて夜金バツジ

窓口に隠しテレビが見てしまふ

窓口を素通りする金バツジ

窓口に生きてる私たしかめる

打吹川柳会 江原とみお報

秋ぶらり日御快癒祈らし女にあつ

敗戦の日御快癒祈らし女にあつ

虹の出る雨なら耐える気で待とう

両足で歩く世間を王選び

真つ白な日記に跳ねる深海魚

カナ言葉伝統文化流しかね

コーヒーを上手に点てる好きな人

どの思もまだ返せない日のくるま

喪の明けて女は旅に出ると言ふ

鶯が舞う眼下に獲物ある限り

コマ止めて流れの中の草になる

老いの身を秋雨何故に攻めるのか

長客の計つてみたい脈の数

体育の日のおとさせるあんま灸

ほんの少し嘘が交つて話の輪

夢に見る花から彩も飛躍する

お喋りはポットを空にして続く

高重

玲功

和広

寿男

一風

佳風

朱坊

節子

松風

幸泉

早苗

紫映

雄々

宗光

著流

梅朗

寿美子

妻子

紫泉

白峰

たつみ

巡歩

柳風

善政

温子

正朗

芳子

典子

雀踊子

神主が祭りはせぬと言いだした

イザナミのお墓のぞいて叱られた

人生を大事にしたいめぐり合い

降る雨を曲つた腰が受けてたつ

二杯目がほしはつて酒の銘を誉め

答案隣へのペンはよく走る

考古学深い眠りをゆり起し

余裕出来日向ほつこのおばあさん

今日も又無職の二字に日が沈む

クラシックになった銀シャリ物語

川柳化粧槽 植村客遊子報

働ける幸せがある雨戸開け

ほろ酔いの手で御神燈ともされる

胡座かき男の酒は坦懐に

コンバクト欲しがる孫も女の子

組板が妻の機嫌を知るリズム

髭と爪だけはどんだんのびてくる

肩書を知つて女が横にくる

思い出し笑いへ年を考える

許し合う盃干して出た笑い

娘が嫁ぐなんてお酒が苦いのか

幕洗い心も洗ろて彼岸入り

好物の酒肴供えて彼岸墓地

針子本吞んでも悔いがないに逢う

花開くりズムとときめく孫娘

今日も暮れ運命の糸の日誌書く

転校も苦まないように孫走る

不透明決断つかぬじれったさ

毛糸編む手よりテレビへ目が走る

一点でよいのに満貫ハイファイブ

三和

弘朗

いわり

八太朗

幸子

幸晁

幸枝

仙岳

とみお

岳詩

紅葉

葉香

秋月

越山

秋山

白李

大鷹

礎石

三青

悲子

みつこ

サワ子

遊峰

遊光

輝月

永楽

五幸

瑞穂

客遊子

むらくも川柳会 藤井 明朗報

鶏生 ヤス子 武衛 義良

盃へじっくり相手読んでいる  
ひと口で丸くおさめる口をもち  
口先が動いて笑顔みせてすみ

千里 久仁

丹精に育てていつかさられる  
使い捨て年よしまと昼の月  
月下美人ラストの主張は呑んでいる

文子

柳友の支援会場埋めつくす  
四十路坂まだ変身の夢を追い  
限られた命と知った闘病期

一葉

故郷の母は味覚の秋に酔う  
余白には本音を吐いている日記  
きょうも繰る明日へ続く糸車

吉野

一球のミス敗北というみじめ  
コスモスのゆれて平和を主張する  
世の変り男が米を研いでいる

常子

空気浄化上手な父の換気扇  
足踏にやさしい夢の花が咲き  
育つ樹へ万の想いの年輪や

巡歩

有終を飾る見事な秋景色  
大会に二三度呼名してうれし  
三面鏡こちらを向けば背がすねる

節江

検診の列に並んで考える  
鈴虫がりんりん励ます挫折感  
島の蟹みな喪に服し啄木忌

昭子

静岡市川柳塔同好会 永倉 僕川報

梅園

霧囲気が好きな女の聞き上手  
少数の意見は陽の目見ずに消え  
聞き役に回れば傷のない男

ふみ雪

登りつめまだ先見えぬ喜寿の坂  
一周忌女弱気を脱ぎ捨てる

芳子 正朗 明朗

名案も金の工面で纏らす  
一徹も弱気になった再検査  
縄暖簾味は老舗を守り抜く

小林 妻子報

あすなろ  
鍵掛けた途端に部屋で鳴る電話  
幼児追う祖母の後から犬も駆け

正子

あすなろ  
掃除機を置いて漫画へ聞いてやり  
怒らずに子の言い分も聞いこみ

睦子

胸に打つ怒りをぐつと噛みしめる  
御見舞の記帳の筆へ手が震え  
草餅が届くうれしい百達者

敏子

身勝手さ冷たい怒り湧いてくる  
宝くじ買う列に居る師走感  
寂しさに勝てず睡眠薬の世話

巴子

川柳塔鹿野みか月句会 土橋 螢報

悦子

気が重い隣の薔薇を目立たから  
日の丸の機嫌を風が聞きに来た  
気まぐれの桜よ秋の日も暮れる

辰江

泥舟が無事に着いたか気が揉める  
そんな気になされた貴方の罪重い  
眼帯をはずして陰気から抜ける

理恵

ご先祖のお陰格子戸まだ堅い  
踏陰の陰へ答えを先に歩かせる  
かげからかげへと醜い穴を掘る

朝代

陰に咲く花の匂いにふり返る  
芯になるネジが一番陰になり  
戸の陰で今日の涙は拭いておく

玉恵

地球儀の陰に模索がたむろする  
大樹の陰にわたしの座る場所がない

紀代志 芳男 定次

たまき

つき

きん

まつ

静代

三津子

久子

みつ

千代

美千

気の合うた相手で胸も軽くなり  
子育てのごとき手塩で菊が咲き  
達筆へ返事書くのも気がひける  
口達者どう逃げ回るリクルート  
みずみずし達筆封書の宛名書き  
口ぐせの感謝の気持忘れずに  
上品な口が気になる事を言い  
福助のでんと座った菊花展  
菊人形千代の富士関土俵入り  
相手にはしないもつれる糸ならば  
絵も添えて達筆友の年賀状  
腕すもつ相手は孫のガイナ腕  
達筆はいつのことやら筆洗う  
けんか相手まさか居ないと淋しがり  
ひとことに人の気持の温かさ  
女房を相手に飲んで悲なし  
難交渉相手の話術におちぬよう  
アメリカの攻勢よそに稲熟れる  
語らせて喉ふるわせる青蛙  
ギンヤンマ初秋の空へ消えて行く  
こぼれ種今年も墓に赤く咲き  
的はずれ初夢消える年賀状  
親の見栄エリート的に塾通い  
手をつなぎ励ましたって老夫婦  
手作業で倒れた稲を刈って行く  
掌をのぞいてまだまだ捨てぬ欲  
手ほどきを受ける生徒の洗い顔  
肩パットはずせば失せる靴の音  
A型の愛はひっそり野にゆらく  
大切な言葉心のポケットに

陰徳を積んで仏の眼にとまる  
 世話好きで陰日向なく生きている  
 まだまだと陰から妻が振手を巻く  
 お陰さま薔薇もまっ赤に咲きました  
 伴せの陰に神仏忘れられ  
 車椅子陰で支える福祉の手  
 鍵開けて気がくる眠る愛づくし  
 気こころの温い港に灯がともる  
 金無心気軽に受けた後の悔い  
 峰つつき気圧の谷にあぐらかき  
 悪い子のポーズで愛に飢えている  
 母の日も母のポーズは変わらない  
 ポーズした孫の指から顔が出ぬ  
 お蔭さま今日生かされる飯を炊く

川柳ささやま

遠山

可住報

汲香 小鹿 けんじ 富恵 くに子 かつ乃 諷人 隆風 としを 智恵子 衛正子 静生 芙美 螢

奥の手は家伝にさせて覗かせぬ  
 脱サラの地図をピンクに染めてみる  
 八尾市民川柳会 飯田 悦郎報  
 お年玉が遠い昔の夢のせ  
 手仕事も読書もあいた雨三日  
 手にかかる厄介物だが福の神  
 ロボットになり万札を数えてる  
 甘い手にのってしまった螢の灯  
 舞台裏のぞけばいやになるお店  
 舞台には人の情けが落ちている  
 亀の足除舞台をまだ知らず  
 舞台裏若い主役がいびられる  
 最高の舞台全身耳になる  
 優勝を決めたボールが弾んでる  
 すこしはずんで道化寂しい顔をする  
 玄関はずんだ声で勝利知る  
 敗北はずみが出て来た曼珠沙華  
 打ち明けた恋にはずんだコンバクト  
 よくはずむ毬で斜めに飛びたがり  
 はずみつき何処で止まるや下り坂  
 道草が老後になって生きている  
 その道を極めた人の目が温い  
 今日からは二人で歩く長い道  
 坂道の途中で愛を確かめる  
 もう少し一緒にいたいまわり道  
 風の町思想激しき人が住む  
 町挙げてお祭り騒ぎ金メダル  
 無人駅残して町は冷えていく  
 ぬくもりがこぼれてしまう砂の町  
 この町で生まれて知らないことだらけ

ヒサ子 可住 勝美 雅士 シマ子 覚然坊 柳伸 夕花 和子 東雲 甘平 美津留 美幸 鯛牙子 泰 朝子 悦郎 憲太郎 武庫坊 しんじ 三男 宏子 とみを 重人 律子 比沙湖 喜風 一高 欣之 頂留子

住みなれた町から近道消えてゆく  
 三幸川柳教室 桜井 千秀報 度  
 グッチのかばん旅を夢みて有頂天  
 つっぱってかばん変形してみせる  
 旅慣れがかばん小さくなってゆき  
 誇らしく終章飾った古かばん  
 かばんなど持たぬが信用持っている  
 旅先の一部始終を知るかばん  
 道草もおぼえて育つランドセル  
 ノラとなる覚悟のかばん持っている  
 若い日の焦りかばんの底に詰め  
 手から手へかばんの中身おそろしい  
 脇役でいるから孫がなお可愛い  
 孫の棘やさしく抜いてまいる日々  
 そと孫も来ませ輪の中地藏盆  
 孫の口祖母そっくりのしなをつけ  
 叔すとは言わず孫見に来てくれる  
 孫と吹く草笛おだやかな地球  
 恋多き女を捨てて孫の守り  
 寝たきりへテープの孫が話しかけ  
 孫がまた錆びたレールを継ぐという  
 孫の居る未来図白いままの画布  
 脱線でさかんだ道をまっしぐら  
 脱線も若い力で立ち上がる  
 レールから外れてみたいい好奇心  
 不協和音出して崩れる程の愛  
 脱線をしてから佳境の名講義  
 肝心の話どこかで消えている  
 脱線も出来ぬつれなき月は澄む  
 子の脱線防いだ愛の信号機

幸子 カツミ 道子 育子 愛子 芙美子 千枝子 政子 桂香 保 芳子 靖子 隆行 仲幸子 美子 鉄治 孝子 忠昭 西 三千子

いやがつているが目線が違いたがる  
目で合図そつと抜け出す盆踊り  
きつこと言うてる母の目が笑う  
届かない座標目指した日の焦り  
目の届く範囲でとよんだ籠の鳥  
ああ今日も無事でよかつた目をつむる  
目をつぶることを覚えた檻の虎  
同じ目の高さで友と酌み交す  
不細工な娘ですがと目を細め

岸和田市民川柳大会 植山 武助報

親切の芽生えは親の背で学ぶ  
親切が裏目になった届け物  
許すとは言わぬが孫を抱いた父  
許すとは言わず先生手を握り  
すすいと今日は私が主役です  
人ゆるす事を悟つて丸うなり  
すすいとメダカメダカのままでよい  
親切の押し売り車中でゆすり合い  
親切がいたく身に沁む老いの杖  
凶星つかれてバビバペバビバペ  
親切が葉のように効いてくる  
ソースと醬油どちらの方が親切か  
看板の染色の二字割けたまま  
妻に贈る言葉は陰でありがとつ  
心に届くあなたに贈る鶴を折る  
贈られたひと言葉右の銘とする  
国境を雲はすすいと越えてゆく  
信じたい男に贈る金の鞍  
喝采を贈られた日に討たれよ  
左遷地へ贈る言葉が見当らず  
許せない訳は日記に書いてある

金一 朱夏 千秀 純子 重次 和次 高夫 結実 喜久子 狸村 さい子 幸代 ひで ダン吉 富志子 通彦 武助 漁波 一弥 三晴 勝男 信秋 登志代 武雄 幸 大茂津 千秀

あたたかい拍手をみんなからもらう  
畷のある方へすすいと泳がされ  
牧水が好き看板に名を貰い  
核のない地球を孫に贈りたい  
許されても消えない罪を抱く女  
親切な手はゴツかつた歩道橋  
嫌われる役で順番制にする  
順番にお迎え来るとは限らない  
仏も鬼もすすいと通す自動ドア  
看板が一人歩きをして困る  
凶星さされてトイレへ行きよつた  
雨の中届けけてくれた定期券  
看板が泣いてるのが秘宝館  
凶星外して思春期の子を叱る  
リンゴむく順番の影に母が居る  
すすいと私の先を妻が行く  
許すとは言わずに逝つた父の鞭  
ネオン街怪しき色が隅に在る  
自販機で看板娘英語となる  
古傷が疼く許そうとも思ふ  
親がまだ許して呉れぬ母手帳  
すすいと来たが結婚だけはまだ  
親切で少女の微熱まだ続く  
上げ底の親切と知る風の街  
すすいと泳ぐつもりに壁がある  
へそくりはどうだ句集の中だろう  
凶星な人だよ顔色が変わつて  
親切は時を越えてからわかる  
赤とんぼすすいと飛ぶと詩になり  
鈍刀を磨いて男は順を待つ  
地上げ屋の先兵看板立つ敷地

月子 天笑 一三三 正坊 悦郎 千芳子 射月子 左久良 金三郎 藤子 史好 正好 雄次郎 願 幹齊 燕子花 直子 源一 正知 初太郎 素灯 満洲子 岳人 寿美 尚子 泰雄 冬葉 元紀 甘平 トシオ 浪速子

親馬鹿が許すと書いた尋ね欄  
建売りの看板替えて客を待つ  
親切を双葉の頃に教えとく  
親切がいつか敷居を越えて来る  
運のない男に贈る朝の海  
手あみ糸許す心になつてあむ  
おとなしい口調で凶星指している  
ふんわりと凶星を突いた京言葉  
すすいと調子に乗つたのが不運  
行きすりの親切に会う歩道橋  
父帰るすんなり許すたぬきそば  
許された甘え許さぬ釘も打つ  
畷まではすすいとすすいと行けました  
陰口はすすいと世間を渡ります

サークル檸檬(京都吟行) 藤田泰子報  
散り急ぐ落葉に未練が残ります  
つかの間のあなたに背く感情線  
船が出るまでにラーメンたべさせる  
大船に乗つたつもりが足を出し  
背いても掌のなか孫悟空  
御平癒を祈りかえりの燻爐炊  
一人出て一人で帰る秋の風  
グループの心はひとつ雙爐炊

佐川川柳会 赤川 菊野報  
国体で野心がもえる金メダル  
人知れぬ野心があつてままならぬ  
炎えたる野心聞かされはれ直し  
野良犬と笑うな猿も天下取る  
宝くじ野心の夢をのぞき込み  
海原へ野心半ばの竜馬像  
親背き家出してから迷い出し

春栄 みのる 寿美子 白光子 健司 頂留子 庸佑 香子 トミ子 比沙胡 柳宏子 柳影 千寿子 千代女 智恵子 今日子 三四子 雅子 美緒 薫風 泰子 恒子 十面子 一節 天花 憲一



チャンネルの何処も天皇御病状

柀の音が冴え人生のふた幕目

雷がポツクリ寺でまだ恐い

コスモスが揺れる優柔不断だな

相槌を打ってもらいたい来たお客

迷わずにプリンを型へ流し込む

口下手の保険屋ノルマをよくこなす

セロリーを嫌い抜いた亡夫へ残す悔い

ピアノの音溢れて月が円くなる

海女の磯笛に息の長い音がある

くつろぎの部屋に我流の花がある

土砂流失祖先にすまぬ田が埋まり

白い息赤いほっぺの児が走る

城北川柳会

お菓を飲んでも欲しい金メダル

歩き癖いとい人とすぐわかり

同窓会友一人減り二人減り

幼な友今は薬飲み友達で

見守ろう名馬によく有る癖だから

目的のある朝腰はシヤンと伸び

酒癖も父に似て来た子を案じ

萩すすき見送り走るバスツアー

味のある癖それだけが持っている

悪い癖気づいたときなまじう遅し

彼岸への舟は前ぶれなきに來る

宴会の後は梯子の悪い癖

又癖が出たと女房角を出し

運動会様変りして味気なく

買ったつもりなのに松茸匂う鼻

現実はその行かないメロドラマ

自我捨てて愛憎すべて流れ去る

杜 的

水 客

白 李

幸

た だ し

は つ 絵

達 子

花 代 子

武 庫 坊

メ 女

陽 露 子

飛 鳥

美 穂

閑 石

寿 美 礼

静 歩

ふ み

新 一 郎

佐 津 乃

静 子

文 子

と み 子

き み 子

よ し 子

午 郎

秀 夫

登 美 子

市 郎

テ ル ミ

倫 子

秋高く菊一輪の無人駅

秋風に押されて一人萩の寺

なんとなく御所のお庭も淋しそう

リハビリの輪投げ主人のあとけなき

知恵の輪がすんなり抜けた阿呆らしき

七癖を仲よく今日も無事に暮れ

虹の夢ふくむ孫のシヤボン玉

七癖を心得ている妻が居る

書架の隅に亡父の青春知る日記

距離置いてじっと見守る父の愛

ひとりだけ良い子になって輪が崩れ

男児ばかり続いて出番ない人形

まだ見えぬ子の枕辺に玩具吊る

夢のかけ橋島の吐息が聞こえそう

喜んで子のため機打を打ちつつけ

高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報

ねぎ坊主のびて噂が消えてゆく

妬いている妻は黙ってねぎききむ

争えば味噌汁の葱鼻をつく

京に田舎あり頑固に葱を作つてる

葱をひく遠くに塔のある景色

葱きざむ胸に離れぬことひとつ

強敵を相手に塩をなめている

ひとり言相手が死んだその日から

おかげさま相手に恵まれた旅路

小六の孫に女房は並ばない

言い訳のたびに敷居が高くなる

地球から芽を出すように高いビル

自殺できる高さで崖の好い眺め

事件だったか飛び出してくる町が好き

散歩から犬が拾って来た事件

八重子

きくゑ

敏子

千恵子

白峰

トキワ

公一

典子

達子

満津子

ただし

温子

正之

登志代

右近

房子

八重野

恵美子

萬的

作二郎

年代

冬葉

多賀子

求童

京童

颯云児

紫香

白浜子

行平

英子

毛一本で事件の謎が解けてくる

バトカーが何だ何だと寄ってくる

アトバイを崩す列車の時刻表

鮮やかな手口事件の舞台裏

事件にはこと欠かぬ日々背が寒い

黒幕が握りつぶしていた事件

事件の陰にきつと哭いている母がいる

鶴の目鷹の目ハブニング待つ事件記者

ひとつ鍋つついて味わう家庭の和

献血車足ばやに前通りすぎ

米不作農水省がほっとする

護摩をたく紋日のどかな亀の池

ばあちゃん寝たいと連体孫がくる

大きめのつづらに銭の淵を聞く

亡母に似た行商を待つ加茂なすび

まあまあのくらし松茸買わぬとも

風邪の神とご縁が切れぬもやしっ子

退職金の匂いを嗅いで来たバンク

フィルムが残ったまま夏最終

大損をしてはならない主婦の株

風邪でないクシヤミを三つして仕舞い

もうお済みですかと霊園から電話

しらがねの芒ゆらゆらわがいのち

尼崎尾浜川柳会

春城武庫坊報

力では負持たぬ母に愛がある

村一の力持たぬ嫁が無い

印籠の力にホッとするドラマ

ロボットで力瘤など今いるらぬ

職退いた表札雅号だけで足り

表向き繕い裏で苦勞する

美智子

あきら

豊子

紅陽

よ志子

芳子

同芳子

俊作

稲子

のり子

圭坊

文子

春風

静江

栄

と お 夫

貞 夫

佐 代 子

杜 的

暢 子

しげお

陽露子

鬼 遊

保 藏

夢 之 助

弘 治

向 西

佳 秋

い わ お

義 嗣

褒められてつい一回りする落葉  
 宿題へ眼鏡の奥で子を叱る  
 程ほどに八百長もあり草角力  
 影ぼうしお前もころぶ事はない  
 木犀の散り敷く道を出動す  
 味方にも教えぬキノコ採れる山  
 未来図を描いて咲いた菊の賞  
 病むもよし人の心が透けて見え  
 十戒の中で人間らしくなる  
 マイカーの屋根もひと役布団干し  
 頑固親爺相談事が大嫌い  
 戦友の記憶がずれる秋の酒  
 事故現場誰が置いたか菊の花  
 眼帯が似合う夢二の女の絵  
 眼を子供喜び覗いてる  
 眼に滲みる白いシーツが秋を呼ぶ  
 眼の奥の記憶に奈良の仏たち  
 もう一本追加の酒へ眼が叱り  
 眼をつぶる事も幸せ積木つむ  
 眼の動き妻はとつから見抜いてる  
 自画像に自信はないが眼を入れる  
 散る落葉安楽椅子をゆすぶるな  
 ゆすり葉の散りざわりばかり考える  
 野仏の膝へ枯葉が散り積る  
 夏の想い出が散つてゆくペーアメント  
 銀杏散る愛の言葉を撒くように  
 草を散らして雄鹿は角を切られに行く  
 打ちあけて心に残るいい言葉  
 受賞の報せたたる青い空  
 ゆつくりしなはれ昼はわて独り

澄子 六浦 敏之 すすみ 江美 昌子 十四郎 定人 歌子 寅之助 貞吉 武庫坊 年代報 正坊 保蔵 正一 静夢 かね子 久美代 伊三郎 萬的 曲ん手 定人 幽芳 英子 武庫坊 作二郎 春子 美智子 眉水

黒白をはつきりつけた風当り  
 飛躍した地図を心の隅に置く  
 着くたびに背伸びしている迎え傘  
 花活けているのも知らず病母眠る  
 さんま焼く炭は大事にとつてある  
 川柳大阪  
 山下美津留報  
 温厚なお人も怒る消費税  
 この男と決めた外れくじ  
 茶柱にちよつぱり託す夢で良し  
 不器用を売物にして懐手  
 止り木で嫌な笑いと目で出会  
 此の蛇口ひねれば噂溢れだす  
 病院は駆け込み寺か政財界  
 息合ったさわやか五輪水中花  
 竹光も名刀に見せる旅役者  
 聖書には天に行く道書いてない  
 地平線天地は静かに手をつなぐ  
 どんぐりを拾いに行った竹トンボ  
 いい別れ歩なりの金の宝船  
 旅の宿別れを惜しむ花の舞い  
 年老いた母との別れ言葉なく  
 別れ酒兄よ達者と出る軍歌  
 楽しさの深き別れがたつかる  
 別れの日澄みわたる秋の空  
 同僚の別れた後で懐かし  
 別れてもあの日のいびきわすれない  
 愛着の別れを惜しむ改札口  
 別れる日みんなで囲むチャンコ鍋  
 九州へなにわを捨てた鷹がとび  
 真つすぐに生きて瞳を裏切らず  
 竹垣に秋はこびくる赤トンボ

園歩 歌子 柳影 紫香 年代 天平 雅巢 洛醉 しげお 与呂志 重人 正之 宙々 河南子 喜醉 凡九郎 笑風 司泉 小柳 酒連 喜楽 宗一 遊心 もとみ 三千雄 哲流 本蔭棒 比呂志 醉舟

星影のワルツに主役こみあげる  
 ふるりの空気がほしい竹トンボ  
 じわじわと真実蓋を持ち上げる  
 青竹の杖長持着く良き日  
 定年の山登りつめさあ明日  
 富柳会  
 相談の涙に男だまされる  
 おやつ籠孫集まりて掃除する  
 早婚でPTAでは姉にされ  
 相談所行かか相談してる老い  
 山門で相談すれば鐘が鳴る  
 口減らし姉十六歳で幼妻  
 許されぬまま早婚の仮住居  
 大掃除祖父は朝から家にいず  
 相談にちゃんど結論持つてる  
 死ぬ前に何故相談に来んと言  
 掃除機がママの機嫌を知っている  
 森の中やさしい風が掃除する  
 掃除するかたちで昼寝してる母  
 川柳塔まつえ  
 恒松  
 勝ち負けは神様だけが知っている  
 赤い糸神様こんがらせないで  
 進学期兎角神様忙し  
 神様をだしにして飲む秋祭り  
 どぶろくを飲んで神様昼寝する  
 大吉と出た神様を信じ切る  
 教会で無神論者が式挙げる  
 神様に会いたくなる鈴鳴らす  
 百度石神の心へ火をつける  
 千鳥足貧乏神と肩を組む  
 合格の日から神様はつとかれ

鉄心 金太 柳弘 美津留 花子 静枝 昭水 森子報 花子 静枝 昭水 智久 文次 富久一 美房 花梢 岳人 森子 叮紅報 翠星 市雄 静翁 煩惱児 弘円 小鹿 昭二 昭二 芳枝 蒼流

神前へ親も着飾る七五三

地位と金出来て悪筆拜まれる

悪筆の便り平気な母の誤字

悪筆の手紙だけれど温かい

悪筆に名目ぞろいの川柳会

亡き母の悪筆も出る大掃除

悪筆を詫びて用件走り書き

善人の自負へ悪筆言いそびれ

母の文字悪筆ながらあたたかい

自分史の自負は悪筆憚らず

悪筆の癖も色紙に丸み添え

世筆の中にこぼれる温か味

出世と悪筆どっかですれ違い

冬仕度いまだ股引き可愛用

惜しみなく木の葉は舞って冬を待つ

子雀のことも気になる冬仕度

宍道湖に早や白鳥の冬仕度

天気図のタルマはつぼつ冬仕度

文化祭終つて安堵の冬仕度

冬仕度などはピンとこぬ世代

枯葉散るわたし独りの冬仕度

冬仕度鼻で笑っている二十歳

稲架解き困いも固く冬仕度

やがて冬隙間を目貼る北の部屋

ホーナスも頭の中で冬仕度

父の貨車スタミナすこし切れている

スタミナを無くした去勢された犬

ドカ弁のスタミナ汗がほとばしる

スタミナは薄れ老人口達者

親馬鹿で翔べぬ子供に塾通い

親馬鹿が塾へ塾へとせきたてる

親馬鹿は嫁いだ娘にも気をつかい

免許証のない親馬鹿が車買う

翠洋会

ナイフほど切れる男が踏み違え

三玉の大根姿選ばれる

冬の海根の憤怒見る如し

ペーパーナイフ不器用なりに生きてます

白妙の練馬 守口 桜島

失言を置いて帰った見舞客

紅いリングに果物ナイフが染まる秋

大根に人參そえて祝の膳

あとをつく親父の海にある気合

大根の歌手は着物でて来ます

お土産に母大根を抜いて来る

大根が主役になると冬がくる

人海の凍てつくような無関心

ピリッとからい里の大根にしらすばし

失言をすかさず秘書が後始末

失言をとりけすつもりが又失言

コレクトコル海の向うと思われず

大根が生煮えだった不意の客

屈辱の刺し身のつまの自己主張

大根が何だ大根怒るなり

松茸が何だ大根怒るなり

西宮北口川柳会

古書を読むとき商人の顔は消え

こんなにも違う世代のギャル会話

母病んで時々枯らす仏花

枯葉歌うイブモンタンの声の艶

練り過ぎた策に溺れて秋陽落つ

靴下の穴七人の敵狙う

中西兼治郎報

江

静

町

紅

いつを

照

登志実

みつ子

英一

綾子

春子

絹子

文子

東雲

兼治郎

宏

美津枝

良江

光子

すすむ

君子

為子

恭昌

さと遊

鬼遊

一郎報

栄

紀雄

靴下の穴を気にして仇情け

コスモスが気がねしながら咲いている

丹精の菊をカラーで撮りまくる

白菜を干して今年も母達者

一冊の古書で三人知恵を出し

ひもといた古書読めぬまま手枕に

気を抜けばひよこり方言顔を出す

虫好かん奴が味方の顔をする

都市砂漠にも四季あり銀杏散つてます

さむらいがガム噛んでいる映画村

古書探す父には父の考古学

愛は確かでベビー靴下編んでいる

幻を追って土練る志野織部

人生をたのしみすつてんでて逝き

胃の痛む話男に策が無い

嫁姑肚さぐり合う練りからし

赤茶けた古書から孫の名を貰う

鳩笛に民話悲しいまま終わる

聞き流す術を知ってる枯尾花

練り加減腕が覚えてる秘伝

金のいる話に一同しんとなる

年金の枠で練つてる旅プラン

窓際へ異動は伏して靴を履く

古書積んだ書齋に亡父は眠つてる

大正のもみじはさんである蔵書

語り継ぐ古書の重さに負けてくる

靴下が十万円という平和

転落の涙を笑うコップ酒

好きだった栗飯にする妻の忌に

春

蘭

保

蔵

恵美子

みち子

しげお

てる

正坊

萬

園

青

珠

春

子

宣

子

白

漢

子

千

世

子

飄

云

児

光

代

よし津

い

わ

ゑ

い

わ

ゑ

い

わ

ゑ

い

わ

ゑ

い

わ

ゑ

い

わ

ゑ

い

わ

ゑ

い

わ

ゑ

い

わ

ゑ

い

わ



惚れた女へ出産祝持つて行く

おかゆの前でピフテキ二枚平らげる

念入れて大袈裟に打つ基礎の杭

生意気に娘洋酒の名を並べ

糖尿で水割りばかり飲んでる

競つても所得の美味知る杜宅

十二神將競う柿の実は青い

ご主人は出張出前ですます昼と夜

男の血吸つたルージュを拭いている

オーバーに明るく手話の指はずむ

大げさに牡丹を誉める李白の詩

春一番早や競い合う受験絵馬

飯まだか不精するなど腹の虫

大げさに言うなど夫れている

免税の洋酒に旅の恥がある

はじめから遊びだったという男

鹿の目に大げさすぎる人の群れ

出不精の筈が昨日も今日も留守

川柳やがわ

高田

誘惑をよう振りきつた風の町

肩すかしくつて髪型変えてみる

輪の中に入ると齡を忘れさせ

盲点を末席容赦なく攻める

手をかましてやつた女に誘われる

盲点を突かれ私は鬼になる

何となく亡き人恋し秋の夜

誘惑を待つております付け眉毛

目立たない花で香は群を抜く

誘惑に負けず都会で貯めている

どびんむし松茸一切れ光つてる

誘惑を待つてよう倦意期

晴生

度

甘平

柳宏子

東雲

比沙胡

作二郎

憲太郎

章

醉虎

萬的

英一

頂留子

潔

元紀

外吉

柳伸

小路

博泉報

春子

房子

勝美

創吾

鉦平

曲ん手

玲子

えいめい

節子

雅文

時弘

盲点に触れると何か出て来そう

誘惑へ諭吉が顔を出して来た

盲点にある腰掛は黙つてる

ふさふさの髪アラムに置き忘れ

誘惑に弱い夫の手綱ひく

櫛の齒の粗さ気になる年になり

ご容体気になり病母がシャンとする

誘われて乗つたが泥舟かもしれぬ

酒断つた寒さが秋の身にこたえ

髪切つて出直すつもり曲り角

共白髪で穏やかにする口喧嘩

秋風が恩ある人の計を運ぶ

柿むいて父だまつてる嫁く朝

誘惑の手の柔らかに冷たくて

恍惚の画布真つ白に秋を描く

秋の田で燃やせば白い煙立つ

うつつの日の真昼を妻の洗ひ髪

寂しさを誘惑された老いの金

秋の風疑心暗鬼になつてくる

折角の決意引つ張る後ろ髪

髪をとく余裕が出来た回復期

きつと今日逢える予感の髪を梳く

返り咲き桜に盲点聞いてみる

いっぺんの寒さに秋がうつたえる

間違えて抜いた黒い毛じつと見る

藤の木古墳髪の毛一本見逃さず

盲点をつつけばきりのない時世

消しゴムで消せぬ記録が天にある

冷夏尾を引いて秋ナス漬けぬまま

髪かたち変えても愛心出来ぬうつ

一本気な部下で逆立ちしする髪

紀代

白水

三洋

増造

なつめ

権太

勇太

一芳

菜月

藍子

波留吉

あやめ

かすみ

光三

まさお

章

シマ子

冬葉

一途

庸佑

静水

江

亜也子

一

三郎

博泉

亞成

英王子

頂留子

三千子

髪白くなつても角はまだ折れず

姿見のなかに綺麗な秋がある

秋風がなぶる野菊がいとしゅうて

特売が盲点子供を見失う

髪染めただけですずれぬこころさい

盲点は酒だと部下は知つてゐる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

その時は海月のように身をかわし

土が産み土に還すも輪廻かな

岩陰で鳥賊が海月に打ちあけた

うらなりに言ひ分がある花鉢

刈るな刈るなど虫が鈴を振る

ルルまない海月へ今日も日が昏れる

泉ありギリシヤ神話の女像

ワンカップ幕前の土が潤いぬ

泉水が虹を結んで背がぬくい

人妻は恋しちやならぬ愛すべし

年賀状今年も友が無事でした

正論をはけば海月が邪魔をする

川田順をターゲット老いらくの恋熟

うつつかりと海月こぼした昼の月

豊中もくせいの川柳会

田中

来年は手帳の記号を変えてみる

二番目は花子がほしい母子手帳

お見合日母がそわそわ秋日和

母と床並べしんみり里帰り

手術日が決まりしんみりする患者

しんみりした羅漢のお顔へ散る紅葉

しんみりと聞いた話は嘘だった

木の癖を知つて大工は鈍い

吉之助

磯

あいき

亜鈍

敬山

小路

薰風

聖子

世似

かつ子

はるみ

智重子

恵美子

歳栄

民子

鈴江

三和

悦良

清泉

天痴人

白汀

正坊報

博史

正坊

典子

隆

明光

萬的

とく子

晴治

植木屋の息子も親のように刈り木枯しに樹と木が歌う冬のうた美しい夢を若木の根に埋める木簡が古代の謎を深くする人形の服を脱がしてやる議會靴下を脱ぐとき冬に襲われるひたすらに歩むほかなき靴を脱ぐ妻の手に渡し制服順に脱ぐ入院の母からちよいちよい赤電話エンマさんセンセイの舌抜いているこの夜寒 三尾も紅葉見頃なり前髪を濡らしたままで海女の昼終日をシルク博から正倉展妻に客あつて用事をこしらえるこたつの上のみかんこたつの下にネコごめんねとその一言で心満つわが傘で半分濡れるお人好しポインセチア窓辺にはして友不在縁結び下手な神様だつてある

川柳はびきの 塩満

しげお よし子 武庫坊 路児 つえ子 作二郎 俊子 紫香 杜的 楠曠 圭坊 福一 明吉 登志実 きく子 慶子 富子 登代子 寿美子 敏報 淳一 順子 ケイ子 白水 重人 絢子 一枝 昇 たくし 健三 志洋

純な男ゼロゼロセブンに嫌われる般若心経背なも心も丸くなる起きぬげの顔あはかれる日曜日十字架のうしろを見た時があるパーゲンに行く日は低い靴をはく五線譜で話せば丸い世界の輪流れ雲定年いつしかそと来る丸くなるまでの悲いをはいと知らずロケットが夢をなくした丸い月株の餌で代議士釣るつもり美しい女の裏はさぐるまいあちこちへ味は道つれ食へ歩き七五三服も羽織も手をつなぐパーゲンの元値の方が笑つてる給料日とがった妻も丸くなる新空港発着見たい余命表爛もよし夕月もよし旅の宿肩書きがなくて人生丸く生き南座にまねきが上り冬がくる親と子の歩幅が合わぬ曲り角丸まると肥え戦争を知らぬ鳩税務署へ行く父さんの丸い背投げ捨ての缶が痛いと呼んでる売残り特別セルの中に入れ看板を背負う女将の腕の冴え谷合いの看板地酒の花ざかり絵日記のクレヨンの月まん丸い厄年のヒマワリコスモス菊の花

川柳後案

井上柳五郎報

忠宏 トミ子 満洲子 阿衣 充子 伴子 美津留 吐来 悦子 利武 与呂志 義一 末一 かつみ 敦子 蛙声 繁男 シメ子 美代子 泰子 比沙胡 隆 淑子 胡村 希代司 義一 美津子 敏 吟平 桃風

くされ縁切つてしまえと他人言う花鉄花のころになつて切り大根の輪切り泣言などいわぬ妥協を計算に入れて出す吐息妥協した後には敗者に似た吐息ロウソクが吐息で消えた失意の日真夜中の吐息を聞いた暈の目仲人の足どり軽し縁まとめ足どりは確かヤマメの冬を釣る足どりをさぐれば仕組んであつた畏信用組合十億位へともせず灰色と黒が浄化の申し合せ番犬が狂犬となる至近弾時効成立も時効になつて出でこない手柄話も時効になつて敗戦忌時効と知る花の命のいさぎよくエピソード時効になつてから話し時効まで耐えてひたすら爪を研ぐOBがこれも時効と語る業玉手箱時効になつても開けられぬ

馳贈川柳

稲田豊作報

浄美 玉水 健一 たくし 柳五郎 秋月 草風 紫峰 文平 博友 佐加恵 鮫虎狼 青銅 義親 美智子 哲郎 拓治 金吾 草風 豊作 和江 みつる 文古 柳香 珍顔 八恵子 行江 健太郎

共稼ぎ二人三脚家が夢

南無大師同行二人の小豆島

しあわせの味かみしめる老い二人  
人生の重荷も二人なら軽い

八尾市公民館川柳教室(10月分)

高杉 鬼遊報

親よりも友の意見がよくこたえ  
もひとりの自分が他人づらをする

他人なら放つて置きます反抗期  
他人事と思えぬ老いの死に別れ

日本人は乗っていません空の事故  
お向いの風呂をもらって風邪をひき

他人では解つてもらえぬ事のあり  
レジの前他人が見てるプライベート

裏切りが他人でなくてなお憎い  
母と息子が他人の様に歩いてる

他人様が何と言おうと夫婦です  
待ち合せしばし他人の顔で待つ

他人には評判のよい内弁慶  
こだわりを捨てて他人と和を保つ

半分わけ他人の取るのが多く見え  
他人にはわかって貰えぬ古い傷

言い訳をすれば他人に傷がつく  
夫婦けんか他人行儀で二日たち

病む妻の他人行儀な詫びを聞き  
他人には知られたくない傷もあり

バーゲンに他人のこはそっちのけ  
貸農園他人の野菜出来がよい

川柳たけはら

森井 菁居報

くちぶえがうまくなつたうれしいよ  
おみこがおもたかつたよあきまつり

小一歩 美

進一 美乃留

一眺 三香

泰成 英一

友一 はる

龍襄 トシエ

市子 初子

百子 道子

春子 幸枝

恵以子 君江

弘直 その

シマ子 知佐子

信一 章

ふみ子 久美子

久美子 久美子

幼典之 小一歩 美

おはなにはいろんなにおいあるでしょう  
私のことで母さんけんかして

地きゆうぎで見ると日本は小さいな  
季せつはずれのさくらにはちよつとかわいぞう

今日の星なんか変わった色に見え  
文化祭早くその日にならないかな

じいちゃんが病気で心配電話する  
運動会ががんばつて赤が逆転だ

運動会白組負けてくやしいな  
私の部屋いつもきれいな花がある

ミ四くチューンナップにこだわるぞ  
チャネルを変えれば怒るお父さん

カプト虫金魚の墓のおとなり  
土器をおし載いて沁みる酒

前だけを見つめだんだん楽になる  
人生双六昨日の敵は今日の友

保育器の命見つめていてあげる  
野の花はちさき自分の色に咲く

まだ虹が見えない僕の放浪記  
留守をする仲秋すすき活けておく

古日記めくれば過去の人ゆれる  
運動会どの子もみんな孫である

不用品捨てる勇氣の持てぬまま  
柘榴の実みんなルビーであったなら

掌を合わせ感謝感謝の日記書く  
手鏡に心の中をのぞかれる

うっかりですまない孫が見ています  
あれぐらいやっていけそと希望もつ

なんとなく唯秋風に吹かれたく  
その時はその時今日を生かさされて

菜園に種播いてから夢を追う

小二千 枝

小二孝 永

小三昌 之

小三史 子

小四孝 弘

小四裕次郎

小五視 幸

小五晴 美

小五慶 子

小六由 博

中三亜貴子

蘭幸 静水

菁居 清水

ヤスエ 一 枝

静風 喜美子

麻代 喜久恵

雪子 浪子

愛恵 栄子

光子 千恵

房子 千恵

康宏

砂の丘子供にかえつた裸足なり  
経済大国五輪の金はままならぬ

三猿でいこう孫には母がある  
白寿まで気分だけでも頑張りう

ルンロンと花笠音頭で若返る  
眼をとじるそして心の眼を開く

過ぎた日を忘れ平和な顔でいる  
うぬばれを少うし抱いて渡る橋

肩書が取れて肉親らしゅうなり  
生々流転丸い小石になりました

雨しとどゆつくりいなりあげを煮る  
秋風も優しくなりぬ女郎花

限りなき明日へ明日へと米を研ぐ  
確かめる歩幅となつて午前二時

思い出すひと少しあり秋の雲  
今日解けぬパズルは明日解けばいい

よくしゃべる人だと思ふねむい椅子  
虫の音よほんとは悲しい詩なんだ

忘れてた月の丸さよやさしさよ  
ポシエットに少女楽しい夢を詰め

国際時代老いには読めぬカタカナよ  
追伸のひとつと痛しおふくろや

砂の丘子供にかえつた裸足なり

経済大国五輪の金はままならぬ

三猿でいこう孫には母がある

白寿まで気分だけでも頑張りう

ルンロンと花笠音頭で若返る

眼をとじるそして心の眼を開く

過ぎた日を忘れ平和な顔でいる

うぬばれを少うし抱いて渡る橋

肩書が取れて肉親らしゅうなり

生々流転丸い小石になりました

雨しとどゆつくりいなりあげを煮る

秋風も優しくなりぬ女郎花

限りなき明日へ明日へと米を研ぐ

確かめる歩幅となつて午前二時

思い出すひと少しあり秋の雲

今日解けぬパズルは明日解けばいい

よくしゃべる人だと思ふねむい椅子

虫の音よほんとは悲しい詩なんだ

忘れてた月の丸さよやさしさよ

ポシエットに少女楽しい夢を詰め

国際時代老いには読めぬカタカナよ

追伸のひとつと痛しおふくろや

政巳

静佳

八重美

君枝

博子

康夫

節夫

太虚

比呂子

淑子

令子

笑子

白狐

一路

美佐雄

千代美

静火

新造

シゲヨ

観杏

近畿文字放送作品募集

題「味方」 橋高薫風選

3句 締切1月15日

ハガキに明記の上、左記へご投函下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

## 1 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 および 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	6日(金)午後1時から 揃う・子供・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 500円 投句料60円切手3枚
川 柳 わかやま	8日(日)午後1時から 朝・矢・広々	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口 川柳会	9日(月)午後零時半から よろこび・希望・感激・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 会費 500円 投句料 60円切手4枚
八尾市民 川柳会	11日(水)夕6時から 笑う・噂・謎・自慢	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 まつえ	14日(土)午後1時半から 家族・切札・運	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雄賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 名・一番・積む・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(水)午前10時から すじみち・公園・スタート・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円、懇親宴 3,000円、投句料 200円、各題2句
南 大 阪 川 柳 会	19日(木)夕6時から 敬う・空想・住まい・告げ口	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
富 柳 会	19日(木)午前11時から 冬眠・時計・年頃	房の家 近鉄南大阪線滝谷不動駅前 〒584 富田林市南大伴353 池 森子 句会費 3,000円 投句料 300円
南 海 川 柳 会	20日(金)夕6時から 始め・飾る・休み・帰る	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造下車西歩3分 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
堺川柳会	22日(日)午後1時から 槍・安い・屋台・野菜	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 ねやがわ	22日(日)午前11時から 集まる・ふり出し・礼 自由吟・相撲吟	寝屋川市国松公民館 京阪香里園から寝屋川駅行 又は仁和寺行バス国松南口下車、京阪寝屋川市駅 から香里園行バス国松北口下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 1,000円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	23日(月)夕6時から 始発・日記・繁盛・盃	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-33-11 津守柳伸
川 柳 東 大 阪	28日(土)夕6時から 町娘・迎える・スタート・炎(ほのお)	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (メ切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

## 本社 1 月句会

本社 1 月句会は黒川紫香氏の  
尼崎市文化功労賞受賞記念句会  
です。詳細は表紙裏に掲載。

川 柳 塔 社

2月の兼題 「跨ぐ」 「住所」  
「瓶」 「黻」

はびきの市民川柳会  
創立十周年記念句会

とき 1月29日(日)午後一時開場  
ところ 羽曳野市立陵南の森  
総合センター

陵南の森公民館2階ホール

宿題 (各題2句) 会費 一〇〇〇円

白 柳 野 宿 齒 川 柳 野 宿 齒  
笠原 吸江選 鳥 比良井荒助選  
中原比呂志選 年 貝 池田 淑子選  
河内 天笑選 内 岳人選 竹山 逸郎選  
板尾 岳人選 川 竹山 逸郎選  
野里 小路選 市場 金井 文秋選  
高田 律子選 引山 山本 翠公選

2月の本社句会は4日(土)

『夜市川柳』募集

第8回 「月」 田中好啓選

3句・締切1月末日

第9回 「話」 寺尾俊平選

締切 2月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-19-2

河内天笑方

堺川柳会

## ● 募 集 ●

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選  
水煙抄(10句)黒川 紫香選  
愛染帖(3句)橘高 薫風選  
茴香の花(3句・女性)小出 智子選  
「触れる」 大林 曲ん手選  
課題吟(5句)「頭(あたま)」 城角 鶏生選  
「座る」 平田 実男選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

四月号発表 (2月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選  
水煙抄(10句)黒川 紫香選  
愛染帖(3句)橘高 薫風選  
茴香の花(3句・女性)小出 智子選  
「箱」 仁部 四郎選  
課題吟(5句)「理想」 越村 枯梢選  
「始める」 岸野 あやめ選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友  
を限らず。

1月の常任理事会はお休み

定価 五百円(送料55円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

一九八八年十二月二十五日印刷

一九八九年一月一日発行

編集兼 西尾 巖

印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 691-1691 四番

振替口座大阪 8133368番

## 編集後記

☆己巳(きし)つちのとみ  
の年はじめやかに明けた。  
己巳は戊戌と同じに、よく  
似た字の重なる年だから強  
く印象付けられる。これは  
直原玉青画伯から本号の表  
紙絵を頂いたときに気付い  
た。

☆六十年前の己巳の年は、  
前年に続き日本共産党員の  
全国の大検挙があり、労働  
党代議士山本宣治がテロに  
刺殺された。また、ニュー  
ヨーク株式が暴落して世界  
的恐慌が始まった。

☆一方、寿屋が初の国産ウ  
ィスキーを発売し、東京の  
午砲がサイレンに変わり、  
婦人や少年の深夜業が廃止  
された。東京駅の八重洲口  
が開かれたのもこの年から  
で、進歩的な改革もなされ  
た。今年はどうなる年になる  
か、平穩を願うのみである  
☆今日十二月十八日編集後  
記を書いているのだが、後  
に天皇陛下のご容態がつか  
えている。日米開戦と敗戦  
の日、昭和と同じ年の私

にとり、人生の大きな分水  
嶺であった。川柳を知った  
のもまた分水嶺の一つであ  
り川柳生活の程にも大小幾  
多の分水嶺を経て来た。  
☆虚子の有名な句に「去年  
今年貫く棒の如きもの」が  
ある。東野大八さん執筆の  
「川柳群像」不二田一三夫  
から北川春巢へに、ふとそ  
れを感じたのである。

☆余談ながら、その虚子の  
句の記載に正確を期すため  
「現代俳句全集・高浜虚子  
集」を繰っていたら二十円  
が出てきた。昭和三十三年  
発行の本だから、当時の二  
枚の聖徳太子は現在の如何  
ほどの値打ちか。その年の  
十月、五千円札が新登場し  
百円硬貨が出来た。この二  
枚は二人の小さい孫のお年  
玉にも足りない。

☆今年には黒川紫香副主幹と  
西尾栗主幹のお祝いの会が  
予定されている。詳細は決  
まり次第発表するので、皆  
様の絶大なご支援をお願い  
します。  
☆吉川寿美さんの句だが、  
「明日の目覚めも昭和の御

代であるように」の思いは  
誠に複雑である。(薫)

▼新劇女優の長岡輝子さん  
を、年輩の方々はよくご存  
知だろう。この人の前のご  
主人は、金杉惇郎であつて  
同じ新劇の俳優だった。す  
こし話がややこしいが、ご  
両人の義兄のお母さんは、  
「国境を知らぬ草の実こぼ  
れ合い」の作者、井上信子

さん(剣花坊夫人)なので  
ある。別に川柳人の戸籍調  
べをしているわけではない  
が、大正モダニズムの流れ  
として、同じ大正生まれに  
は興味がつきない。

▼代々木の日本共産党本部  
へ出入りする人たちが、向  
いのビルからカメラなどで  
チェックしていた記事が、  
新聞やテレビのニュースで  
報道された。日本共産党は  
非合法団体ではない。政府  
が認められつきとした政党  
である。それを政府の一機  
関である公安調査局が、ひ  
そかに調査するとはどう言  
うことなのだろうか。私は  
日共黨員でもないが、かつ  
ての戦中、戦前の特高警察

を連想して嫌な気分になっ  
た。

▼今回のリクルートコスモ  
ス未公開株譲渡事件など敵  
していいことだろうか、絶  
対ゆるせることでもない。法  
律がどうであろうとも悪い  
とは悪いにきまっている。  
いくら萬言を費やしても悪  
が善に変わることはありえ  
ない。

▼反戦川柳人、鶴彬の名句  
「手と足をもいだ丸太にし  
てかえし」を掲載したのは  
前記、井上信子主宰の柳誌  
「川柳人」である。(き)

☆「編集後記」の中で私に  
与えられた分量は、12字×  
45行、つまり五四〇字であ  
る。原稿用紙一枚あれば、  
一応まとまっていたことが書け  
るとされてから決して  
少ないスペースではない。  
この貴重な紙面、編集者の  
一人としては、雑誌を少し  
でも良くするために使わね  
ばならないと思う。  
☆実は「原稿の書き方」と  
して、読者であり寄稿者で  
もある皆さんに訴えたいこ  
とはあるが、あまり大上段

にふりかぶるよりも、折り  
にふれて気のついたことを  
書く方がお目にとまるので  
はないかとも思った。ここ  
で言う「原稿」とは、活字  
として印刷することを前提  
とした文章を意味し、当然  
川柳作品もあてはまる。  
☆本社の柳箋には「右にベ  
ン・左に辞書・文字は楷書  
で正確にお書きください」  
とあるが、これはあらゆる  
原稿の最低条件である。文  
字の巧拙はともかく、選者  
・編集・印刷・校正のいず  
れの段階でも読みとれない  
ような文字は、およそ原稿  
の名に値しないことを銘記  
していただきたい。

☆次に辞書だが、これほも  
とより用字用語の正確を期  
するために欠かせない。辞  
書が普及していなくなった時  
代の古川柳に誤字・当て字  
が多かったのは仕方がない  
としても、現代の川柳は文  
芸であるからには言葉の意  
味を正しく把握し、適切に  
使わなければならない。お  
互いに自戒したいものであ  
る。(正)

昭和四十一年一月九日 第一種郵便物認可  
 一九八八年十二月十五日 印刷  
 一九八九年一月一日発行 毎月一日発行  
 創刊大正十三年 通巻七四〇号  
 川柳塔  
 月号

**KIRIN**

21世紀へ乾杯

**本格派。**  
**旨さの辛口。**

アルコール度数高め  
 キリツとしまるドライ。

キリンビール株式会社

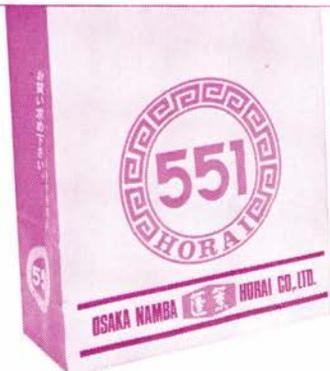
**キリンドライ**

標準的小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

**豚饅・焼売・焼餃子**



なんば戎橋筋本店  
 その他有名百貨店でどうぞ



TEL641-0551